
永遠に続く刻の中で

抹茶ミルク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠に続く刻の中で

【Zコード】

N6232M

【作者名】

抹茶ミルク

【あらすじ】

死んだ。神がいた。異世界。原作ブレイク。俺tueee。

異世界転生のテンプレ全開です。

ステータスを見て、さらにそれを好き勝手弄れる能力（+）を手に入れた神谷修司が様々な世界を渡り歩く物語。現在、オリジナル世界編です。

厨二、チートなどの言葉に嫌悪感がある方はブラウザバックをしたほうが宜しいかと思います。

初めまして、抹茶ミルクと申します。

実は別の投稿サイトに違う名前で小説を書いているのですが、息抜きも兼ねてこちらに投稿させて頂くことにしました。

別のサイトで書いてる小説の主人公が超弱い。

そしてほとんど成長しないので強い主人公が書きたくなりました。

息抜きとはいっても公開する以上、読んでくださる方もいらっしゃるわけですので必ず完結まで書く事を誓います。

更新も定期的に出来ればなお良いのですが現在ストックは途中までなのでそれに追いついてしまつとどうなるか分かりません。

そんな感じに不安もありますが読んでくださると嬉しいです。

以下、注意事項

- ・厨二
- ・チート
- ・主人公最強
- ・最低系(?)
- ・神(笑)
- ・他作品の能力・技など
- ・ハーレム(になるかも)

など地雷原が盛り沢山です。

抵抗がある方はブラウザバックをお勧めします。

それでも読んでやるか、という方はどうぞよろしくお願いします。

プロローグ

「お疲れ様です。お先に失礼します」

バイト先のみんなにそう告げて店を出る。

店の入り口のすぐ横にある駐輪場。そこに停めてある原付に鍵を差込む。エンジンをつけるとライトが点ぐ。ヘルメットを装着して店を出発。

バイト先の店から家まで片道一〇分。この辺りはそれなりに栄えてきたけどそれでもバイトの終わる時間になると閉まっている店のほうが多い。半分程度のところにある公園を抜けば街灯もあまりない暗い道が続く。正直に言えば俺の住むこの町は駅前以外は結構な田舎だった。

この町 特に俺の家の家の近くでは娯楽は少ない。ゲームセンターでさえ駅前までいかないといのだ。自転車で駅前まで行くのはなかなかに辛い。片道一〇分程度とはいえ坂道が多いからだ。そこで俺は、一六歳になつてすぐ原付の免許を取つた。校則違反なのだが学校は駅から電車で五駅離れているし、まずバレることはない。同じ学校でも免許を持つていいやつは結構多い。免許を取つたその日のうちに貯めていたバイトの給料で中古の原付を買った。そうすると行動範囲はかなり広がる。少しごらり遠くてもわざわざ電車に乗る必要がないし、電車で行くと駅から遠くて歩いては行けないようなところも簡単にいける。

行動範囲が広がつたところで金がなきや何も買えない。そんなわけで今でも俺はバイトを続けていた。大体週五、学校が終わってから十時まで入つて。休日もたまに一日中やつてたりする。それで月に八〇十万の稼ぎになる。

友達でバイトしてるやつは結構いるけど俺ほど稼いでるやつはそつはいない。今日も学校で「お前、そんなに働いてどうすんの?」と言わされたばかりだ。

俺がこれだけ働くのには理由がある。

なんせ俺の趣味には金がかかるのだ。

月に決めた分だけ趣味に使うようにしているため自分で制限できているが金さえあればどれだけでも使ってしまえるような趣味なのだ。

その趣味とは……いわゆるオタク趣味といつやつだ。漫画やアニメ、それ関係のCDやDVD、ブルーレイ。それに服にもそれなりに気を使ってる。季節の変わり目に母さんと買い物に行けば買ってくれるけどそれだけじゃ足りない。シルバーのアクセサリーとかも好きだ。これは高いから年に一つか二つ買うぐらいなんだけど、中学生から集めだして今では結構な数になっている。それに加えギターもやっている。こちらには最低限の金しかかけてない。エレキは従姉弟に貰った物だしアコギは父さんのお古。弦とかピックとかの消耗品を買うぐらいだ。機材は新しい物好きで飽きっぽい従姉弟がくれたりする。

そういう理由で俺はバイトを辞められない。特にゲームや漫画が買えなくなるのは辛い。中学時代バイトできなくてお年玉や小遣いを貯めて買ったのを大切に何度も読んだりやつたりして、ネットで二次創作を読み漁つてた。でも二次創作だつて原作を知らなきゃ楽しみが半減する。その原作を買うために金が要る。そうなると俺が高校生になつた時点でバイトをするのは当たり前のことなのだった。

朝起きて学校へ行つて学校が終わつたらバイト。そんな毎日。

家に着く。

原付の鍵を閉め、シートを被せる。

「疲れた……宝くじ当たればバイトしなくてもいいのに

いつも通りのことしかしてないのよ、今日はいつもより疲れた気がする。

「ただいま」

玄関で靴を脱ぐ。

リビングには母さんがいて俺の分の「」飯が残してあった。それを温めて急いで食べて風呂に向かう。

風呂を出た時点で十時四〇分。これから昨日録画した深夜アニメを観る。

「ひつや 今日も寝るのは四付変わるな」

テレビとレコーダーをリモコンで操作し時計を見て呟く。
明日も学校なんだけどなあ……。前回気になるとこで終わった
し観ないで寝るなんて選択肢はない。

そしてアニメを三本観て そのうち一本は一度観 時間が
一時に近い事を確認してから就寝した。

* * *

ふわふわする。

空に浮かんでいるような、水面に浮かべてあるような。

ただ、ふわふわとこつまでも「」のままいたくなる程の心

地良さ。

近くに気配を感じ、重いまぶたをどうにか上げる。

そこは白い空間だった。

目の前には金色の長髪で男にも女にも見える中性的な顔立ちの人物が見えた。

「かみやしゅうじ神谷修司で間違いないな？」

その人は目が合うとそう問い合わせてきた。

「はい。俺は神谷修司です」

そして、ぼーっとした頭で考える。

……これ、二次創作でよくある神様展開っぽいよな、と。
だとしたら、俺は

「俺は……死んだ？」

「そうだ」

「そつか……。死因はなんでしょう？」

二次創作で良く神に暴言吐いて暴力を振るうのがあるけどアレはダメだ。大体、初対面の人あんな態度がとれるはずがない……日本人的にはね。それにここは大人しくしておいた方が後々自分のためになるはずだ。

王道ではここで「こちらの手違いで殺してしまった。お詫びとして好きな能力を持つて転生させてやろう」とかなるんだろうけど何だよ手違いつて、有り得ないって。

「死因は心臓発作になる」

ほらね。

「そうですか……間違いじゃないんですね?」

「生まれたときからの寿命になる」

手違ひの線は完全に消えた。

なら今の状況はどうことなんだらう。

「死んだ人間は……みんなここに来るのでしょうか?」

「いや、死んだにしろ普通の人間はここには来ることができない」

それは俺は普通じゃないってことか?」

「それははどういづ?」

「お前の魂は私と同じ質を持つている」

「あなたと?」

「そして、その魂に普通の人間の身体は器として小さすぎた」

とても信じられない内容だった。

信じられない反面『キタ ツー』とか思つてしまつても
いる。

この、目の前の人と同じ質? 魂?

そう思いながら目の前の人物を眺める。

「あの、あなたは神様なんですか?」

気になつて尋ねる。目の前の人物は少し考える素振りを見せた。

「それが、お前たちの世界を創つた者のことを探しているな……」

そうだ

神様でした。

この人が神様で、そんな人というか神様と同じ質の魂を持つて
るらしい俺つて……なんなんだ？ 完全にオリ主なんじゃないだろ
うか。

「それで……俺はなんでここにいるんですか？」

「私が呼び寄せた」

「それは……何故？」

「世界を創れる者を神というなら、それが出来る存在は数多くいる

目の前の人間は語りだす。

「だが私ほどの質の魂を持つた存在は今まで現れたことがなかつた」

「そう言われても、俺はこの神様がどれほど凄いのか理解できない。

「そこでお前の身体を魂に合ひよつて創りえることにした」

「何のために……ですか？」

「…………それほどの魂、消えてしまふには惜しい」

何か変な間があった気がする。

「もし、創り変えたとして俺はどうなるんですか？」

「どうにもならん。好きなように生きていけばいい。ただ今までは
使えなかつた魂に合つた力が使えるようになる」

え、まさか……やつぱりこれつて……チート系と同じ展開？

「それってやつぱり元の世界には戻れないんですか?」「戻る事は出来るがあの世界ではお前はもう死んだ人間だ」

そつか…… そうだよな。

もう既に死んじゃつてるんだよな。

なら…… チートで異世界つてのやつてみたい。どうせ帰れないなら憧れてたけど出来なかつた事をやってみたい。多分、その為の力も手に入れられる。

「では、作り変えても良いな?」

「はい、お願ひします」

そう言つて俺は目を閉じた。

* * *

一瞬だつた。

身体が何か変わつていくのが自分でも分かつた。

身体が…… 軽い。

「終わりだ」

その声を聞いて目を開ける。

「もつ…… ですか?」

「ああ。これからお前を別の世界に送る

「別の……世界」

「私の創つた世界のひとつだ。そこでなら力の使い方を覚えるのにも丁度良い」

何かワクワクしてきた。俺が憧れのオリ主的な立場になれるなんて……感激だ。オタクとしてこんなに嬉しい事はない。

元の世界にも帰れるってことは俺もそんな力が使えるようになるはずだ。それなら続기가気になる漫画やアニメも心残りにならない。

「分かりました。送つてください」

俺は不安よりも期待を胸に目を瞑つた。

「それでは……送る

その言葉と共に、俺の身体は何か暖かいものに包まれた。

プロローグ（後書き）

小説家になろう使いやすいですね。
感想頂けたら嬉しいです。

第一章 一話 把握

暖かいものに包まれた一瞬の後、目を開けるとそこは別世界だった。少なくとも今まで俺がいた場所ではない。

一度死んではいるものの一通り確認してみると体は元のまま変わつてなさそうである。

この場合、今の状況は転生なのだろうか、それともトロップと言われるものなのか判断出来ない。

まあそれでも転生系のテンプレを経験した俺はさしたる混乱もなく、手始めに自分の状況の確認を始めた。

「えへっと……持ち物は……」

言いながら服のポケットに手を突っ込んで確かめていく。

「あれ……何があるぞ」

ズボンのポケットに入っていた何かを取り出してみると、それは携帯電話だった。

「……携帯？ 寝るときには持つてなかつたはずなのに」

そこで気付く。

そういえば自分の着てる服……これも寝ているときの物ではない。最近一番良く着る外出着だ。

どうなつてるんだと不思議に思うものの深く考えて多分意味がないだろ？と思考を切り替える。

「電源は……つくな。でもやつぱり圈外か」

携帯の電源をつけて画面を確認する。

色々操作してみた結果、これは確かに俺の使っていた携帯だったが電話帳やブックマークなど登録していた情報が悉く消し去られた。メールや履歴も何もない、まさに新規で買つたばかりの様な有様だ。

「どうせなら見た目も綺麗に新しくしてくれればいいのに

長年使っていた携帯のため、見た目には結構傷が目立つてるので。

それでも、使い道もなさそうなんだけどどうしてこれが服に入っていたのだろうか と思つたとき、突然携帯の着信音が鳴り響いた。

「うおっ！ なんだ、って……メール？」

そこにはメール受信の文字。

圈外なのに何故……という疑問はあるがとりあえず受信ボックスを開いてみる。

from
ゴッドさん

ゴッドさんて……神様だからゴッドさん？

もしかしてテンプレ転生物に良くあるハッチャケた感じの神様だったのか？ だとしたら俺の前にいたときの性格は演技だったのか

……。

というか電話帳には誰も登録されてなかつたのに何で差出人に名前があるんだろうかと不思議に思った俺は一度メールを閉じ、再び

電話帳を確認……やつを今まで無かつたはずの「ヒッヂさん」が表示されていた。

もし本当にあの神様がハツチャケた神様ならあまり深く考えても意味が無い気がする。そう思った俺は考えるのをやめ、再びメールを開ける。

件名

能力と特典についての説明

なるほど。これ以上ないほどメールの内容が良く分かる件名だ。とりあえず本文を見てみるか

本文

急にそこに送られたことで何も分からないと思つ。
そんなキミに能力と特典について説明しよつ！

これ、完全にハツチャケた神様だ！
何か愉しんでる感がひしひしと伝わってくる文面だ。
まあ、いい。続きを読む。

まずは基本、自分の能力を把握しよう！

これは簡単。頭の中で『ステータス表示』と念じればいい。

これで自分の能力が把握できるぞ！ まずは実際にやってみよう。

……やってみようか。

(ステータス表示……つと)

念じてみたらあら不思議。田の前にウインドウが現れる。

名前	神谷 修司
種族	神
職業	神
称号	神見習い
レベル	LV 1
HP (体力)	26 / 26
MP (精神力)	15 / 15
STR (力)	6
VIT (耐久力)	5
INT (知性)	52
AGI (素早さ)	4
DEX (器用さ)	32
LUC (幸運)	23
G P ゴッド	0
S P スキル	0
A P アビリティ	0
C H R カリスマ	2

こんな感じだった。

RPGとかやる人間なら大体は見たことのあるステータス表だった。一部訳の分からないステータスもあるが。

「…か俺…完全に現代っ子ぽいステータスだな。平均が分からないからあれだけど、身体能力は軒並み低くて頭でっかちなのは部活も入らず学校の勉強とバイトだけの生活をしてたからかな。

自分のステータスに軽くガツカリしつつ、ステータスウィンドウを開いたままメールに視線を落とす。

上手く出来たかな？ 出来たとして話を進めよう。

種族辺りに関してはキミの知識の中で一番近いものを選んでおい

た。

当然だけどレベルを上げることでステータスも上がるよ。
そして特典その1！ 頭の中で『チート』と念じてみて。

チート……ね。

（チート……うおつー！）

チートと念じた瞬間画面に変化が起きた。
なんかステータスを書き換えられるっぽい。
試してみるか……。

（HPを50に）

そう念じた瞬間、ステータスのHPの表示が50に変わる。
なんだか感覚も先ほどより疲労が少なくなつたと感じる。
これは確かにチートだ。メールの続きをはどうなつてゐる？

さらにそのチート能力ではステータスの数字以外にも書き換えられるものがあるぞ！

『技能』または『スキル』と念じてみると

念じてみる。

ウインドウが切り替わり、取得技能・スキルのページになる。
今はまだ何も習得していないようだ。

そのなかに技能取得とスキル取得という項目があった。それを見てみると技能の方は『取得経験値上昇』や『不老』、さらには『不死』など、スキルは魔法や体術の技などが表示されていた。スキルの方は、さらに『この世界』やら『神の能力』、さらには俺の知つてる創作物がタイトル別に表示出来るよつだ。

そこで取得のページに行こう。

そこでは様々な能力が取得できる。技能はAP、スキルはSPを
使う事によつて取得できるようになつてゐる。

今キミがいる世界の技術ならそれ以外にもその世界の正攻法でも
取得できるや。

修行とか特訓とかしてつてことか。

それはそれで面白いかもしれないな。

そこでチートと念じればAP・SPに関係なく全てを覚える事が
出来るんだ！

それは凄いな。

正しくチートじゃないか。

次にGPの説明なんだけど……これは実際に見てもうつたほうが
早いかな。

最後に下記のURLに接続してみよう。

ちなみにその携帯のバッテリーは無限だから安心してね。

それでは異世界ライフを楽しみましょ。

あつ、私は觀察する事はあるかもしれないけど基本干渉はしませ
んのでご自由にお楽しみください。

その後、URLが書いてあり、メールは終わつていた。

大体把握したところでメールに添付されたサイトに接続する。
またしても圈外にも関わらず接続された。

……。

……。

目が……目が疲れた。

一通りサイトを観て回ったんだけど何で女子高生っぽいキラキラ、チカチカしてるサイト構成なんだよ！

ま、大体のことは分かつたけどな。

このサイトでは貯めたG P「Gラッシュドボイント」を必要量支払う事で便利グッズを手に入れることができるらしい。数点みたけどすぐにでも欲しいのは、袋（ドラクエでいう袋で何でも入るしどれだけでも入る。しかも中は時間が止まつていて劣化がない）とP C（神製作。あらゆる世界のページにアクセス出来、あらゆる世界の創作物を見ることが出来る）。この二つはぜひ欲しい。

P Cにはゲームやり放題だし続きが気になつて漫画やアニメも観れる。もしこの先世界を渡れるようになつて原作がある世界に行くことになつても原作知識をいつでも確認出来るようになる。

袋は言わずもがな。こんなに便利な物はない。しかも「デザインも色々選べる」ようで麻袋的なダサイものではなかつた。

「なんか……覚える事が多くて結構疲れたな」

呟いて頭を振る。

状況も把握したしそろそろ移動を開始しようとと思う。よく考えたら俺はまだ森の中に突つ立つたままだつた。町、最悪ただの開けた場所でもいいから落ち着けるところに移動しよう。

「つと……その前に」

俺はステータス表を呼び出し、ステータスを全て50程度まで上げた。

こんなどことも何が出てくるとも知れない森で先程までの低いステータスでは不安過ぎる。

が、上げるのも一気に上げず少しづつゆっくりと上げていいくことにした。

一気に上げるのも確かに俺tueeeeとか憧れるけど不安もあるからだ。その不安とは力の制御について。一気に上げるところまで上げたとして上手く制御できるのかと言われば『出来る』とは自信を持つて言えない。下手したらちょっと道を尋ねようと街行く人の肩を叩いたらその人が『パンツ!』という事にもなりかねない。

だから少しづつ慣らしていくことと思つわけだ。

とりあえず全ステ50で慣らしつつレベル上げ。慣れたら徐々にチートでも上げていくのが確実だと考えた。

ある程度の方針も決めだし、そろそろ本当に森を抜けるために行動しよう。ステータス画面を終了し、俺は歩き出した。

* * *

歩き出して一時間は経つただろうか……途中手に入れた手の小さなサイズのこん棒を手に森を進む。

一向に森から抜け出せる気配はない。辺りも段々と薄暗くなってきた。

多分完全に日が落ちてしまつまあと一時間半~一時間といったところだろう。

暗くなる前に森を抜け出さないと厳しいな。

「『Jの世界』、モンスターとかいるのかな……一応武器は持つてるけど

こん棒を握り締めて呴く。

チートでステータスを上げたとは言え、やはり怖い。

でも、この世界に留まるにしても他の世界に行くことになつても戦いには慣れておいた方がいいだろ。

そう考えるとモンスターがいな世界だつたら不運かも。最初から人間を相手にはしたくないし。いつかはそういう事もあるんだろうけど最初に命を奪うのが人間つてのは精神的に結構キツイと思う。慣れるつて訳じやないけどモンスターとかで経験しておいた方が絶対に良い。

と、そんな事を考へていると微かに水の流れる音が耳に伝わる。そういえば喉も渴いてきたな。そう思つと自然と水音に向か歩くスピードも速くなる。

十分ぐらいで水音の元に辿り着く。

一メートル程の小さな滝と、そこから続いていく小川。

そこは俺の目指していた開けた場所でもあり滝のそばには洞窟のようなものもあつた。

ただその洞窟は奥行き五メートル程度でダンジョンと呼べるものではなかつた。ただ雨風を凌ぎ、落ち着いて考へるには最適な場所だつた。

何かの巣かと思い中を確認してみるが少なくともここ最近何かが足を踏み入れた形跡は見当たらなかつた。

水を飲もうと滝に近づくが、ここで重大なことに気がつく。

「コップがないし手で飲むか……あつー、洞窟で一晩過ごすとしても火を点ける道具なんてないぞ」

真つ暗な洞窟で一晩。森からは獸の声。想像しただけで怖いぞ。何とかしなきゃ……ってそうだ！

こんな時のためのチート（反則技）じゃないか！
俺はすぐさまウィンドウを開き取得画面へ進んだ。

「まずは火、だよな。それだと魔法？　この世界のページを開いて
みるか」

開く。

「お、あつた！　いきなり見つかったな。最初に表示されてるって
事は簡単ってことか」

『魔法 ファイア・火をともす。攻撃魔法としては使えない初心者
魔法。 SP 2』

丁度良すぎ！

なんて俺の条件にピッタリな魔法なんだ！　即効で取得。チート
なのでSP0でも取得できるのだ。

「うおっ、何だこれ！？」

取得した瞬間に使い方が頭に流れ込んでくる。

確かに今なら使えそうだ。力の使い方、自分の魔力も感じられる。

「あとはコップとかあれば便利だよな……魔法で出す……いや、創
る？　なら錬金術とか？　錬金術ならこん棒よりマシな武器も作れ
るし何かと便利だよな……」

くつそ！　こんな事なら積んであつた鋼の錬金術師（古本屋で二
十五巻セットで買った）読んどくんだったぜ……。今の俺では自分
の読んだ事のない創作物の技術は覚えられない。やはりGPで交換

できるPICOは早めに手に入れなくては。

それより今どうするか。鋼の鍊金術師はダメで俺の知ってる創作物でそんな都合の良い……あつた！

「ゼロの使い魔！ 土メイジが鍊金使えるじゃないか。しかもイメージでかなり精巧に作れるんだよな」

俺はすぐにゼロの使い魔の鍊金を取得した……したのだが、決定的な欠陥に気付く。

「ゼロ魔の魔法って杖ないと使えなくない？」

頭に流れ込んできた使い方に杖を媒介にするという情報があつたから気付いたのだが、原作では杖と契約つて言つても詳しく語られてなかつたような気がする。

振り出しに戻つた？

「くつそぅ……駄目でもともと、一か八かやってやる。鍊金ー！」

俺は地面に向けて手をかざしコップをイメージして鍊金の魔法を使つてみた。

地面が少し光つたと思うと、そこそこ思い描いたコップ（というかマグカップ）が出現した。

「嘘つ！ 出来ちゃつた！？」

何で！？ 杖とかないのに……俺が神的な何かだからか？ そういう事にしておこう。

俺は作ったコップを手に滝へ。飲んだ水は今まで飲んだどんな水よりも美味しく感じた。汚れてない天然水だし。地球ならペットボ

トルで高く売れそうだ。

水を飲むとだいぶ落ち着く事が出来た。

鍊金で今度は針と糸を作り出し、土を掘つて餌を探す。

何匹か捕まえて小川で釣りをすると小魚を三匹釣り上げる事が出来た。

洞窟で焚き火をし、釣った魚を焼きながら鍊金で細身の剣を作り出す。

軽いし、今の俺の力でも軽々と振り回せた。

魚を食べると疲労からか眠気が襲つてきた。

睡魔に襲われつつも寝る前に糸と鍊金で作り出した鈴を洞窟の入り口に仕掛けておく。仕掛け終わったら焚き火に数本の薪を足して、睡眠に入った。

この時、俺は警戒しているつもりでもまるで分かつていなかつた、基本的なことなのにその考えが抜け落ちていた。

モンスターだって生きている以上、獸同様に水場に集まりやすいんじゃないかつてことを。

第一章 一話 把握（後書き）

プロローグのみなのが気に入り登録とかあってビックリです。
何か嬉しい嬉しいっすね。

二話目投稿。

説明回です。

それにしてこの主人公チートである。

あと一話の文字数つてこの程度で大丈夫ですかね。
長いのか短いのか丁度良いのか。

VerticalEditorで書いてるんですけどそのままページ
で投稿すると段落とかが変になる。
ストーリーライターに変えようかな。

第一章 一話 慎重

あれから五日程経つて　俺はまだ森の洞窟で過ごしていた。この世界に来て初めての夜をこの洞窟で過ごした後、一応森を出ようと試みたのだ。試みたのだが……舐めてたね。ハツキリ言って異世界舐めてた。

洞窟を出た瞬間、そこには魔物の群れが存在していた。

姿形は何といえばいいのだろう……ゲームで言えばスライムになるのか。ジエル状で目と口がついている。某ドラエミみたいな可愛いもんじやない。グチャツとして非常に気持ち悪い。確かスライムつて洗濯糊とかで作れたけど、作るとき水の分量を間違えて失敗してしまった感じだ。しかも色は紫。

一匹一匹の大きさは大した事はないのだが、いかんせん数が多い。うじやうじやという言葉がピッタリだ。小川を囲んで水でも飲んでいるのだろうか。小川のそばにいた魔物が移動するとそこへ別の魔物が移動する。

突然の事態にビックリして足音を立ててしまつた。その時、魔物たちの視線が一瞬でこちらに向く。そして一番近くにいた一匹が俺に向かつて飛び上がり、突進してきた。

「う、うわあつ！」

思わず顔の前で両手を交差させて目を瞑つてしまつ。

ぽふつ。

衝撃は思つていていたよりも遙かに軽いものだった。が、それよりもおぞましい事態が発生した。

目を開けると突進してきたスライムが防御した腕にくつついてい

るのが見える。そしてそれは……「チャア」と粘り下のある感じに腕に張り付いているまま、少しづつズルズルと下に下がつてい、最後にはベチャツと地面に落ちた。

腕には一チャネバな感覚と湿っぽい何かが残つた。

「…………つー?」

声にならない。

全身に鳥肌が立つた。

死の恐怖とかじやなく、ただ単に気持ち悪い。

「キモツ…………でも痛く、ないな」

腕を見るとスライム（？）の残りかす的な物はついてるけど傷とかはひとつもない。

スライムつてことを考えると多分RPGで言つ序盤の弱い魔物だと思ひ。だとしても傷ひとつないってのはステータスを弄つたおかげなのかもしれない。

「上げといてよかつたわ、ほんと。……攻撃力とかはどうなんだろう?」

気になつた俺は先ほど突撃してきたスライムに向けて剣を振るつた。

剣を鍊金したとき軽いとは思つたが、実際魔物に向けて振つてみると自分でも驚くほど剣速が出た。

スライムは「ピギヤツ！」とひと鳴きして消えうせる。

「おお、Jリーチも消えた」

同時に俺の腕についていたスライムの一部も消え去った。

「それにしても……一撃か」

本当にステータス上げておいてよかつたぜ。これならこのスライムの数が相手でも何とかなりそうだ。

「よつしゃ、行くぜー！」

俺は剣を握り締めてスライムの群れに突っ込んだ。

* * *

「はあ……はあ……あー、しんどい！」

だ。

ダメージはほとんど無いし、全部一撃で倒したんだけど、疲労は溜まるようで相当疲れた。それでもステータスを上げているおかげで学校でやったマラソン大会ほどは疲れてない。多分それ以上には動いてるんだけど。

息が整ってきたところで考える。

ステータスを上げておいたおかげで今回は乗り切れた。もし上げてなかつたらと思うとぞつとする。

それと、戦っていて気になる事もあった。

(ステータス表示、つと)

確かめるためにステータスウィンドウを出現させる。

名前	神谷 修司	種族	神
職業	神	称号	神見習い
L	HP (体力)	50 / 86	レベル 7
V	MP (精神力)	50 / 69	
S	STR (力)	62	
T	VIT (耐久力)	71	
R	INT (知性)	87	
A	AGI (素早さ)	68	
C	DEX (器用さ)	60	
H	LUC (幸運)	81	
P	CHR (カリスマ)	52	
G	AP (アビリティ)	52	
P	SP (スキル)	52	
1	GP (ゴッド)	100	

やつぱり上がったか。

戦闘中疲れは確かにあるんだけど、それ以上に動きが良くなつた気がしたのだ。

ステータス表を見るに、LUCの上がり方が他のに比べ早い。

APとSPは多分倒した敵の数だと思う。GPはわからぬ。丁度百上がつてゐるけど初めての戦闘だからか？ そういう事にしておこう。どうすれば貯まるかの説明もなかつたし何がある」とに入るのかもしない。

上がったステータスから考えて、今の俺は普通のレベル10台後半辺りぐらいのものだと仮定する。

それだけあれば森を抜けて人里を目指すには十分か？

いや、だけど『もしも』のことがあるかもしれない。今まで生きてきた世界と違つて旅をすれば死ぬ可能性だって高いはずだ。慎重にいくべきか。幸い洞窟という寝床もある。水もあるし火もおこせる。

問題は食料か。魚は昨日釣れたから大丈夫。あとは……動物を狩るか？ 捕まえられさえすれば、バイトで鶏は捌いた事あるし多分他の動物も出来ると思う。

植物は怖いよな……毒とか。

見分ける方法はないもんか。技能でそんな感じのはないかと考え出したままのウインドウで探す。

『薬草採取・薬草を見つけられる 必要AP5』

薬草なら……食えるか。

APも問題ないし……取得、と。

APを使って『薬草採取』を取得する。取得技能のページに『薬草採取』が表示された。

薬草採取 L\`V

ん、レベル？

技能にもレベルがあるってことか。じゃあレベルが上がるほど出来る事も増えるんだな。薬草採取はL\`Vの後が線になつてからレベルが上がらないってことか？

他のも取つてみるか。

そう思い、必要になりそうな技能を探す。

『危険察知』
『気配を読む』

まずはこの一つを選んだ。APが足りなくてチート使つたけど。命に関わってくるから覚えておいた方がいいと思って。これはどちらもレベルが設定されていてどちらも今はレベル1。

今は今のところめぼしい物は見つからなかつたのでウインドウを閉じる。これから何か必要になつたときに応じてどんどん取得していくこつと思う。いざとなればチートで全部取得してやればいい。ど、こうことで、とりあえず薬草採取の技能の性能を見るために食材集めを始めるのだった。

* * *

それから四日。

これで冒頭に戻るわけだが、この五日でかなり戦闘に慣れだ。この森にはスライム以外にも狼型の魔物とデカイ蜘蛛の魔物がいた。狼は見た目怖いけど何とかなつた。でも蜘蛛は見た目でまず無理だ。基本見かけたら逃げていた。何度も戦う事になつたが何とか勝てた。ただ蜘蛛の攻撃でダメージは受けないけど奴は毒を持っていた。このとき『薬草採取』を取得しておいて本当に良かつたと思った。

この『薬草採取』だが、最初考えていたよりずっと便利だつた。薬草と毒草を見分けるのは勿論、食べれるか食べれないかまで見分けることができたのだ。このおかげで食べられる木の実やきのこ何かを見つけることが出来て食生活に潤いをもたらしてくれた。

それから狩つた動物を捌くのにも抵抗がなくなつた。最初は生き

ていたのを殺して捌くのに少なからず抵抗があつたが今では綺麗に捌いて食べる。干し肉も作った。サバイバルスキルがとてつもなく上昇した。あ、それと動物と魔物は簡単に見分けられる。死んだ後に消えるか消えないかだ。

レベルも上がつてほとんどのステータスが百近い。ただし運だけは百五十近いのだが……。

APなどもかなり増えている。そこでひとつ新たな技能を取得した。

その名も

『薬剤調合』

その名の通り、薬剤を調合する。レベルは1。今のところちよつとした傷薬とMP小回復薬、毒消しの薬。それと一日酔いの薬に風邪薬、栄養ドリンク的な物まで調合出来る。

多分レベルが上がつて最終的にはエリクサーとか蘇生薬とか作れるようになるはずだ。万能薬とかも。

鍊金もかなり使いこなせるようになつてきた。多分サイトと決闘した時のギーク程度には使えるはずだ。

GPに至つては狩る、捌く、初めて見た魔物を倒す等、ことあるごとに上がつていつて、今では千を超えている。

袋とPCがどちらも1000ポイントで交換できるのでもう少し貯めて一緒に交換しようか悩んでる。

悩んでる理由は袋についてだ。これつて空間魔法を習得したら要らなくね? ってことだ。ただ空間魔法は必要SPが高いので普通に取得するには相当な、多分年単位の時間が必要になる。チートを使えば今すぐ取れるけど。

まあ、あつて困るもんでもないし貰つといつかな。

それせめておそれから遂に森を出ようと思つ。

正直、安全に森を抜けるためとはいへ、慎重になりすぎた感がある。とはいえたままステータスは上げていこうと思つてゐるが、その前に森は出たい。布団で寝たい。ちやんとした料理も食べたい。

「それじゃ、出発しますかね」

俺はここで取れる薬草で作った薬類と使こなせるようになつてあた鍊金で新調した剣を持ち森を出るために歩を出した。

洞窟を出発して歩く事数時間。

何度も同じような場所を通り、道なんてないし方向感覚なんて森に入つてすぐになくなつた。この時初めて小川を辿つて行けば良かったんじゃね？ と、思い至つた俺は相当考えなしだと思つ。

が、数時間後、やつとのことで人が手を入れたような歩道に出来る事が出来た。

その歩道を勘で左に歩いていく。何か、そつちの方が森を出れる気がしたからだが根拠はない。

「俺つて結構凄くね？」

勘で左を選んだがどうやら正しかつたようだ。もしかしたら「こ」が上がつてゐるのも関係しているのかもしれない。

森を出ると遠くには山が見える……だけで後は見渡す限りの草原だつた。俺のいた森は結構大きいらしく今の状況では森の向こう側は見ることが出来ないようだ。

「さて……」

呟く。

「町は……どこだ？」

絶望を込めて。

それらしいものは見当たらぬ。見渡しても人を見つけることも出来なかつた。

森を抜ける間に口も大分傾いてきていたので、見当ならないとい

「」とは今から町を探しても日が沈むまでに見つけることは難しいと思つ。そのため今日はこの辺りで野宿する事に決めた。

良さ氣な場所を見つけ薪を集めて火をつける。魚や肉を干した保存食を軽く炙つて食べる。初めて作ったにしてはなかなか上手く出来ていた。

食べた後、少し剣を振る練習をしていたら空はすっかり暗くなつていた。

野宿なんてこの五日で慣れたと思つていたが、洞窟と違つて完全な外のためなかなか寝付く事が出来なかつた。

* * *

まぶらみの中、身体が揺すられているような感じがした。

「 いつ いちゃん つーー 」

揺さぶられながら声をかけられているようだ。
……なんだよ、人が気持ちよく寝てんのに。
そう思いながら目を開ける。

「 おお！ 起きたか兄ちゃん！」

田の前には農民ぽい服を着ている隕面のおっちゃんがいた。

「え……ええ？」

寝起きで頭が回らない。

つーかこの人、誰？

「大丈夫か？ こんなところで寝てつから死んでるかと思つたぞ」

おつさんは『テカイ声で言つた。

「はあ……こんなとこ?..」

言われて辺りを見回す。

草原と森が見えた。

「そつ言えば野宿したんだつけ

やつと脳みそが働き出したよつだ。

「野宿……野宿だつて！？」

おつさんが何やら驚いていた。

「そつですけど……」

何かおかしいのだろうか。この世界なら野宿も珍しくないと思つたんだが、珍しかつたのか？

あと、一応初対面だしちゃんと敬語は使つておぐ。

「兄ちゃん一人でかい？ 連れはいないのか？

「一人ですね」

「よくそれで寝れるもんだな！」

おっさんは俺からしたら大げさに驚いた。

……この世界の人は一人じゃ寝れないのか?
といつことは

「うづえ……」

おっさんが誰かに「怖いから一緒に寝よ」 と枕を持って言つて
いるシーンを想像してしまつた。相当気持ち悪い光景だつた。

「……どうした? 気分でも悪いのか?」

「いや、何でもない……です」

おっさんは心配そうにこちらを見た。

「この人、いい人っぽいな。

「それより一人で野宿なんてして魔物に襲われたりしなかつたのか
い?」

「ああ、そう言つてね。

「まあ……襲われてないですね」

「そいつあ運が良かつたな! 森の近くは魔物も出やすいからな!」

やつぱりそつこつもんなのか。

でも襲つてくるとしても森で戦つた事のある魔物より強いのがい
きなり出てくる事はないよな?

「まあ、森で出てくる程度の魔物なら問題ないですが」

俺がそう言つとおっさんは「なんだつてえーー」と、今まで一

番驚いていた。

「兄ちゃん、魔物と戦つたのか！？」

「戦いましたけど……」「

「ほお、兄ちゃんがねえ……。兄ちゃん、もしかしてギルド員かい？」

？」「

ギルド！

やつぱりあるんだな。それは是非情報が欲しい。

「ギルド？ 別に違いますけど」

「じゃあ一般人だとでも？ 馬鹿言つちやいけねえよ兄ちゃん！
一般人が魔物とやり合つなんて……」「

そんなにおかしい事なのか？ でもあいつらそんなに強くないし、
ステータス弄つてなくとも何とかなりそうなんだから。

「そうなんですか？」

「おうよ！ 少なくとも一般人が一人で魔物と戦うなんて無謀だ」

「それは……なぜ？」

「一般人でもこの森のスライム相手ならある程度は戦える。だが、
殺せるのは魔力を持つた人間だけなんだ」

と、いうことらしい。

それは、この世界には魔力を持つた人間と持たない人間がいるつ
てことか。

でも、俺戦いで魔力なんて使ってないぞ？

「それにしても一人で戦つたとか……ホラじゃないのか？」

俺が考え事をしていると、おひさんは何か疑つてる眼差しを向けてきた。

「ええ、まあ」

曖昧に返事をする。

「それで、何で兄ちゃんはギルドに所属していないんだい？」

「魔物を倒せる人間はギルドに入るものなんですか？」

「おいおい兄ちゃん。どんな田舎から出てきたんだ？ そんなんのは常識だろ？」

常識らしい。

何か、今ので余計警戒されたっぽい…… じいじは何か上手く言い訳しなければ。

「えーと…… ですね」

異世界からきました、何て言つても信じてもらえるとは思えないし…… どうしようか。ここは無難に気付いたら森にいたことにしよう。

「実は気がついたら森にいました…… 之前以外は覚えてないことが多いんですよ」

記憶喪失つてどんだけベタなんだよ。信じるわけが

「記憶喪失かい！？ じゃあ、じいじがどこかも分からなかつたりするのか？」

信じた！？ いや、有り難いけど。

「はい。全然。」数日森を彷徨つて、昨日やつと出ねたばかりでして

「よく、生きてたな。……よし、兄ちゃん！」

「はい？」

「家に来るか？」

なんだと？

「……いいんですか？」

「ああ。行く当てもないんだろ？」

「……はい」

俺は素直に返事をする。行く当てもないのは確かだし、この世界の情報が少しでも欲しい。

「よし、家のある村はすぐ近くにある。話はそれからだ」「分かりました」

そう言つなり歩き出していく先導するおつをついていくのだった。

おつさんについてこつて一時間以上は歩いただろ？ たどり着いたのは小さい村だった。その中のひとつ家の前に着くとおつさ

* * *

んが言った。

「あ、ここが家だ。遠慮せず入ってくれ」

促して扉を開ける。

「おかえり、父さ 誰ですか？」

それに従いお邪魔する、と中から声と共に見た田十一～十三歳ぐらいの少女が駆け寄ってきた。

「おひ、サーチャ。帰つたぞ！ いつまでもお前、名前は？」

おひさんはサーチャと呼んだ少女に俺を紹介しようとつい、まだ俺が名乗っていなかつた事に気がついた。俺もおひと云はば言つてなかつたなと起きてからやり取りを思い出す。

「修司です。神谷修司」

名乗る。

「カミヤショウジ……？ 変わった名前だな」

おひさんが不思議そうに呟つ。

やせぱり西洋風なのか？ だつたら

「えへつと、多分こいつ風に言えばショウジ・カミヤになります。ショウジが名前なんでそれで呼んでくれればいいです」

「おお、やうか！ とこいつと/or サーチャ、ショウジだ。今日は家

で面倒見るにこしたからよろしくなー。」

「ど、どひも」

俺はサー・シャ・ちゃんに挨拶する。

「はあ……えつと、良く分かりませんが上がつてください」

突然親が見知らぬ男を連れてきたと思えば面倒を見るなんて言い出して、状況がまだ理解できない様子だつたが、それでも家に上がる事は許してくれた。

それから中でサー・シャ・ちゃんの入れてくれたお茶を飲みながら話す。おっさんに言つたようにサー・シャ・ちゃんにも説明した。

「そつだつたんですか……なら好きなだけいてくださいね」

と、輝くような笑顔で言つてくれた。とても良い子だ。
サー・シャ・ちゃんは明るめの栗色の髪が肩まであって、緩やかなウエーブがかかっていた。髪と同じ色の瞳はクリクリと大きく間違いなく美少女（美幼女？）であった。

「二人とも……ありがと」

俺はおっさんとサー・シャ・ちゃん一人に対して頭を下げる。

「やめてくれ兄ちゃん。俺がしたいからしてるだけだ
「そうです！ 頭を上げてください」

二人の優しさに思わず涙が出そうになる。良い人すぎる。
それにしてもサー・シャ・ちゃんは歳の割にしつかりしてるな。

昼にサー・シャちゃんが作ってくれたご飯を食べ、おつさんは畠仕事があると家を出て行つた。俺は特にやる事もないためサー・シャちゃんに村を案内してもらつ事になった。

一通り案内してもらつたが、何にもねえ、としか言いようがない。家と畠しかない。あとは村のみんなが集まるような広場ぐらい。何にもないということは、案内はすぐに終わつてしまつという事で……案内後、家に戻りサー・シャちゃんにこの辺りの地理について聞いていた。

ここから歩いて三日程で村の人も物を売り買いするために行くと
いう町があり、その町からさらに五日ほどで王都に着くらしい。
結構遠いな……まあ、歩きなら仕方ないか？

そういうわけで、内におっさんのが仕事から戻ってきた。

「ただいま…… はあ」

仕事から帰ってきたお父さんは見るからに元気がなかつた。

「父さんどうしたの？」何かあつた？」

サー・シャチャゼンもすぐ「おひさん」の顔に気付き問い合わせる。

「烟に」

おひれんせ海しアリ語し玉す。

「魔物がでやがつた」

「ええつー!?

サー・シャちゃんが驚く。

「作物は全滅だ、……収穫前だつてのに」

「……父さん」

その言葉で一人とも暗くなつてしまつた。

「他の連中も相当被害にあつたらしい」

「そんな！？」

村の畠が魔物に襲われたつてことか。

収穫前の畠つて生活がやばくなるんじやないか？

「今までこんなことなかつたのに、どうして……？」

「さあな。魔物の考える事なんてわかるかよ」

今まで魔物が畠を襲う事なんてなかつたらしい。

「まあ他の地域じゃそういうことがあつたなんて噂も聞くし、たまたまウチの村は運が良かつただけかもな」

それつきり二人は無言になつてしまつた。正直、部外者で知り合つたばかりの俺が畠や村の事に口出せる事なんてない。
だけど俺にも出来ることはある。

おっさんとサー・シャちゃんには恩もある。
だから

「俺がその魔物を退治する」

一人に向かつてそう告げた。

折角のチートな力。こんな時に使わないでいつ使うんだっての。

アンケートに「ご協力ありがとうございました！」

結果としては当分このままオリジナル世界を続けていいのかと思いません。

主人公が強くなる過程を省かず、この世界で強くしてから別世界へ行かせます。

と言つてもチートですから成長は早いと思いますけど。

それについてもストーリーティタの使いやすさはヤバイ。マジヤバ
イ。

第一章 四話 退治

俺は今、まだ被害を受けてない畠が見える位置に隠れていた。日はすっかり傾き、街灯もない村の中は微かな月明かりのみで視界はとても悪い。

あの後、村の人たちに話を聞いたところ、魔物が畠を荒らしたのは夜であるらしい。それは仕事が終わり、朝仕事に行くと畠が荒らされていたという証言とも一致する。

その状況で魔物退治をしようと思えば視界が悪くなることは最初から分かっていた。だから、俺はその為の魔法を新たに一つ覚えた。その魔法とは『ライト』という。名前を聞けば大体の効果は分かるだろう。発動してから数分の間、自分を中心に辺りを明るく照らす魔法だ。

もうひとつは、まあいいだろ。簡単に言えば魔物が群れだつた場合用の対象が複数の攻撃魔法だ。畠の中で使つたらそつちにも被害がでそうなので極力使うような状況にならないように戦うつもりだ。俺は腰に刺した剣、勿論、鞘も鍊金で作ったを握り締め、魔物が来るのを待つていた。

* * *

最初、俺が魔物を倒すと言つた時、サーシャちゃんは反対した。

「危険です！」

必死な様子だった。会って間もないのに凄く心配してくれてるのが伝わってきて嬉しくなつてつい口元が緩んでしまう。

「そうだぜ、兄ちゃん。」これはギルドに報告して依頼を出すから気にななくていい

おっさんもそう言つてくれた。

だけど俺はもう魔物を退治すると決めていた。

「そろは言つても、それじゃ時間かかるでしょ？ サーシャちゃんに聞いたけど依頼しに行くだけでも数日かかる。それじゃ畑が全滅するかもしれない」

俺はそう一人を説得する。が、そんな簡単に引き下がつてくれるわけもない。

「それでも仕方ないんです！ 普通の人が魔物と戦うなんて……」

目に涙を溜めるサーシャちゃん。

俺は自然に、そんな彼女の頭を撫でていた。

「心配してくれてありがとう。でも大丈夫」

そう言つて微笑む。

「大丈夫って……どうして、ですか？」

そんな俺の手を拒むでもなく、サーシャちゃんは上目遣いに訊いてきた。

その表情が可愛いとか思つてしまつた俺は駄目な人間なのかもし

れない。……口つ口「ンじやないはずなんだが、気付かないだけで素質があつたのか？　いや、そんなことはないはずだ。

「…………？」

サーチャちゃんは自分の考えに口元をひくつかせる俺を涙を溜めたまま不思議そうに見る。

「俺には魔物と戦える。力がある。だから大丈夫」

安心させるように微笑んで優しく言つ。

「確かにそう言つていたが……畠を襲つた魔物は正体も分かつてないんだ。危険すぎる」

やつ言つたのはおっさんだった。

「そうですね。相手がどんな魔物か分からるのは確かです」「なら、やはり危険を冒すことはない！　ギルドに頼めば何とかしてくれ」「でもつー」

おれはおっさんの言葉を遮つて声を上げる。

「畠が全滅した後、村の人々が襲われない保証はないんじやないですか？」

俺がやつ言つとサーチャちゃんもおっさんも驚いた顔をした。どうやら、その可能性についてまで考えていなかつたようだ。

「だから俺が何とかします。絶対に！」

俺は一人の田をまつすぐに見て宣言した。

「……なんで」

サー・シャちゃんが小声で何か呟いた。

「なんでも……そこまで、しててくれるんですか？」

堪えきれなくなつた涙が頬を伝つ。

「見ず知らずの俺に優しくしてくれた恩返し、つていつのもある。けどそれ以上に……俺はこの事態を何とかしたいと思つた。そのための力もある」

俺の言葉を聞いてサー・シャちゃんは俯いてしまつた。

「どうしよう……納得してくれなかつたのかな。」

なら

「大丈夫。魔物を退治して帰つてくる。絶対に、もう一度サー・シャちゃんの作った美味しいご飯食べにくるよ。だから、帰つてきたら腹いっぱい食べしてくれ」

言ひながらもつて一度サー・シャちゃんの頭を撫でた。

「……絶対です」

サー・シャちゃんは俯いていた顔を上げ、

「絶対に帰つてきてくれ。シユウジの分、用意して待つて
ます」

そう言つて笑つてくれた。

「それじゃ絶対に帰つてこなことね」

俺も笑つて言つたのだった。

* * *

やべえ……思い出すとなんて恥ずかしい事言つやつてんだよ俺
は。

しかし美少女の笑顔は良いもんですね！ それだけで頑張れちゃ
う気がしなくもない。

……俺が死んだら多分サー・シャーリアンは泣いてくれる、と思つ。
優しい子だから。

「やつば、絶対無事に帰らないとな。ま、最初から死ぬつもりなん
てないし。いざとなつたらチート全開で何とかなるだろ」

独り呟く。

そんな風に考へてみると畠の方から物音が聞こえてきた。

「…………つー?」

息を殺し、耳をすませる。

風の音じやない。明らかに『何か』が這つてこるよつた、そんな音だつた。

「……ライト

俺は畠に近寄り魔法を畳める。

俺を中心にはりが光に照らされる。

「……」

「ひ、ひ、ひ、か

そこには無数の魔物。

森で戦つたスライムに似てゐるようだが、よく見ると違つ。あれよつもよつと毒々しい形、色をしてゐる。口、口、口な感じ。

「はあつー。」

一番近くにいた奴に切りかかる。そこいつまでも簡単に真つ一つになつた。

だが

「なつー? ……マジかよ」

一つになつた体はもどもと動き、再び一つになつていく。
俺は飛んで後ずさる。

「これ……物理攻撃じや勝てないのか?」

言いながら剣を見る。

剣には切つたときのスライムのドロドロがじびり付いていた。こ

れじゃあ、攻撃する度に切れなくなるな。

剣を強く振り払つてもそのドロドロは取れてくれない。

「魔法しかないか……でもここで使うわけには……」

何とかしてこいつらを魔法が使える場所まで誘き寄せるしかない。
でも、どうやって？

攻撃してくるスライムを剣で弾きながら考える。

だけどなかなか良い案は思いつかない。その間にもスライム達は攻撃を緩めない。

ウザつたくてこのまま魔法をぶつ放してしまいたい気持ちになるがなんとか抑えて他の方法を考える。

新しい魔法が使えないとなると、手持ちの魔法は最初に覚えたフアイアと今使つていいワイトのみ。どちらも攻撃魔法ではなかつた。

「こんなことなら他のも覚えとくんだった……なつ！」

良いながら襲つてくるスライムを跳ね返す。

その時、視界の隅に気になるものを捕らえた。煙の隅……そこに集められた枯れた雑草。そこに一匹のスライムが納まつていた。

「ファイア！」

俺はその雑草を魔法で燃やす。

「ペギヤア　　ツー！」

火が燃え広がるり、中にいるスライムの悲鳴が上がる。

そして、雑草が燃え尽きた後、そこにスライムの姿はもつかつた。

「……倒した、のか？　火が弱点？」

その光景を見て呟く。剣で切ったときのように再生もしないようだ。

「試して……みるか」

火が弱点なら、と思いついた方法を試してみようと思う。その方法は『ダイの大冒険』で主人公のダイが使った魔法剣、……『火炎剣』だ。確かダイも大した魔法は使えないで、でも普通の攻撃が効かない敵に使った技だ。

出来るかは分からぬけどものは試しだ。

「えへつと……剣に魔力を纏わせて……」

ファイアは魔力を火に変化させる魔法だから、剣に纏わせた魔力をファイアで火に変えれば火炎剣の出来上がり……になるはずだ。

「くそ……上手く纏わせられねえ」

纏わせようとしても、剣全体を覆う前に霧散してしまった。

何度も失敗する。

今度は同じ魔力量でも薄く伸ばし、剣にピッタリとくっつけるイメージで魔力を流す。薄くした分、火の大きさは小さくなるだらうけど仕方ない。

「……出来た」

すると、今度は霧散することなく剣に魔力を纏わせる事に成功す

る。

「ファイア！」

その魔力を魔法で火に変える。

「おお……すげっ！」

俺の持つ剣の刀身を炎が覆っていた。それに伴い、件に付いていたスライムのドロドロも蒸発するように消えていった。火炎剣の完成だ。

「効いてくれよ……しゃらあつ！」

その剣でスライムを一匹切り裂く。

スライムは真っ二つになつたが、刀身の炎も消えてしまった。

「やっぱ魔力が薄いからすぐ消えてしまう、のか？」

まあ、それはいい。一度出来たんだからまた出来るはずだ。
それより　スライムはどうなつた？

火炎剣で切り裂いたスライムを見る。切つた箇所から煙を上げ、ひと鳴きしたあと消え去つた。

効いた！

「よし……」れならいける！」

俺は再び魔法で火炎剣を作り出し、スライムに向かつていった。

* * *

火炎剣で全てのスライムを倒すことに成功した俺は疲労からその場に座り込んでいた。

自分の中の魔力が減っているのが分かる。ファイアは消費MPは少ないが、それでもスライムを倒すごとにかけ直し、あれだけの数（二十から数えてない）のスライムを倒したのだから、いくらチートとレベルアップでMPが上がっているとはいえギリギリだった。

ステータス表で確認すると残りMPは20を切っていた。

そして 取得スキルに火炎剣が追加されていた。消費MPは3だつた。普通にファイアを使うよりもMPを消費するようだ。

「こんな感じでもスキルは取得出来るのか。早く帰つてサーシャちゃんを安心させてあげたいけど……動きたくねー」

大の字に寝転ぶ。

周りに生き残りがいか確認して目を瞑る。

いつの間にか眠つてしまつていたようだ。目を開ければ日が昇り始めていた。

野宿は慣れてたし、危険察知の技能のおかげか敵が近づけば寝ても起きれるようになつたのでそういう状況下で寝るのにも抵抗がなくなつてきてる自分にビックリする。

「早く帰らなきやな」

立ち上がる。少し寝たおかげで体力も魔力も大分回復している。軽く伸びをし、煙が無事なのを確認してサー・シャちゃんの待つ家へ向かった。

* * *

「ただいま

家に入る。

とてとて、と可愛い足音が近づいてきた。それに続いてどすんどすんとも聞こえるのがアレだけビ。

「 シュウウジさんっ！

「兄ちやんっ！？」

一人とも俺を見て驚いていた。

もしかして……戻つてこないとか思われてた？

「あ……なんだ。その……約束通り帰つてきたよ」

行く前の会話を思い出し、恥ずかしげに頭を搔きつつサー・シャちゃんに囁く。

サー・シャちゃんは先ほどよりも皿を見開いた後、俯いてしまった。

「兄ちやん、無事に帰つてきたのはいいが魔物はどうなった？ やはりギルドに連絡するか？」

何も言わないサー・シャーリヤンに代わっておっさんは効いてきた。

「倒しましたよ。とりあえず昨日出た分は全部

やつ払いとおっさんは少し固まつた後、盛大に笑つた。

「がははー。兄ちゃんが魔物を倒せるとは聞いていたがこれほどとはな。この村を救つた英雄だな、兄ちゃんはー。早速村の奴らに話してくるかー。」

そう言つておっさんは家を出て行つてしまつた。

……英雄つて、大げさな。なんか恥ずかしいんだけど。出て行つたおっさんを見てそつ思つた。

「……サー・シャーリヤン?」

俯いて何も言わないサー・シャーリヤンを呼んでみる。

「つおつーー?」

サー・シャーリヤンが突進 じゃなくて、抱きついてきた。身長差もあって胸より下にサー・シャーリヤンの顔があるので表情は分からない。

「サ、サー・シャーリヤン?」

俺は彼女の名前を呼ぶ。

「心配しました」

涙声だった。

俺は抱きついている彼女の頭に手をのせる。

「「めん。心配かけて」

サーチャちゃんの頭を撫でる。

「無事に帰つてくれてよかったです」

「約束、したからや。それに……」

サーチャちゃんの肩に手をかけ、少し離して顔を見る。

「サーチャちゃんの手料理、食べたかったから

笑つて言つた。

少し見詰め合つて、サーチャちゃんは涙を拭いた。

「ふふ、用意してありますよ」

そう言つて笑い返してくれた。

「そつか。楽しみだ」

「帰つてくるつて信じて作りました」

「そつか……ありがと。嬉しいよ」

今回の魔物退治は結構焦つたし大変だつたけど、このサーチャちゃんの笑顔を見たら、それだけで頑張つてよかつたと思つことが出来た。

第一章 四話 退治（後書き）

10000PV 2000ユーチューバー 総合評価100pt突破！

ありがとうございます。

こんな短期間にこれほどの方に読んでいただけたとは思っていませんでしたので凄く嬉しいです。これからも読んでくださると幸いです。

感想お待ちしております。

第一章 五話 旅

「今日はこの辺までにして休もうか」

田も暮れてきたことだし、暗くなってしまっては危険が増える。

「そうですね」

サー・シャちゃんも同意してくれたので荷物を降ろす。

「それじゃ、用意しようつか」

「はいー。」

俺の言葉に元気良く返事をしてくれるところを見ると、まだまだ疲れはそれ程溜まつてはいないようだつた。

「あとどれくらいだるーー。」

薪を取り出し、火をつけつつサー・シャちゃんに尋ねる。

「そうですね……純良に行けば、明日の夜には着けると思います」「わつか。それじゃ明日は早めに出発して、何とか明日中には着けるようにしたいな」

話をしながらもサー・シャちゃんが食料の準備をしてくれている。村から持ってきた物もあるが、肉や魚は見つけたら獲つたりして補充している。

サー・シャちゃんが獲物を裁くのにもそんなに抵抗がなかつたのは驚いたけど、良く考えればこの世界なら日常的にそういう事をして

いても不思議じゃないなと思い至る。

村から王都を田指し七日程になる。

サー・シャちゃんも一緒に、随分と慎重に旅をしていましたから聞いていたよりも時間がかかってしまったが、上手くいけば明日にも到着出来そうだ。

その間に、俺は何度もしたことはあったが、サー・シャちゃんも旅や野宿に慣れてきたようだと手際良く料理する彼女を見て思つた。あれは魔物退治をして数日経つた日の事だった

今、こうして俺とサー・シャちゃんが一人で王都を田指しているのには理由がある。

* * *

「検査？」

「ああ。大体十一～十五歳までに必ず検査を受けなきゃいけない」

ギルドの話をしている時におっさんが言ったことだつた。

なんでも、この世界の人間は絶対に魔力があるかどうかの検査を受けなくてはならないらしい。

「それで、魔力があつたらギルドに入れるのか？」

この数日で、俺はおっさんに対して砕けた話し方をするようになつた。勿論おっさんが良いつて言ったからだけだ。

ちなみに名前も聞いたがその時には既におっさんと呼ぶのが定着していたのでそのままずっとおっさんと呼んでいる。

「いや、入れる……わけじゃない」

「どういふこと？ 魔力の量が一定以上無いと駄目とか？」

「魔力の量は関係ない。魔力があれば……強制的にギルドの学院に入ることになる」

「学院……？」

しかも強制的に……義務教育みたいなもんか？

「簡単に言えば、ギルド員を育てるための場、だな。魔力を持つ人間は少ないしギルド、といか国にとつては喉から手が出るほど欲しい存在だからな。だから学院に通うための費用は国が出すんだが……」

それで学院を出た後はギルドに所属して国のために働け、って訳ね。

魔力持ちは自分の意思で将来は決められないのか。

「それで……サー・シャーチャンを？」

「ああ。連れて行つてくれないか？ 行くんだけ、ギルドに

まあ、ギルドには行くつもりだつたけど。

「今まで検査に行けなかつたからな。行くにも長旅になるから護衛を雇わなきゃならんし……その点、兄ちゃんが連れてつてくれれば助かるな」

俺なら魔物とも戦えるしな。

「やつこつことなら引を受けるけど……もしもサーシャちゃんが魔力持ちだったら」

「その時はアイシのことを頼む」

おっさんは俺に頭を下げる。

それに俺は慌てる。

「ちよ、頭なんか下げなくてもそのつもりだって！ 俺にひとつでもサーシャちゃんは家族みたいなもんだしや」

出合つて数日だけど、あの魔物退治の日からサーシャちゃんは結構俺に懐いてくれていた。俺もそんなサーシャちゃんを妹みたいに思つてゐる。

「やつこつことあつがたい」

おっさんは下げていた頭を上げた。

「絶対無事にギルドまで送り届けるよ」

「頼む」

* * *

と、まあ、そんな事があつたわけだけど。
実は、ギルドの検査を受ける前に既に……サーシャちゃんが魔力

持ちであるのは確定なんだけど。

何で分かつたかと言えば、まあ、俺の能力でとしか言えないんだ

けどな。

その能力は『ステータス表示』だ。

最初から使えたこの能力だが、実は相手に触れることで、その人物のステータスまで見ることが出来るのだった。

気付いたのは全くの偶然なんだけどね。

サー・シャちゃんが寝た後でステータスを確認しようと、その瞬間に彼女の腕が俺に当たった。それで表示されたのが俺ではなくサー・シャちゃんのステータスだったから驚いた。さらにMPを持つてる事から魔力持ちである事にも気付いてそれ以上の驚愕。思わずサー・シャちゃんの寝顔を凝視してしまった。

ちなみにサー・シャちゃんのステータスは

名前	サー・シャ
種族	人間
職業	農家の娘
称号	村娘
レベル	1
HP	15 / 15
MP	21 / 21
STR (力)	7
VIT (耐久力)	8
INT (知性)	7
AGI (素早さ)	37
DEX (器用さ)	14
LUCK (幸運)	23
CHAR (カリスマ)	12

一般的なRPGっぽくHPが少なくてMPが多め。エンテもこの年頃の子にしては多分高い。あとは……基本的にこの世界に来たばかりの頃の俺よりステータスは高い。腕力とかも俺の方が低かったのは軽く落ち込むけど。

ま、そんな訳で、サー・シャチャーンは検査後、確実にギルドの学院つてやつに入る事になるだろ?。

「あ、シコウジさん。すみませんが、お水貰えますか?」

と、これまでの出来事を思い出していると料理中のサー・シャチャーンから声がかかった。

「水? えっと……はい、水

袋から水筒を取り出して渡す。

「あっがんじます!」

受け取つて料理を再開するサー・シャチャーン。

「もう使わない道具はある?」
「そうですね……包丁はもう使わないですか?」
「わかった。片付けとく」
「すみません」
「いやいや、これぐらいはしないとな」

さう言つて包丁を水筒の水で洗つて、布に巻いて袋に仕舞つ。

「不思議ですよね。それ……どこに行つてしまつのでしょうか?」

サー・シャちゃんが料理の手を止める」となく、包丁を仕舞つた袋を見て呟つ。

「いや、俺にもわからないけど……まあ便利だから気にしなくていいんじゃない?」

実は神様の道具です、なんて言えないしな。

「確かに便利ですよね。何でも入っちゃうし」

そう。この袋は『あの』袋なのだ。

何でも入る。しかも生ものも腐らない。

村を出る日、GPと引き換えに出来るあの携帯サイトでポイントを使い入手した。空間魔法覚えればいいやと思っていたが、予期せず大量のGP入手できたので交換することにしたのだった。

その時、手に入れたGPは今まで集めていたGPの数倍だった。なんで手に入ったのかは正しくは分からぬけど、多分村の烟を魔物から救つたことが原因だと思うんだ。ただ魔物を倒すよりも人の為とかで倒した方が入手できるGPは多いんじゃないかな、と当たりをつけたみた。

まあ、ギルドに入れば確認できる機会も増えるだろう。

それにしても、ポイントを支払つた瞬間、突然目の前に袋が現れたのはビックリしたな。

あ、ちなみに袋の中には同時に購入したPCも入つていて。

このPCも優れものでバツテリーは無限。モニターの大きさも自由に変化させられるし、本当にどんな世界のサイトにもアクセス出来る。創作物もバツチリ見ることが出来た。著作権とかは……神だから多分関係ないんだと思う。つん、そういうことにしておこう。

食事の後は明日に備えて早めに寝ることにした。

ま、俺は見張りで起きてるんだけど……。

火に薪を追加してサー・シャちゃんが眠っていることを確認する。眠っているようなので自分のステータス表を表示した。

名前	神谷 修司	種族	神
職業	神	称号	神見習い
L	LV	レベル	17
HP	HP (体力)	158 / 158	
MP	MP (精神力)	129 / 129	
STR	STR (力)	123	
VIT	VIT (耐久力)	115	
INT	INT (知性)	162	
AGI	AGI (素早さ)	124	
DEX	DEX (器用さ)	112	
LUC	LUC (幸運)	203	
CHR	CHR カラisma	117	

アビリティやらスキルやらは魔物退治の時から変化なし。

ちなみに、魔物退治のときに取得したはいいが使わなかつた魔法は『ブلاスト』。これは小範囲、小爆発の魔法。まだ使つたことはないためどんな感じかは分かつてない。

それにもしても 隨分強くなつてるんじゃないか？

でも、この世界に来てチートを使ってから隨分経つし身体能力にも慣れてきた。ここらでもう一度ステータス上げてみるか？ 今までも良いとは思うんだけど、何かあつたとき確實にサー・シャちゃんを守るかと問えば出来ない可能性もあるし。

よし！ 上げよう！

全てを倍近い200程度まで上げる。

「うおー、これは……凄い」

上げた瞬間、身体が変わったのが分かった。
ちょっと拳を突き出してみた。

「おお、『ブオーン』だったのが『ボツ』に変わってる」

勿論拳を放ったときの音のことだ。

これ以上ステータスを上げてしまうと慣れるのに時間がかかりそうだ。時間かけてチマチマ上げていくつもりだし良いけどね。今回は「」の程度にしておこう。

「あとは……」

『危険察知』と『気配を読む』のレベルもひとつ上げておく。すると目指している王都の方角に沢山の気配というか、『気』を感じることが出来た。このままレベルを上げていけば「なつ！？」この気は「！？」とか個人を判別出来るようになるかもしれない。ちょっと楽しみだ。

「スキルも覚えちゃえ」

呟いてスキル欄を表示する。

魔法ばかりで技術系のものがないのでそれ系を覚えることにする。そして覚えたのは テイルズシリーズから『魔神剣』と『獅子戦吼』の二つを覚えた。魔神剣は剣技、獅子戦吼は剣が使えない状況がもしもあつた時のために覚えることにした。

「あれ？ てか二つとも衝撃波とか鬪気とか出すよな……」

何か……もっと普通の人でも頑張れば使えそうな技も覚えとくか。
ということで覚えたのが同じシリーズから『虎牙破斬』。これは
上空に切り上げて跳躍、切り下げに繋げる技だ。上げと下げの間に
蹴りを入れてもいい応用性！ テイルズでは繋ぎの技として使いや
すかつた記憶がある。何よりかつこいい！

「チート終了……つと」

満足してウィンドウを閉じる。
これで相当強くなつたはずだが、これから力と技を使いこなせる
よう努力しなきやな。
そう思いながら、再び薪を足すのだった。

第一章 五話 旅（後書き）

主人公ドンドン強化するよーっ！
てか話全然進んでないですね。

もっと早く進めてしまった方が良いのかどうか。描写不足になりそうな気もする。

第一章 六話 ギルド

王都に着いたのはまだ夕方になる前だった。

夜までに着けばいいと思つていたものの、朝早く出発したこともあり予定より随分早い到着だった。

「ここが王都か」

でかい門で検査され中に入るとやはり王都というだけあって活気のある街だった。それでも現代日本に住んでいた身としては驚くほど大きいと言つわけではない。大通りだつて普通の道に見えるし。

「初めて来ましたけど……凄いですっ！」

村からあまり出たことがないといふサー・シャちゃんは凄いはしゃぎよつだった。

「街見るのは後ににして、早く着いたことだし先にギルドに行く？」

本当は一晩宿に泊まつて、検査には明日行くつもりだったけど、この時間なら今日でも大丈夫だろう。

それにこれから寮に入ればいつでも、どれだけでも街を見る時間はとれるだろう……言わないけど。

「やつですね。 そうしましょー！」

テンションの高いサー・シャちゃんはとても子供らしく可愛かった。

* * *

「ルルがギルドかあー！」

中央通りを少し進んだ先に大きな建物があった。看板には『ギルド』と書かれている。見たこともない字だつたけど。何故か読むことが出来た。

そういえば、この世界でも普通に話せてるけど……よく考えたらおかしいよな。転生ってか身体を創りかえられたときにそういう能力みたいなのがデフォでついたのかもしない。まあ便利だから深く気にしないことにしよう。

その大きいギルドの建物の向こうにはさらに大きい建物が見える。多分あれが学院なんだと想う。

「ギルドの検査って何するんだろう？」

「えっと……魔力があるか調べるらしいです」

それは知ってるけど、どうやって調べるんだ？

「魔力ってどう調べるの？」

「……分かりません。ごめんなさい」

「え、いやいや、サー・シャちゃんは悪くないって！」

答えられなかつたのが悪いと思つたのか俯いてしまつたサー・シャちゃんに慌てて声をかける。

「ま、行けば分かるんだしさ」と行いつがー。

誤魔化すよひに元氣良くなつてみた。

「はい…… そうですね！」

サー・シャーリーちゃんもそんな俺を見て笑顔になつてくれたので良じと
しう。

* * *

「こりゃしゃいませ。本日の用件はなんでしょうか？」

ギルドに入り、正面にある受付。

受付嬢は金髪の美しいお姉さんだった。思わず見とれてしまつもの、横からサー・シャーリーちゃんの冷たい視線を浴び何とか言葉を紡ぐ。

「あ、あの……検査？ つてのを受けに来たんですけど」「わちらのお子さんですね？ それではこの用紙に必要事項を記入してください」

やう言つて受付さんが一枚の紙を差し出してくる。

「あの、俺も……なんですが」

なんか、サー・シャーリーちゃんだけが検査しに来たと思われてるっぽい

ので訂正してみたのだが、受付さんはジッと俺を見て、

「貴方も……ですか。失礼ですがお歳はいくつでしょ、う？」

あ～……そう言えば、普通検査を受けるのは十五ぐらい今までつて聞いたな。俺は普通に高校生の平均ぐらいは身長あるし、実際年齢も一七歳なわけで……こじこじゅうの歳で検査してないってのは不審に見えるのかもしねー。

「え～……十七です」

「その歳まで検査を受けていないのですか？」

やつぱり不審者に見られている。

「あ～……その……えつと」

どう言えばいいんだろう？

「あ、あのー」

セーデル・カーラー・シャーリーが言葉を発した。

「ショウジさんは『記憶喪失なんですよ』」

「記憶喪失？」

カーラー・シャーリーの言葉を受け、俺に尋ねてくる受付さん。

「はい……まあ」

曖昧に返事をする。

「何か身分を証明できるものはありませんか？」

「ない、ですね」

「それでは……どうしましょ？」

受付さんは困ったように笑った。

「シコウジさんは魔物を倒せます！」

そんな受付さんにサー・シャちゃんが言った。

「それは魔力があるといつ」とですか？」

「はい！」

答えるのはサー・シャちゃん。

なんでサー・シャちゃんがこんなに張り切ってるんだ？」

「記憶喪失……」

受付さんはそう聞いて、

「ではお名前をお聞かせ願えますか？ ギルド員かどうか調べます

ので」

「あ、はい。分かりました」

紙に名前を書いて渡す。

ま、ギルド員な訳ないんだけどね。普通に入学できるのかな……。

その間にサー・シャちゃんも用紙に記入していた。

「ありがとうございます。それでは一応一人とも検査しますので一

階の検査室へ移動してください」

俺たちから用紙を受け取つて階段を指し示す。

「わかりました」

お礼を言つて俺とサーチャちゃんは一階へ上がつた。

* * *

検査はすぐに終わつた。

水晶のような物に手をかざすだけといつ、なんとも拍子抜けな検査だつた。

「私にも……魔力があるなんて……」

結果は一人とも魔力持ち。分かつてたことだけね。

俺はまだだけど、サーチャちゃんは学院への入学が決定した。

俺の方は明日には照会が終わるらしいので、明日もう一度ギルドに来るようになるとのことだった。

サーチャちゃんの、ギルド校入学のことについての詳しい説明も明日一緒にするようだ。

「入学前に帰れればいいんだけど駄目ならおひさんで手紙書かないとな

「そうですね……」

「やっぱ嫌？ ギルド員になるの」

「嫌、というか……怖いです。魔物と戦わなくちゃいけないのとか」

そりゃ そうだ。今まで魔物は恐怖の対象だつただろつからな。いきなり、そんな魔物を倒せる力があるんですなんて言われても普通は怖いよな。

夜だからはぐれない様に繋いでいる手も若干震えている。

俺はなんつーか、チートな力があつたし、命のやり取りをしているつてよりもゲーム的な感覚のが強かつたかもしない。人が相手だとどうなるかは、まだ想像も出来ないし。

「でも…… シュウジさんと一緒にいられるのは嬉しいです」

そう言つて握る手の力を強め、俺を見て微笑んだ。

「…………」

あまりの可愛らしさに絶句してしまった。

そんな無邪気に嬉しいことを言わると「あれ？ 俺、惚れられてる？」「って勘違いしちゃうじゃないか！ てか俺は口リコンじやねえつ！ でもサー・シャちゃんならイケル…… って何をだよ、何をだよッ！？」

「あの……どうしたんですか？」

繋いでない方の手で頭を抱え苦悩する俺を心配そうに覗き込む。ヤメテ！ そんな純真な眼差しで俺を見ないで！

「い、いや…… 何でもないよ…… そ、それより…… 宿でも探そー…… 探さなきや野宿だよ」

考えていたことを語られないよう必死に誤魔化す。

「やうですね。まだ空いている宿があれば良いんですけど」

素直なサー・シャーチャンは疑いつとなく強引に変えた話についてしてくれた。

「やうか。早く探さなきゃ満室になることもあるのか。……じゃあ早速探そーー！」

その日、三軒回り何とか小さめの宿屋で部屋をとることが出来た。ただし、一部屋しか空いてないのでサー・シャーチャンと同室だが。今まで近くで寝てたけど、野宿と部屋の中では何か全然違つ。やたらと意識してしまつ……。これは、今日は寝れないかも知れないね。あと、久しぶりに風呂に入りたいです。このところずっと水浴びしかしてないもので……。でも、小さい宿なため風呂なんてありますんでした。

ついで翌日 僕とサー・シャーチャンのギルド学院入学が決定しました。

第一章 六話 ギルド（後書き）

お気に入り登録が100件に達されましたで驚き喜んでます。

とりあえず今回はちょっと短いですが、これで第一章は終わりです。
次からは新章になります。

ギルドで検査を受けて数日、遂に入学の日を迎えることとなつた。すぐに入学出来ることになつた俺は検査を受ける時期がよかつたらしい。時期によつては結構な時間待たされるらしい。

説明されたシステムは、一年を四回に分け、その時までに集まつた生徒を一期生として入学させるんだそうだ。

ちなみに俺は四期生。

四期生の中で一番年上……と、うか、ギルド学院始まって以来の高年齢になるそうだ。中学生か、下手したら小学生に混じつて高校生が勉強するみたいなもんだと予想して少々憂鬱になつたが、サー・シャちゃんが嬉しそうにしていたので気にしないことにした。

検査の翌日に宛がわれた寮の部屋でベッドから起き、制服に着替える。

白いシャツに黒いズボンといつ、現代日本の学生服に近いものだつた。生地は勿論違うけど。

寮は当然のように男女別なのでサー・シャちゃんとは別部屋になつたのは良かつた。ずっと同じ部屋だと心配……心配? まさか俺がサー・シャちゃんに欲情すると心では思つてこるのか! ? 別部屋になつたと聞いて俺はホッとしたがそういうことではないはずだ!

まあ、いい。俺はロリコンじゃないつてのは当然のことで疑つこと自体が無駄なことなのだ。

俺は思考を切り替えて朝食のために食堂へ向かつた。

* * *

「おはよー、サービスちゃん」

先に食堂にいたサービスちゃんに挨拶をして隣に座る。

「おはよー、サービスちゃん。制服似合つますね」

俺を見て、やつぱりしてくれるサービスちゃん。こきなり褒められてちょっと恥ずかしくなる。

「やつぱりサービスちゃん、凄く似合つてるよ」

女の子の制服も現代日本とやつ変わらない。白いブラウスに黒いプリーツスカート。あと、リボンは何種類があるよつだが、サービスちゃんは黒系のリボンだつた。

「え、あの、ありがとうございます。でも、あの……スカートが短くて……恥ずかしいですね」

顔を赤らめてお礼を言しながらスカートの裾を押さえるサービスちゃんが凄く可愛かった。

「それにしても、朝から豪華だよね」

一人して氣ままずい雰囲気になりかけたので話を変える。

「そうですね。こんな贅沢していいのでしょうか?」

野宿じゃ普通の食事は難しいし、サービスちゃんの家に世話をにな

つてた時もスープとパン。夜には俺の狩つた肉が出てくるくらいだつた。普通に村で過ごすならそれが普通の食事なんだらう。だが、今田の前にあるのは具沢山のスープに卵料理、サラダにベーコン。さらに数種類のパン。

これは今までの食糧事情からすればかなり豪勢なものだ。

「ま、いいんじゃない？ 無料だし」

言つて、俺は「いただきます」して食べ始める。

基本、このギルド学院内において生活するためのもの、授業に必要な物は全部無料だ。その代わり、卒業後にはギルドに所属して働かなきやいけないわけだけね。

サー・シャちゃんも「そうですね」と言つて、俺と同じ仕草をしながら食べ始めた。

実は初めて俺が「いただきます」つて手を合わせたときには不思議な顔をしていた彼女だが、俺がそうする理由を話すと私もしますと言つてしまのが最初。それからはいつも彼女も「いただきます」と手を合わせるようになつた。

食事を食べながら周りを観察するが、やはり同期生同士でグループになつているつぽい。

そりやそうだよな。同じ時期に入学して同じ教室で学んでるんだから友達にもなりやすいよな。

当たり前だけど食堂にいる誰もが俺より年下に見えた。見えたつてか多分確実に年下なんだろうけど。中にはまだ十歳にも満たなそうな子もちらほらといらつしゃる。

つーか俺、周りは年下ばかりで友達とか出来んのかな？

サー・シャちゃんしか話し相手がいないとか寂しそうだ。そのサー・シャちゃんだって、仲の良い女友達でも出来れば俺と話すことも

少なくなるだらう。

……やばい。マジで心配になつてきた。

* * *

朝食の後、教室に向かつたわけだが……学院広すぎ。

入り口に案内あつたけど何度も迷つたぞ。その度に年下の子供に道を尋ねる一七歳の俺。正直言つて恥ずかしかつたけどサー・シャチャんに代わりに訊いてもらうなんて出来なかつた。だつて、俺よりも歳が他の生徒と近いとはいえ、やっぱり恥ずかしいだらうからな。そんな思いさせるぐらいなら自分で効いたほうが良い。

そんなこんなで何とか教室に着いたんだけど……これまた予想以上の低年齢。サー・シャチャんよりも明らかに年下なのが七割。サー・シャチャんぐらいの子が一割。との一割は十五歳ぐらいに”見える”子だつた。

”見える”つてのは大人びてるだけかもしれないし本当に十五歳程度なのが分からぬからだ。まあ、一六歳以上つてことは有り得ないだろ。

そんな状況な訳で、どう見ても年上の俺は結構な注目を集めてしまつた。注目されるのはまだいい……。問題は注目しつつも誰も話しかけようとしてこないことだ。これが結構辛い。

辛いので、俺は壁際の一一番後ろの席に座つて先生が入つてくるまで壁でも見て過ごそうかと思つた。

「なんだか注目されますね」

思ったのだが、カーシャちゃんが隣に座って話しかけてきた。

「それでるね」

カーシャちゃんを無視できぬまでもなく、視線を壁からカーシャちゃんへと移す。

「やつぱつ……田舎者だと思われてのじゅうつか」

カーシャちゃんは自分のせいで注目されてしまつて困ったみたいだ。

「やんなことなことよ。カーシャちゃん可愛いじ。てか注目されても絶対に俺だと思つよ。普通に入学する年齢より歳が上なんだかうわ」

「オローレおべ。俺が原因のことなんだからカーシャちゃんが気負つことなんて何もないんだ。

「え、や、やんなつ……可愛になんて……あつませんよー」

カーシャちゃんは顔を赤くして頭と手をブンブン振った。

「え? 気になつたのやつぱつ」

「……え、何がですか?」

「いや……何でもなことよ。とにかくカーシャちゃんが気になつね」

「やなにつて」

「やつですか……分かつました。それよつまつー」

なんだか、突然どうしたの?」

「と、突然どうしたの?」

俺はビックリして訊く。

「教室で”ちやん”と呼ばれるのは恥ずかしいので呼び捨てにしてもらえないでしょつか!?」

なんか鬼気迫る勢いだった。

「う、うん。分かった。……サー・シャでいい?」

「はいっ!」

サー・シャちゃん サー・シャは嬉しそうに返事をした。

「じゃあ俺の」とも呼び捨てで良いよ

「駄目です!」

「えー、何で?」

「シユウジさんは年上じゃないですか。それにシユウジさんはシユウジさんです!」

良く分からぬ論理で反論されたのだった。

* * *

まずクラスメイト達の簡単な自己紹介。

やはり殆どは見た目通りの年齢みたいで、一人だけ十五歳がいた。その後、魔物の話やギルドの話を聞かされ、早速実技に入った。最初は自分の魔力を感じるところからだった。小さい杖のような物が全員に配られる。これは魔力を集めやすいアイテムらしい。これに魔力を集め、普段感じない感覚を感じる、と言つ。

「…………なんつ～大雑把な説明」

若干呆れつつ、集めて見る。

俺は普通に魔法も使えるし簡単に出来た。ちゃんと魔力も感じる。ただ、サー・シャ含め他のクラスメイトたちは苦戦しているようだつた。

「サー・シャ、出来た?」

隣でうとうん唸つているサー・シャに声をかける。

「…………難しいです」

まあ、あの説明じゃそうだよな。

なんかアドバイス出来ないものか……

「じゃあさ、身体全体を血液みたいに魔力が流れてるのを思い浮かべてみて」

「…………はい。分かりました」

俺が言つとサー・シャは目を瞑つて集中する。

「その流れが手のひらから伝わって杖にいくよ」とイメージして

「…………はい」

俺も大雑把にしか説明出来なかつた。チートだから普通に使つことに対する上手く説明出来ないのです。

「あつ！ 出来ました！」

皿を開けて俺を見る。

「お、ほんとに？」

「はい！ 手から杖に何かが流れるのを感じました！」

嬉しそうに杖を両手で握る。

あんなアドバイスで簡単に成功するつて……もしかしたらサーシヤは優秀なのかもしねりない。

「感じたら、次はその魔力を火に変えるようイメージしてください！ それがファイアの魔法です」

教師の人の大好きな声。

またそんな大雑把な…………つっても、それ以外に説明のしようがないつてのもあるけどな。覚えたときに頭に流れ込んできた使い方もそんな感じだつたし。

あの時はなんとなく出来ちゃつたし、そんなもんなのか？

「……全然出来ません」

これにはサー・シャも苦戦しているようだ。アドバイスも出来そうにない。

他の子もみんな出来ていないし、まだ魔力を感じることが出来ない。

い子も結構いるみたいだ。

なんて考えていると、少し離れた所でじよめきが起こった。
なんだろうと見てみると、そこには杖の先に火を灯す少女がいた。

「凄いです」

サーチャもそれを見て感嘆の声を上げる。

「今期はここ最近で一番の優秀なのが入ると聞いていたが、さすがだな！」

教師が少女に話しかけ、

「別に……」Jの程度で褒められても嬉しくありません

少女は鬱陶しそうにその場を離れた。

「うわ～……可愛げのない子供だな」

思わず呟くとキッと睨まれた。

結構離れてるはずなのに聞こえてるとは……恐ろしい。

それにして、一発で成功させると優秀になっちゃうのか。下手に目をつけられるのも嫌だな。

平凡な感じが良いよな、やっぱ。

そうなるとこのクラスの平均のステータス値を知りたくなるな。

「彼女は天才だからね。大人顔負けの賢さだし他人を見下している節があるね」

と、俺の呟きに答えるように誰かに話しかけられた。

「だよな……って、だれ？」

振り返るとそこにはクラス唯一の十五歳である少年が立っていた。
「あ、僕はレイ。歳が近いもの同士仲良くなれば、そういうの可愛いお嬢さんも宜しく！」

爽やかな笑顔で言った。

「あ、はい。よろしくお願ひします」

サーチャは頭を下げた。
俺は差し出された手を握り

「…………あん？」
「どうか、したのかな？」
「あ、いや、何でもない。よろしく！」

握手を終え、立ち去るやつの背を睨みつける。

「どうしたんですか？」

サーチャが俺の様子がおかしいことに気付いたのか問いかけてくる。

「あ、ここはあんまり近づかない方がいい
…………何かあったんですか？」

「いや……まあ、気をつけて

「……？　はい」

良く分からぬといつた風だが一応返事はしてくれた。

名前	シユナイツ
種族	人間
職業	ギルド所属、諜報員
称号	ローレル帝国の間者
レベル	28
L V	
H P (体力)	108 / 108
M P (精神力)	210 / 210
S TR (力)	80
V IT (耐久力)	73
I NT (知性)	102
A GI (素早さ)	148
D EX (器用さ)	132
L UC (幸運)	57
CHAR カリスマ	28

握手したときに見た奴のステータス。

怪しい要素満載と言うか、そういう要素しか見当たらなかつた。

絶対面倒になると半ば確信めいた予感を胸に、俺は頭を抱えるのだった。

また口リツ子が増えちまつたよ……。

何か今日は文が安定しない気がします。
何がどう、とかは分からなんですが。

レイと名乗った男。本名シユナイツは目立たないよう、何度もわざと魔法を失敗する振りをしてから成功をせる。ということを授業中繰り返していた。

俺もそんな風にして目立たないようじつよじつと思つたが、問題が発生した。

俺は 魔法を失敗できなかつたのだ。

隅でコソコソとやつていたため、成功した目撃者はサー・シャだけだつたのが幸いしたが、これでは不用意に魔法は使えない。一発で成功したのは、あの天才少女だけ。ここで俺も魔法を使つてしまつたら確実に注目されてしまう。

これは授業後、失敗する練習をしなければならない。

もうひとつ、授業でまだ俺が覚えていない新しい魔法を教わつた。風を起こす魔法だ。風を起こすと言つても初日に授業なので、ファイアと同じく実戦では使い物にならない程度の魔法だが。それは何度か失敗して覚えることが出来た。

ファイアでイメージのコツを掴んだサー・シャより遅く、クラスの平均より若干早いぐらいの習得速度だつた。

普通に覚える分には、俺は優秀とまではいかないが、まあまあ早いぐらいらしい。

わざと魔法を失敗できるようになるまでは新しい魔法は能力を使わず授業で覚えた方がいいだろつ。

授業以外での出来事といえば……この日の授業でクラスの半分ほどのステータスを入手した。

平均が分かれれば、手加減の度合いも分かるし……最悪、平均値までステータスを下げるは怪しまれることはないだろつ。

学院生活……予想以上に不自由だ。

初日の授業はもうすぐ終わる。
出来れば今日中に天才少女のステータスを見たかったのだが難しそうだ。

「それじゃあシユウジさん。夜、食堂で」
「あいよ。昨日ぐらいの時間に行くから」
「はい！」

寮が分かれているサーチャとは授業が終わつたら別々になることになつた。

そして

「リヴィちゃん、一緒に帰ろつ！」

サーチャは、あの天才少女に声をかけた。

「……うん」

少女も拒むことなく、一緒に教室を出て行く。

誰に対してもキツイ感じのあの子が、何故かサーチャには普通に接していた。

いつ、二人が仲良くなつたのかは知らない。気がついたら仲良くなつていた。サーチャは素直な良い子だし、もしかしたら誰とでも仲良くなつてしまつ才能があるのかもしない。

これは……今日はステータスが見れなかつたけど、意外と簡単に見える日がくるかもしないな。

* * *

部屋に帰った後、早速魔法を失敗させる練習を始めた。

「……上手くいかないな」

これが全然出来ない。

失敗がこれほど難しいとは……。

「どうすりゃ失敗出来るんだ?」

これも全く分からぬ。

俺は杖を放り出してベッドにダイブした。

「魔法失敗させる技能とかないかな……使い道殆どなさそうだけど」

仰向けに寝転がってステータス画面の技能欄を表示させる。

数が多くて把握しきれないけど、それだけに無駄技能もあるんじやないかと期待出来る。

「おっ、これなんか良さ氣だな」

目についたのは『魔力操作LV1』という技能。余ってるポイントで取得してみる。取得した瞬間に変化が起る。

「おお！ 魔力の流れつてのがハツキリ分かるぞ！」

今まで漠然と「これが魔力か」ってこの世界に来るまでの身体との違いで分かつてたものがハツキリと自分の身体の中にあるのが分かつた。

右の手のひらに集まるよう集中してみる。

「なんか……今までと全然違う」

手を中心に周りに溢れる位の魔力が集まつた。見えないけど。今まで魔力を覚えて、使う感覚が流れ込んできて適当に使つてたから魔力を自分で動かすなんてことはなかつたからな。

ああ、魔法剣使つたときによく操作した……のか？ でもあの時よりも全然操作できる量が増えた気がする。今なら、前みたいに薄く伸ばさなくても魔法剣が使えるはず。

「これなら……出来るか？」

ふと思いついたことを実践してみようと、放り捨ててあつた杖を拾つ。

「魔力を流して……ファイア！」

唱えると同時に魔力の流れを止めてみた。すると

「出来た！ 失敗出来た！」

杖に送り込んでいた魔力が霧散。火はおこらなかつた。てか、失敗して喜ぶって相当変だよな。

「ま、これで授業も受けやすくなつたな」

悩んでいた事柄が、意外にも簡単に片付いてしまい拍子抜けする。良いことだけだ。

悩みと云うか心配事がひとつ解決して気分が良くなつた俺は、そのままベッドに腰掛て技能欄を流し見ていた。

「なつ……」
「……」

とんでもない物を見つけてしまつた。

これを取得したら俺はあの病にかかりてしまつかもしれない……が、チートな能力を手に入れた俺としては、手に入れるべき技能でもありそうだ。

その名も

「……『コミッター』だと…？」

しかも説明文が『力・能力を制限する。コミッターレベルの数と能力は自由に設定できる』とある。

これはリアルに『後一回……後一回、俺は変身を残している』的なことが出来るようになるじゃないか！ セリフ『くつ……やつが……あいつが出てくる！ 俺が抑えていくうちに早く行け！』みたいに。いや、コミッターだから外しても“あいつ”が出てくることなんてないけど。

「どうする……ポイントはギリギリ足りるぞ」

本当にチートを使わなくてもギリギリで取得できるだけのポイント

トはある。

ただし、他の技能を取得できるだけのポイントは残らないが……。

「取得」

してしまった。

「どうか、これは男の子なら、こんな能力を手に入れてしまったら取得するしかないじゃないか！ 厨二がなんだつ！ この世界じやそんな病気は存在しないんだ！」

「さて、レベルとステータスはどうよつかな～」

俺はノリノリでリミッターの設定を考えた。

とりあえず、一番リミッターがかかる状態のLV3はサーシヤよりも少し上、LV2でステータス数値100程度。さらにLV1でリミッターかける前の状態。さらにさらに、リミッター解除での倍になるようにした。これは不足の事態に備えてのことで、基本的に使うつもりはない。

これから成長、展開次第でリミッターの数値も弄っていくことになるだろう。

* * *

翌日 朝、食堂にて。

「サー・シャがどうしてもって言つから……本当は嫌だけど仕方なく

宜しくしてあげてもいいわよ

不遜な態度で田も合わせずに言つてきたのは 例の天才少女だつた。

彼女は俺の席の隣に立つて手を差し出している。

「…………はい？」

思わず聞き返してしまつた。

「だから、サーチャがどうしてもつて言つからー。」

少女は怒つたように声を大きくする。

「言われた…………って、何を？」

「だ・か・ら！ アンタと仲良くして欲しいってー。」

俺は少女の顔を半田で見つめ、

「いや、これは仲良くしよつて雰囲気、じゃなーだろ

何も考えずに思つたままを口にしてしまつた。

「なつー。」

少女は顔を赤くして、初めて俺の顔に視線を向けた。

「あ、あたしは別に仲良くなんてしたくないけどー。でもサーチャが！ サーシャが言つからー。」

必死になつて叫ぶ少女。

不覚にも可愛いと思つてしまつたが、何度だつて言おうと俺は口つ
コンじやないと。

「ちよ、リヴィちゃん！？ シュウジさんもー。」

そんな時、サーチャが慌ててやつてきた。

「二人ともなんで喧嘩してんですかー？」

「だつて、あたしはサーチャの言つとおりにしたのに、こいつがー。」

すぐに答えたのは少女だつた。

「俺は何がなんだか分からないままこんな状況に

俺もありのままを答える。

「あ～……えつと、なんとなく分かりました」

俺と少女を見比べて困つたように笑つたサーチャ。さすが賢い子
なだけある。すぐに状況を把握してくれたようだ。

「えつとですね」

サーチャは少女を宥めつづ俺に説明を始めた。

サーチャの説明はこんなところだ。

田の前の少女は天才と呼ばれ、さらにはこの性格もあつて友達がない。サーチャが始めての友達らしい。そこでサーチャは俺とも仲良くして欲しいと少女に言つたそつだ。
そして、

「リヴィちゃん、言い方はこんなですか?」照れてるだけですよ

だそうだ。

「へえ~」

俺は少女を見る。

「な、なんだよ?」

相変わらず顔は真っ赤だな~、どうやら怒っている様子はない。
これが照れてるところのことなのか。

「あ、やっぱこうなり。俺はショウジ。呼び方は好きにしてくれ

手を差し出す。

「リ、リヴィー」

少女 リヴィードがその手を握り返した。
それにしても……なんだか名前がゴツくないか?

「リヴィーで……いい

耳まで真っ赤になつて言ひ。

「よひしへ、リヴィー」
「あう……よ、よひしへ。ショウジ」

呼び捨てかい！

お、まあいいけど。好きに呼び合つたしな。

「ちよ、リヴィアちゃん！？」 カサガに呼び捨てで呼びつかと叫つめ。
シコウジセミは年上なんだじ

サーチャが慌ててこる。

「え？ あたしは誰でもやつ呼ぶや

サーチャに答えながらリヴィアは俺の手を離す。

「だ、駄目だよ。」

「じ、じゅあ何で呼べば良いんだ？ サーチャみたいに呼べばいい
のか？」

「リ、リヴィアちゃんがここ子だつたらお兄ちゃんとかでいいんじ
やなにかなー？」

な、なん……だと？

サーチャの言葉に戦慄する。

「や、やだつ。」

即効で否定するリヴィアだった。

「な、なんで？ 呼び捨てよつここと思つんだが。仲も良やつ
だし。ほら、呼んでみて」
「ぜ、絶対やだつ。」

そこまで話すと話題が戻つてくる。「お、今まで話題を離さると話題が戻つくなれる。」

「ほら。シユウジお兄ちゃんって」

顔は真っ赤でプルプル震えているレビュー。

「シコ、シコウジおに、おにこ……お兄ちゃん
対ヤだから！ 絶対だからなつ！」

言いかけて、やつぱり無理だったのか、リヴィは捨て台詞を残して食堂を飛び出してしまった。

「なんであんなに嫌がるんでしょうか？」

あの様子じゃ呼んでくれないと、ちょっとガツカリしてゐる自分
がいた。

「サリシヤは、『シニヤシお兄ちゃん』と言われ、『シニヤ』も言いかけて、俺の胸に何か熱いものがよぎった気もしたがきっと気のせいだろう。

「どうしてですか……食事」しみつか
「やうですね」

俺とサー・シャは一人並んで朝食を食べるのだった。

＊
＊
＊

ちなみに、握手の時、当然リヴィのステータスは入手していた。
これがそのステータスだ。

名前	リヴィエド
種族	人間
職業	ギルド学院生
称号	天才少女
Lv	5
HP (体力)	23 / 23
MP (精神力)	105 / 105
STR (力)	12
VIT (耐久力)	14
INT (知性)	62
AGI (素早さ)	31
DEX (器用さ)	37
LUC (幸運)	26
CHR (カリスマ)	3

こんな感じだつた。

CHRが3つて……まあ、あんな性格じゃ人望はないか。
それにもMPがバカ高い。さすが天才ってとこか。

スキルは初級魔法は全て取得済み、さらに数個ほど中級の物まで
あつたのには驚いた。

第一章 一話 友達（後書き）

なんか、このロリツ娘書きやすい。

そしてロリコンの道を進む主人公。

話が進んでないのはどういうことだろう？

学院編は基本マッタリ進行かもしだれないです。

「どう、みつけた？」

俺とサーチャにリヴィイが尋ねてくれる。

「私はこれだけしか……」

袋から中身を取り出し両手に広げるサーチャ。

「あ、それ毒草よ」

「あ、ほんとだ！」、「めんなれー」

「謝らなくていいよ。それを学ぶための授業なんだから」
その中のひとつを指差してリヴィイが告げるときサーチャは恥ずかしげに慌てて謝った。

「…………」
「…………はー」

俺がフォローするも落ち込んだ様子のサーチャは結構気にしてしまつタイプだった。

「あなたは？」

リヴィイが話を変えるように俺に聞こかけてくれる。

「ん……ああ、」
「ただけ」

俺は授業用に買った普通の袋をリヴィに投げ渡す。

「はあ！？ なんでこんな一杯あるのー？ まさかアンタ…… その辺の雑草詰め込んだんじゃないの？」
「違うから。 中、確かめてみればいいじゃん」
「勿論よ」

リヴィは袋の中身を地面に出して調べ始めた。

俺たちは今、 授業で薬草採取をしていた。

ギルド員になれば怪我をすることもある。 そんなときに薬草の知識があるのとないのとでは大きな差がある。 なので、 今日は、 昨日教室で習った薬草を学院所有の森で採取することになった。

実技を行うにあたり、 三人一組でチームを組んだのだが、 俺たちは考える間もなく一瞬で決まった。

リヴィと友達（一応）になつたあの日から、 俺たちは一緒に行動することが多くなつた。 俺とサーチャは元々入学前からの知り合いと言つことで入学後も寮以外では良く行動を共にしていた。 そこに俺たち以外とはほとんど話もしないリヴィが入つてきた形だ。

そんな三人だから他の誰かと組むなんていう選択は出でこなかつた。 サーチャは他の女子とも上手く付き合つてているようだが俺やリヴィは仲良くない、 と思う。

まあ、 そんな風にすぐに決まつたがチーム編成が自由で本当に良かった。 教師が強制的に決めて、あのスペイと同じ班になつたら気が休まらないからな。

そんなことより、 今は実習の話だ。

勿論実習前に見本は見せてもらつたが、 サーチャが間違える程度、 薬草に良く似た毒草も生息しているのだ。

俺たち三人は別々にある程度集めてから集合して採取した物の確認作業をしているのだった。

「……ほんとに全部薬草だ」

確認していたリヴィが感心したような声を出した。

「はつは。見直したか？」

「ま、まあ…………少しだけ」

滅多な事では人を褒めないリヴィにそう言われ、俺はちょっと嬉しくなった。多分リヴィより多く集めたのが良かつたのだろう。

「さすがシユウジさんです！」

先ほどまで落ち込んでいたのが嘘のよう、両手を胸の前で合わせ輝く瞳で見つめられて恥ずかしくなった。

「なんでそんなに薬草に詳しいのよ……普通見分けることが出来てもこんなに集められないのに」

集めた量で俺に負けたのが余程悔しかったのだろうリヴィが忌々しそうに俺を見て言った。

「ん、まあ俺の場合、こんな作られた森じゃなくて野生の天然産な森で生活してたからどういう場所にどんな薬草があるのか分かるんだよね」

リヴィの疑問にそれらしい答えを返す。

実際は『薬草採取』の技能のおかげで簡単に見分けられるからな

んだけどね。

「はあー? 森で生活ー?」

薬草とかよりもその事にひびく驚いている。

「うん。普通に森で狩りして生きてた
「野生児?」

野生児で……まあ今の話だけだとやつはつのも無理ないか。

その後、学院に帰りながら俺が記憶喪失であるところ[設定]をリヴィ
イに話した。

田立ちたくないからクラスでそれを知っているのはサー・シャだけ
だったのだが、一緒に行動することが増えているリヴィには話して
おいた方が良いだろ?と思つて教える」とこしたのだった。
リヴィの反応と言えば、

「その歳で何で学院に入ったのか疑問だつたけど、それで納得した」

と、そんな感じのあつけないものだった。

だけど、そこから話が膨らんでこき、サー・シャとの出会いまで離
したところでサー・シャが

「ショウジさんは私の村を救つてくれたんですよー。」

嬉しそうに言つたサー・シャのその一言で話す予定のなかつたこと
をリヴィに追求される破田になる。

「救つた? ビリーハー」と?」

「シュウジさんは村を襲う魔物を倒してくれたんです！」

「…………魔物を、倒した？」

段々と鋭い目つきになつていくりヴィ。

俺は心の中で、サーチャも「ヤメテと祈り続けていた。

「そうです！ 村を襲う魔物は俺が倒す。だから安心して待ついてくれ。必ずかえつてくるから。そう言つて次の田には本当に魔物を倒しちゃつたんです！」

「へえ～」

何故か目を閉じてウツトリした感じに話すサーチャにリヴィが冷めた目を向ける。

てか、何か実際と違くないですか？ 俺が何かイケメンになつてるんですけど。

「…………ねえ」

リヴィはウツトリしているサーチャを放置することに決めたようだ。まあ、それでも俺たちの後ろを歩いてくるから放つといても大丈夫か。

「なに？」

「魔物倒したって……本当なの？」

「ああ～…………どうじよ。

「えっと…………まあ、一応」

なんか今更誤魔化せそうもないし……話してもいいかな？

「どうせいい？ 授業もそんなに優秀じゃないし……倒せると思え
ないんだけど」

疑わしげな眼差しで問い合わせてくる。

やつぱりそれ聞くよな。学院じゃサーチャの方が優秀だし、俺
はまだ攻撃魔法も使えない戦いの素人だしな。剣だって使って見せ
たことはないし、ステータスだつてサーチャより強く、リヴィより
弱いぐらいに抑えてるからな。まあ、力とかそういうのはリヴィよ
り高いけど学院じゃ見せる機会もないからな。

じゃあ、実は使えるんですって……言つか？ 言つていいのか？
でも言わなきゃこの状況は誤魔化せないよな。

「あの人……話してもいいんだけど」

「なに？ 早く教えなさい」

「誰にも言わないで欲しいんだけど、いい？」

「…………いいわよ」

少し考えた後、リヴィは頷く。

「実は学院に入る前から魔法使えるんだよね。それも戦闘向きの
奴」

比較的軽めに言つてみた。

「はあっ！？ なんで黙つてたのよ。 授業は手抜いてたわけ！？」

凄くお怒りになられました。

「手は抜いて……まあ抜いてたみたいもんか。だけじゃ……」

「……なによ？」

不機嫌にこちらを睨みつけるリヴィ。

「俺、こんな歳で入学つてただでさえ田立つのに、さらには記憶喪失で魔法使って魔物を倒しました、なんて言つたらとんでもないことになりそ娘娘？」「まあ……それもそうね」

俺の説明にリヴィは納得したものの、その表情は不機嫌そうなままだった。

「だから黙つて欲しいんだけど」「いいわよ

即答。

「その代わり！」
「な、なに？」
「今度、アンタの使える魔法見せなさいよね」
「それで黙つてくれるなら」

俺はリヴィの言つ通りにすることにした。

「もう隠し事はないでしょうね？」
「えつと……ない、かな」

あるけど、それは絶対に言えない。サーチャにだつて教えてないんだ。

ステータス関係のことは絶対に言つちゃいけない。

「なら、いいわ

「じめんな。隠してて

俺はリヴィに謝った。

折角仲良くなれたんだ。隠してたことで嫌われたりしたら嫌だし

な。

「いいわよ、もひ

リヴィは一瞬目を合わせたあと、すぐにそっぽを向いて小声で呟いた。

数日後の休日。

リヴィには魔法剣を見せた。

教えるとせがまれたため教えることに。俺もリヴィに学院では教えてもらっていない攻撃魔法や役に立つ魔法を教えてもらひ約束をした。

* * *

さらに時間は経ち 学院卒業が近づいてきた。

最初に決めたグループで授業を受けてきたが、卒業試験もそのグループで受けるらしい。つまり、俺、サーシャ、リヴィの三人が俺たちのグループだ。

今日、これから、その卒業試験について説明がある。

「卒業試験って何するんだろうな？」

教室で教師を待つ間、俺は隣に座る一人に話しかける。

「さあね。ま、なんになろうとあたしに掛かれば楽勝ね」「リヴィは不適な笑みを浮かべる。

「シュウジさんとリヴィちゃんが居れば何だって大丈夫です！」

サーリヤが自信たっぷりに人を当てにする意見を言つ。

「いや、サーリヤだつて優秀なんだから頑張ろっよ」「はいっ！ 頑張ります！」

他の班は結構みんな緊張してるのが分かるけど、つちの班はのほほんとした空気が流れていった。

ま、リヴィは魔法教えあつたあとも一緒に勉強してたからお互い学院生レベルじゃないのが分かつてると、サーリヤも一緒になつて学院の魔法以外にも勉強している。リヴィが言つよつに普通の試験なら楽勝で合格出来るはずだ。

少しして、教師が教室に入つてくる。手には大きめの箱を抱えていた。

「卒業試験について説明する。」

教師が声を上げると生徒たちは一斉に静まりかえった。

「この箱に紙が入っている。その紙にはそれぞれ別の任務が書かれている。その任務を達成することが卒業試験だ」

「任務つてギルドのですか？」

生徒の一人が質問する。

「そうだ。その中でも比較的簡単な任務を厳選している。勿論魔物が出る任務もあるがな」

生徒たちが息を呑んだ。

「ま、余程のことがなけりや死ぬ」とはないから安心しき

教師は笑いながら言つが……余程のことがあれば死ぬんだろう？

「じゃあ班の代表はくじを引きこぐるよ。」

それで教師の話は終わった。

そこから中で生徒たちが騒ぎ出す。

「んで、俺らは誰が行く？」

俺は一人に問いかける。

「シユウジでいいんじゃない？」

「私もそれでいいです！」

「あいよ～」

軽い返事を返していくじを引きに行く。ま、誰が行つても同じだろ。

ぐじを引いて一人の下へ戻る。

「どんな任務でしたか？」

サーチャがすぐに話しかけてくる。

「王都から一歩も歩いたところにある洞窟の奥にある珍しいコケを探つてくる」とだつて

所謂、採取系任務つてやつかな。

「ふん。簡単そうじやない。で、そのコケって何？」

「光つてるからすぐ分かるつて。ヒカリゴケって言つたりして」

「コケが光つてるなんて凄いです！」

薬とかなんのかな？

「期限は明日から一週間だつて」

俺は紙に書かれた期限を伝える。

「それじゃ今日は街に行って準備ね」

「だな」

「はいー。」

* * *

準備して旅に出て、何事もなく洞窟のある山に辿り着いた。洞窟の前に来た瞬間、俺たちの来た方とは逆側から爆発したような物凄い音が聞こえてきた。

「な、なんですか！？」

「……爆発？」

二人もそちらを見ている。

音がした辺りから煙が上がっていた。

「ちょっと見てくる。二人はここに居て！」

「あ、ちょっと！」

「シユウジさん！？」

俺は一言言つて煙の方に走る。

二人に呼び止められた気もしたが走り出していたせいもあってそのまま向かうことにした。

走つて五分ほどで煙の上がつている所に出た。

地面が抉れ、周りの木は倒れ、近くに人が倒れていた。

「おい！ 大丈夫か！？」

俺は近づいて倒れている人物を抱き上げる。

「……ぐつ」

呻き声を上げたその人物は、サーチャと同じぐらいの歳の少年だった。

「お前は……」

顔を見て、同じクラスの学院生だと分かった。

「大丈夫かっ!? 何があつた!?!?」

話しかけるが返事はない。

「一体何が つー?」

周りを確認しようとしたとき、俺は何かを感じた。
その一瞬後

「フレイムバーストッ!」

声が聞こえて反射的に身体を横に逸らす。
燃え盛る巨大な火の玉がこちらに向かってくる。

「 くつ!」

が、左腕を魔法が掠める。

「誰だ!?!?」

魔法が飛んできた方に視線を向ける。

「まさか避けられるとは思わなかつた

そこから現れたのは……

「お前……」

その人物も学院生だった。

最初に見た目で十五歳ぐらいだと思った少女だった。

「簡単に罠にかかるてくれて嬉しいわ」

「……罠だと？」

腕を押さえて睨む。

くそ……予想以上にひどい。治療しないとまともに動かせそうもない。

掠めただけでこの威力。こんな学院生が使えるレベルの魔法じゃないぞ。

「ええ。貴方たちをバラバラにすること」

「狙いは……何だ？」

バラバラにして一人ずつ始末しようってか？

まさか、それが卒業試験？ つて、んなわけないよな。

「狙いは、そうねえ。最初はあのむかつくガキだけだつたんだけど……もう一人の子も結構優秀みたいだし一緒に頂いちゃ おつかしくら」

狙いはリヴィ？ それにサー・シャもだと……？

「何で二人を狙うーー？」

俺は叫ぶように問う。

「それを知る必要は無いわ」

「……何？」

「貴方はここで死ぬんだからねつー」

言つて杖を向けてくる。

「フレイムバースト！」

「ぐつ……」

転がつて避ける。

「フレイムバーストッ！」

避けた先、別の場所から別の声。

「ぐああつー！」

その魔法の直撃を受ける。

「はあ……くつ、はあ……」

転がつて身体に纏わりつく炎を消す。

「ぐう……なつー？ お前は」

そこには先ほど倒れていた少年が俺に杖を向けて立っていた。

「ふふ。だから言つたでしょ？ 簡単に罠にかかるてくれて嬉しい

わって

女のあざ笑つかのよつな声。

「お前ら……思い出した！」

「こいつら……あのスパイの奴と同じグループだ！」

第一章 二話 罷（後書き）

まつたり進行はやめにしたぜ！

学院編をマツタリ進行したら全然話が進められなかつたので書き直しました。

日常編はやめても、これから結構長い話になると思いますので。あくまで予定ですが。

第一章 四話 解除

「お前達も……帝国の間者か？」

魔法を撃たれ、転がった先に生えている木に体を隠すよひ寄り添わせ様子を伺いながら問いかける。

「へえ……なんでアンタが知ってるんだい？」

女が俺の言葉に表情を愉快なものに変える。

「俺の質問が先だろ……。で、どうなんだ？」

女の質問に答えるつもりはない。

だが、こいつ等が持ってる情報は引き出せるだけ引き出してやる。まず間違いなく、この一人はあいつの仲間だ。

なんでギルドの学生がスパイの仲間をしてるのか分からぬ。だからここで必ず聞き出す。……そして、その理由次第で、絶対に倒さなきゃいけなくなる。

初めて人を殺すことになるかもしれない……それは怖い。怖いけどサーチャとリヴィが危険な目に遭うのを防ぐためなら……やつてやるー。

「まあ、仲間と言えばそつだね

女が笑いながら言つ。

「……何故答える?」

少年が女を睨みつけた。
そんな少年を楽しそうに見て、

「どうせ殺すんだからいいだろ?」

「必要ない。殺すならすぐに。彼は何か企んでいそうだ」

「分かってるよ。でもその方が面白そりでしょ? ま、何を企んだ
ところどうすることも出来ないだろ?」

楽しそうな女とは対照的に少年は表情から何も読み取れず、冷静
にこちらの思惑を分析していた。

サーシャも随分と子供らしくない子だけど、こいつも相当だ。雰
囲気で絶対に普通の学生なんかじゃないのが良く分かる。あの少年
からは情報は引き出せないだろ?。

だとすると、やはり

「どんな繫がりだ? お前も帝国の者か?」

「この女から聞き出すしかない。

俺をナメてくれてこるつちに全部吐いても「アタシ」。

「はあ? ふふ、アタシは帝国なとてどうでもここによ
「……なんだ?」

帝国の関係者じゃない……?

「といつか、帝国つてゆーが国血脉がどうでもいいの
「あんたはこの国の出身だろ? なんで奴に味方する?」
「ん? 確かにその通りだけど……わざわざアタシは
この国もどうでもここに」

やつぱり出身はこの国、エステイアであるようだ。

「どうでもいいなら、何で帝国につく?」

俺は一番訊きたかったことを尋ねた。

「簡単なことよ。この仕事が上手くいった暁には帝国でそれなりの地位を用意してくれることになつてゐるのよ」

「地位……だと?」

そのためにサーシャたちを犠牲にする気つてことか?

「そう。アタシはね……上に行くためならなんだつてするわ。それこそ裏切りだつてするし、そのために必要な殺しだつて厭わない。上に行けるなら別にこの国でなくとも構わない」

なるほどね。

こいつは自分本位な人間だ。自分のためなら他人が犠牲にならうともどうでもいいと思つてゐる。しかもその犠牲が、いくら天才とはいえリヴィのような幼い子でも構わないときてる。

「……気にいらねえ」

呴きが漏れてしまふ。

「別にアンタに気に入られようが気に入られまいがどうでもいいんだけど」

女は気にした風でもなく言つた。起じつた様子も無いことから、

本当にビビりでもいいのだろう。

「ま、でも……だつたらこの坊やはもつと氣に入らないかもね」

「……おー」

そう言つて自分を指差した女を睨む少年。

「……どうこう事だ?」

俺は訊きかえす。

もつと氣に入らない理由だと……それは一体なんだ?

「こいつは自分より優秀なあのガキが嫌いなのさ」

「……ふん」

少年は不貞腐れたよつとそっぽを向く。

「嫌い……だと?」

「ああ、そうさ。嫌いだから消えて欲しい。そして自分より優秀な人間がいなくなれば自分が一番優秀だ。てことらし!。ま、ガキの嫉妬だね」

女が少年を厭らしい笑みで見つめながら言つ。

そんな……ことで?

そんなことでリヴィを殺すつていうのか!?

ふつふつと怒りがこみ上げてくる。

「テメエらはそんな下らない理由での二人を犠牲にするつてのか!?

感情的に叫んでしまう。

「……下らない？」

が、その言葉に女は表情を一変させた。

「お前に何が分かる！」

女が叫ぶと同時に、俺が隠れている木が衝撃に揺れる。見ると、女が木を蹴りつけた体勢でこちらを睨んでいた。

「わかんねえよっ！ 自分のために他人の命すら犠牲にする奴の気持ちなんて！」

俺も腕を押されたまま立ち上がりつて女を睨み返す。

「あんたは知ってるかい！？」

女が腰の剣を抜き斬りかかってくる。俺も動く方の腕で剣を取り防ぐ。

「……くつ」

焼かれた方の腕に痛みが響く。

「知ってるかって 何をだ！？」

痛みを堪えて問いかける。

「底辺の人間がどう扱われるか、さつ！」

底辺……つて、どうこうことだ。

「虫けら……いや、それ以下の『川』のまゝに扱われるんだよ。」

剣戟の速度が増す。

防ぐのに精一杯で話す余裕がなくなつてくる。

「殺されても文句も言えない。アタシの両親だつて……」

まるで奴隸だな。

こんな世界じゃ奴隸なんてモノがあつても不思議じやないけど。
そんな奴が上に行きたいと思うのも分かる。

「それで、裏切つて地位を得て……そんで自分を蔑んできた人間の
よつになりたい訳だ」

「何が言いたい？」

確かに話を聞く限り、コイツは奴隸のよつな生活をしてて、両親
は殺されて、でも何も言えなくて……つて、同情しちまつたうにな
る。

けど

「お前……そのままじゃ、お前のまゝ底辺を『川』のまゝに扱う人間
と一緒になつちまつてことだよ」

女は無言で俺を睨む。

俺は女が動かないのを確認してから、今度は少年に目を向ける。

「お前は……何か理由、あんのかよ？」

「僕？ 僕には大層な理由はないよ」

少年は涼しげに表情ひとつ変えずに答える。

「言つ氣はないけどね。ただ……僕は一番でなきや意味がないんだ。一番じやなきや生きている必要がない」

淡々と告げる少年。

「コイツ……くそつ！」

どいつもこいつも厄介な……女もそつだし、この少年も何か大きなモンを抱えてそうだ。

完全に悪い敵つて断言できないからやり難いっての！ でも、このままじや遅かれ早かれ殺される……リヴィやサーシャも心配だ。あのスペイにはいくら天才のリヴィでも手も足も出ない。それ程、二人のステータスには差がありすぎる。

「もう訊きたいことはないね？ 答える氣もないけど」

少年が俺に杖を向ける。

「何を言われようとアタシは上にいくよ……だからっ！」

女も少年に並んで杖を向けてきた。
二人の杖の先に魔力が集まっていく。

「コリッター」

やつてやる！

考えるのはサー・シャとリヴィを助けた後だ。
出来ればこの一人も何とかしてやりたい。今ならまだ間に合つて、

ちゃんと理由が分かればチートを使ってでも救つてやる！

『フレイムバーストッ！』

一人の杖から魔法が放たれる。

二つの大きな炎の塊が俺に向かって迫つてくる。

「解除、LV1！」

急激に上がる身体能力。

腕の傷も急速に治癒されていくのが分かる。

剣を握る手に力を込める。

前、迫つてくる火炎に目を向けて、

「海波斬つ！！」

剣を振つた。

* * *

ショウウジが去つて少しして、

「く……かはつ……」

「リ……リヴィ……ちゃん」

サー・シャとリヴィは地に倒れ伏していた。

「どうかな……大人しく言つことを聞いてくれれば、これ以上痛い目に遭わなくてすむけど」

普段と変わらない笑みで一人を見下ろす男、帝国の者であるレイ
本名ショナイス。

「なんで……あなたなんかに……」

ショナイスを睨みつけてリヴィイが言つた。

「ふふ、天才の自分が何でこんな男について？……簡単なことだよ。単に君よりも僕の方が強いだけのことさ」

ショナイスはそう言つて、倒れたままのリヴィイの頭を踏みつけた。

「あつ！？」
「リヴィイちゃん！？」

サーリヤが悲鳴のような声を上げるも、身体は動かすことが出来ず、リヴィイの元へ向かうことが出来ない。

「サーリヤだつけ？ 君も優秀なようだし、帝国に従つならこれ以上手荒な真似はしないよ」

「…………」

サーリヤは無言で、普段の彼女からは想像も出来ない険しい表情でショナイスを睨みつけていた。

「リ、リヴィイちゃんから……足を……どけてください」

ボロボロの体でフワフワになりながら立上がるサーチャ。

「従う氣はない」と?

「絶対にありますー!」

サーチャは断固とした態度で言に切つてショナウイツに杖を向けた。

「ほひ。僕とやると申すですか?」

「…………」

「ふふふ。杖が震えてこますよ」

面白そうにショナウイツはサーチャを見る。

「サーチャ……逃げ……」

リヴィは頭を踏みつけられながらもサーチャに逃げないとおもつて、
した。が、

「余計なことは言わなくていいんですよ」
「がはつー!」

お腹を蹴られて地面を転がる。

「リヴィちゃん!?

サーチャが心配そうな声を出し、リヴィとショナウイツの間に移動
した。

「…………サー…………逃…………」

お腹を蹴られた痛みでリヴィイは声を出すことが出来なかつた。

リヴィイは初めてだつた。

自分を一方的に痛めつける程の敵を前にしたこと、こんな風に地面に這い蹲ることも。

でも、そんな悔しさや慘めさよりも、目の前で、自分を庇つよう敵との間に立つてゐる“攻撃魔法の使えない”優しい少女が心配だつた。

初めての友達。

そんな友達のことが心配だつた。自分のことはいいから逃げて欲しかつた。

そんな風に自分より誰かの心配をするのは初めてだつた。

「では、少し痛めつけてあげましょ。最悪、帝国に連れて行つてしまえばどうにでもなりますし」

ショナイツは杖を取り出しサー・シャに向ける。

『ブラスト』

ショナイツが唱えると、サー・シャを中心に爆発が起きた。

「…………っ！」

リヴィイの瞳に、宙を舞つサー・シャが映る。

サー・シャはそのまま、受身も取れずにリヴィイの後方、地面に叩きつけられた。

「サ.....サ.....サ.....」

首だけ動かしてサー・シャを見ても、彼女はピクリとも動かない。

あつ

目を見開くリヴィ。

彼女の瞳に映るサー・シャの姿は、服はボロボロに破れ、身体は傷だらけだった。

「どうしました？ 声も出せないほどショックでしたか？」
ショナイツが楽しそうにリヴィに近づいていく。

「う……ああ……サ――……シャ」

敵の魔法に倒れた“親友”を視界に映す度、リヴィは自分の中から何ががこみ上げてくるのを感じた。

「あ……ああ……あああああああああああつー。」

出せなかつたはずの声が出る。

「うあああああ！」「な、なんだ！？」「これは……！」

力の入らなかつた身体に力が入るようになる。

「魔力……？ まさか、目に見えるほどの高密度な魔力が全身から噴出しているというのかつー？」

ショナイトの驚愕の叫びが響くがリヴィには何も聞こえない。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ！..」

立ち上がりたリヴィはシユナイトに顔を向け、彼女の物とは思えない、低く大きな雄たけびを上げた。

第一章 因話 解除（後書き）

お気に入りが200件突破。
ありがとうございます！

そして、やっぱり文が安定しない。
苦戦したらチートじゃないじゃんと思わなくもない。
まあ全開なら指先ひとつでパンんだけど。

第一章 五話 全開

リヴィと魔法訓練中。

俺は魔法を使う敵に対抗できる手段がないことに気がついた。そこで思いついた手段というのがダイの大冒険の中に出てくる剣術であるアバン流刀殺法。その中のひとつ、『海波斬』だつた。

海波斬は原作で主人公のダイが海を割つた技であり、炎や風といった魔法にも有効なスピードを重視した剣術だ。

さすがアバン先生。

海波斬で俺に迫つてきていた炎は真つ二つになつた。

使つたのは初めてだつたけど想像通りの効果をもたらしてくれた。

「なにっ！？」

女が信じられないといったような声を上げた。少年も目を見開いて驚愕した。

「魔神剣っ！」

叫ぶと共に、剣を振る。

地面を這つ衝撃波が女と少年の間を日掛けて奔る。

「つー？ くつ！」

「当たらないよ！」

魔法とは違う俺の剣技に驚いていた一人だが、かろうじて魔神剣の衝撃をかわした。

……それぞれ“別の方向”に飛び退いて。

「それが狙いだ！」

元々、魔神剣はゲームでも繋ぎや牽制に使うことが多い技である。俺も一人を分散させる目的で放ったのだった。

「なつー！？」

飛び退いた二人が着地する前に体勢を低くして最速で女の前に駆ける。

覚悟は決めた……人を攻撃することに、もう躊躇は無い！

「虎牙破斬ツ！」

低い体勢から女を切り上げる。

「おーりあー！」

身体を回転させ、女の手を蹴り杖を落とす。

そのまま、今度は剣を振り下ろす。

「うおおおおー！」

「がはつー！」

地面に落ちた女は肺にある息を一気に吐き出し、動かなくなつた。

「ふう」

着地して女を見て、安堵の息を吐き出す。

まあ、峰打ちだし、生きてはいるだろ?とは思っていたが実際呼吸をしているようで胸が上下に動いているのを見て安心した。そして、俺は残る少年に視線を移す。

「…………」

少年は俺が女をあつさりと倒してしまったのが信じられないのか、半ば呆然とした様子で倒れた女を見つめていた。

「…………」

少年が何かを呟く。

「あん? 何か言つたか?」

「 何なんだ、今のはつ!」

くわっと此方を睨みつけてくる。

「何なんだと言われても……剣技だけど?」

俺は剣を見せ付けるようにして答える。

「違う! そうじやない! 最初に僕たちを狙つたあの技だ!」

「…………魔神剣の事か?」

「そうだ! あれは何だ!? あんな魔法は聞いたこともない。風の魔法か!?」

少年は見たことも聞いたこともない俺の技を見て焦つているようだ。戸惑っているように見える。

なら、少年には悪いけど今のうちに

「魔神剣！」

衝撃波を飛ばし、先ほどのように少年の懷へ駆ける。

「同じ技は効かない！ ウィンドブレイク！」

衝撃波を避けると同時に杖を構えていた少年が俺に魔法を放つ。

「 くつ！」

少年の魔法に剣が弾かれ、後方へ飛んでいつてしまった。

「これである技は使えない。僕の勝ちだ！」

少年が笑い、杖を向けてくる。

が、俺は足を止めることはしない。そのまま少年の懷に駆け寄り、

「勝つたのは俺だよ 」

手のひらを少年の腹に打ち込み、

「 なあ！？ くつ、フレイムバ 」

少年は剣を落としても構わず懷に入ってきた俺を驚愕の表情で見、焦つたように呪文を唱える。

「 獅子戦吼ツ！ 」

だが、それよりも早く、俺の技が炸裂した。

腹に打ち込んだ手のひらから衝撃波を撃ち出す。

その衝撃波は獅子の形を形成する。

「ぐああ……」

衝撃に少年は後方へ吹っ飛び、その先にあつた木にぶつかってダウンした。

* * *

一応、二人とも杖は取り上げた状態で安全な場所に寝かせておくことにした。

「…………負けたんだね」

運んだときの衝撃かしらないが女が意識を取り戻して呟いた。

「ああ、俺の勝ちだ」

「…………そつか」

俺の言葉に女は一言、呟いた。

「ま、今は寝てな。サーシャたちを助けたらトロトロ話聞いてやるから」

「ふん。…………アンタに話してどうなるってんだい。大体、ギルドに

報告したらアタシたちは処刑……良くて牢獄暮らしだ。話なんて出来ないよ」「みー

力なく笑う。

「……ギルドに報告なんてするつもりないけど?」

女は田を見開き俺を見る。

「アタシは……アンタを殺そうとしたんだよ。アンタの仲間も犠牲にするつもりだった」

「そうだけど。……俺は死んでないし、仲間も絶対に助ける。あいつらが赦しや問題ないだろ?」

女は少し考えて、

「……赦すと思うのかい?」

「ああ、当然。元々あの男が居なかつたらこんなことしなかつただろ?」

「出来なかつた……てのが正しいけどね」

「それでもいいさ。結局、全ての元凶はあいつだ。お前らはつけ込まれただけだろ?」

俺が言つと、女は信じられない物を見るような田で俺を見た。

「おかしな奴だね。アタシはただの野心家だよ。ただ上に行くためにアンタたちを利用しようとした、ね」

「自分からそう言つ奴は根っからの悪人じゃなって思つよ、俺は。それにあの時、必死に叫んでたお前は余程の理由があるんだろう、演技には見えなかつた」

「…………馬鹿だね」

「馬鹿で結構だね。俺は俺のやりたいように生きるだけだ」

お前らを救つてやりたいとか、自己満足の押し付けだ。でも、やりたいからやる。

折角チートな力を手に入れたんだ。自分の信じた道を真っ直ぐ突き進んでやる。

「じゃあな。ちゃんと一人を助けて戻つてきて話をするぜ。トロト

ン、な」

「…………ふん」

女はそっぽを向いて鼻を鳴らした。俺は一人を助けるため走り出した。

…………走り出したのは良かつたのだが、

「…………マジかよ」

「…………アンタ、あの子たちの所に行つたんじゃないのかい?」

十分以上走つた末に女と少年を寝かせた場所に戻つてしまつた。

端的に言えば迷つたといふやつである。

…………森で迷つたのはこれで一度目か。自分が方向音痴だと認めるべきかもしれないと思つた。

「あの…………洞窟はどつち、ですかね?」

恥ずかしさで顔が熱くなる。

「…………あつち」

女が呆れた顔で洞窟の方角を指差した。

「あ、あはははは……じゃ、そゆことでー。」

ビシッと腕を上げて、俺はその場を走り去った。
なんとも締まらない俺だった。

* * *

などとこうことがあり、一人の元に辿り着いたとき事態はほとんどないこととなっていた。

「…………なんだ、これ」

目の前の光景に思わず眩いでしまう。リヴィの身体から目に見えるほどの魔力が噴出している。

それに 予想……いや、事実ステータス数値からしてリヴィでは男の相手になるわけがないのである。
それなのに

「ウアアアアアアツー！」

「くつー！」

対等に男と戦りあつていた。

いや、対等以上だ。とんでもないスピードで男を翻弄している。

「アイシクルレインツ！」

男が唱えるとリヴィの上空に大小様々な大きさの氷柱が現れ、リヴィ目掛けて襲い掛かる。

「ガアアツ！」

が、リヴィが吼えると襲い掛かるとしていた氷柱が霧散した。

「アアアアツ！…」

そして、魔法を撃つた体勢で固まっている男に向かい腕を振り下ろす。

「ちつ」

男はバックステップでかわすが、着地と同時に男の服が何かに引っかれたように裂けた。

良く見ると、リヴィの手の先から出ている魔力が鋭く尖った爪を形作っていた。

「リヴィ……キレてる？ てかアレはなんだ……リヴィは人間だよな」

ステータスを見たしリヴィが人間であることは確かだ。

まさか、この世界の人間はキレるとあんな感じになるのか？
でもなんでリヴィイはキレて

「サー・シャーー？」

守られるようにコヴィイの後方に倒れ伏しているサー・シャを発見する。

「サー・シャ、ビーブしたつー？ 無事なのか！？」

サー・シャに駆け寄

「ガア！」

「つー？」

サー・シャに近づけた途端、リヴィイが俺にまで攻撃を加えて
きた。

……見境がなくなつてんのか？

「リヴィイ！ 僕だ！」
「フシユウウウ！」

呼びかけても、リヴィイは俺を睨み威嚇してくるだけだった。

「くそ。天才ではなく化け物だったか」

男が少し離れたところで呟く。

「ああ！？ リヴィイは化け物なんかじゃねえよー！」

反射的に言い返す。

「ふん。お前が『ここにいるところ』とほの一人は失敗したわけか
……役立たずめ」

男は吐き捨てるように言ご、

「あれが化け物じゃなくて何なんだ？ 人にあんな真似は出来ない。
目に見える魔力を集めるだけならまだしも、それを物理的に傷を与
えられる武器に変化させるなどとはね」
「ちょっと特別なだけだろ！ あいつは化け物なんかじゃない！」

お前がリヴィをこんなにしたくせにフザけるな！

「ふん。まあいい。『ここ』のお前らが同士討ちしている間に退散する
ことにしよう」

そう言つて男は背を向けた。

「待て！ ぐつ」

追おうとするもリヴィの攻撃によつて阻まれる。

「はつはつは。君程度でどうにかなるとは思えんが、時間稼ぎは頼
んだよ？」

男の余裕ぶつこいたセリフにカチンときた。

「リヴィター」「
シャアツ！」

リヴィの攻撃を腕を掴むことで阻止する。

「全解除ーー！」
「ツー！」

叫び、リヴィの腹に一撃を入れると、彼女は声を出すまもなく意識を失った。

第一章 五話 全開（後書き）

またまた少し短めで「めんなさい」。
今更なのですが、ちょっと夏バテ気味です。
もう夏も終わるのに……。

一人とも気を失っているだけで呼吸もちゃんとしてこることを確認してから立ち上がり逃げようとしていた男に対する。

「絶対逃がさねえ……」

睨みつけながら呟く。

まずは全力で男を捕まえる。

一人をちゃんと回復させたいが、のこのこと逃がすわけにはいかない。だから即効で捕まえて一人を治す。リミッターを全て開放した今なら何だつて出来るはず！

「時間をかけると一人が心配だ。だからすぐに終わらせてやる！」

何の躊躇いも容赦も無く捕まえる。情報はその後に聞き出せばいい。今は一人が心配だ。

「ふん。厄介なそのガキは魔力の放出を限界までして気絶したようだけど、君一人でどうやって僕を捕まえるんだい？」

不敵な笑みで余裕な態度で言う。

どうやら「コイツにはそう見えていたらしい。ということは俺のリヴィへの一撃が見えなかつたということか……ま、それだけステータスに差があるってことだろうな。

「…………行くぞ！」

が、そんなセリフにいちいち返答してやる余裕はない。

「アイシクルレインー！」

剣を構えた俺を見て、即座に魔法を放つてくれる。
さすがに反応速度がさつき戦つた二人とは比べ物にならないくらい早い。

だけど

「甘っこー。」

俺は氷柱がある上空へと跳躍する。

「なにっ！？」

勿論、ただ跳躍するだけではない。
俺の身体は炎を纏っている。

炎に触れた氷柱は蒸発し、俺の身体に届くことはなかった。

「行くぞ！ 鳳凰

「

ジャンプの高度が最高点に到達し、落ち始める前に剣を構えて技を繰り出す。

身体に纏わりつく炎が段々と鳥の形に変化していく。

「天駆ツー！」

叫び終わると同時に、俺の身体は男に向かって滑空する。
そのまま剣の峰で切りつける。

「ぐああー。」

男の後方に着地し振り向ひさきに剣を逆手に持ち替える。

「今なら使える最強の技を喰らえ！ アバン流刀殺法奥義」

逆手に持つた剣が光り輝きだす。

「アバン……」

男に向かつて突進。

「ストラアアアツシユ！…」

男の横を駆け抜けると同時に腹を薙ぐ。

「ぐあはつ！…！」

勢いの収まつたところで振り返ると、男はピクリとも動かない。近づいて男の顔の横に立つ。

それでも動かないところを見るに、男は本当に氣絶しているようだつた。

俺は袋からロープを取り出し、男を厳重に縛り上げた。それからサー・シャとリヴィの元へ向かつた。

「待たせたな……。今から治療してやるから」

持つていた剣を置いて、まずは傷の多いサー・シャの身体に手を添えた。

手のひらから青白い光が溢れ、サー・シャの身体を包んでいった

* * *

「今日はほんと大変だつたな～」

ギルドの食堂。

そこで今、サーチャとリヴィの三人で食事をしながら話をしていた。

「大変つて……あたしは最後の方は良く覚えてないし、サーチャなんて死にかけてたはずなんだけど……」

元気にパンを頬張っているサーチャを見、

「なんでそんなに元気なのよ！？ ていうか傷ひとつないのはなんで！？」

叫ぶ。

「ふえ？ ……」くつ。えつと、私もある人に魔法撃たれてから覚えてないです

口に含んでいたパンを飲み込み答える。

「アンタ！」

ギロリと俺を睨みつけてくるリヴィ。

「なに？」

何を言われるか大体は想像出来ているので、それ程慌てることなく先を促す。

「アンタがあたしたちをここまで運んだんでしょう？」

「うん。まあね」

「あの状況からどうやってあの男を退けたわけ！？ それにサーシャやあたしの傷が治つてるのは！？ それにあの状況だとアンタの方でも何かあつたんじゃないの？」

やつぱりそれか。

そうだな

「俺が駆けつけたときには何か凄く強そうな人があの男を退治したあとで、その仲間の回復魔法の達人が一人を治療してくれたんだ。俺の方も通りすがりの仮面で顔を隠した強い人が助けてくれた」

超適当に作った言い訳を自信満々に言い切った。

実際はリミッターを全て開放した状態でなら回復やら蘇生やら結構何でもありな魔法が色々と使えるようになるのでそれで治したのだが。さらに、ステータスで確認したところ ちなみに、 その時に確認したんだけどリヴィの特殊技能欄には『魔力暴走オーバードライブ』という項目があつた。これはマイナスの技能であり、自分では制御不可能らしい。訓練やレベルアップなどの成長である程度は抑えることが出来るらしいが……これは後日良く調べることにした。リヴィはM Pがゼロに近かつたので自分の物を分け与えておいたのだった。

「へえ、そうなの……って、んなわけあるかあ……！」

ぽかつと頭を殴られるが、天才少女といつても、それは魔法にしてのことと筋力その他は比較的ステータスの低いリヴィにされたところで大して痛くもない。しかも俺の頭を叩くためにジャンプする様がとても可愛らしかった。

が、言い訳は即座に見破られてしまった。

どうしようか……。

事実を言えば簡単なんだけど、それを言つて、二人に拒絶されるのは怖い。今までどおりでいられなくなるんじゃないかなって思つてしまつ。サーチャやリヴィのことは勿論信用してるけど……簡単に言えることぢやない。

「はあ…………まあ、いいわ。言いたくないなら別に無理に聞こうとは思わないし、ね？」

俺が悩んでいると怒氣を沈めたリヴィがそう言い、

「はい。良く分かりませんがシコウジさんのこととは信じてます」

「う、」めん。ありがとう。でも言いたくない……つてのことはちょっと違うって言うか……いつか話すよ。決心がついたら必ず

とりあえず、それで二人とも納得はしてくれた。

「でも、最後にひとつだけ、これだけは聞かせて」

リヴィが真剣な表情で俺を見る。俺もその目を見返す。

「あしたちを助けてくれたのは……アンタ？」

「うん。方法は言えないけど……そうだよ」

俺はそれだけせりやんと答えることにした。

「 わーい…… め、 いいわ。 いつか話しなさによねー。」

「 あ、 ああ。 サーシャもそれでいいかな?」

「 はー。 私はシユウジさんを信じますから」

困惑のない笑顔で話すサーシャ。

ここまで信用してくれるなんて、 と嬉しくなる。 と同時に話せないことに罪悪感も大きくなる。

「 つか、 話そう。

そう、心に誓つた。

* * *

「 ああ～～～～～。 てか、 卒業課題ひつすんのよつーー?」

食事を食べ終えたところで急にリヴィイが叫んだ。

「 じつしたの、 つぐいちゃん?」

サーシャが口を拭いて突然立ち上がりて叫びだした友に尋ねる。

「 サーシャー！ アンタは何で落ち着いてるのー？ 」 そのままじやあたしたち卒業出来ないのよー?」

「 あ、 そういうえば…… そつでした」

今気付いた、サーチャの表情はまさにそんな風だった。

「まあまあ、落ち着いてリヴィ」

「アンタも少しほ嫌でなさいよー。」

宥めようとしたら、また殴られた。

「あたしがつ！ 天才のあたしが卒業出来ないなんて！！」

「この世の終わりのような勢いで頭を抱える。

「あのや、そのことなんだけど……」「なによ？」

ギロツと据わった目で、今まで聞いたこともない低い声で、リヴィは俺に答えた。

「課題のヅツなら……実は……」

袋から課題の目的『ヒカリゴケ』の入った瓶を取り出す。

「あ、ああ、アンタ、な、なんで……？」

「洞窟で出会つた通りすがりの親切な人に貰つた」

「またそれかっ！」

ぽかつ。

「いや、実は……普通に採つてきた」

実は一人の治療後、リミッター無しのステータス全開＆身体強化の魔法を使って最速で採取してきたのだった。

「アンタは…………もうこいわ。このぐらいじや驚かない」「さすがシコウジさんです！…」

リヴィは呆れたよつこ、サーシャはキラキラと眩しい瞳で俺を見た。

「まあ、これで卒業出来るよな？」

「そうね。それを提出すれば無事…………って、今日は何…………日？」

リヴィの顔が引きつる。

「もしかして…………今日が期限じゃないの？」

俺とサーシャを見てリヴィが告げる。

「…………え？」

「…………そういえばそうですね」

俺はハツキリと忘れていて、サーシャも今気付いた様子だった。まあ、無理もない。

洞窟に着くまで二日。

さらに戦闘＆一人をこの町まで運ぶのに二日。

さりにさりに、その後疲れで一日眠り、忘れていた襲撃者二名を連れて戻つてくるのに二日。

サーシャとリヴィが目覚めたのがつい先ほど。

今は日付が変わりそうな時間。

とこ「う」とほ、

「い、急ぐのよつー早く提出しないとーー。」

「そ、そうですねー。」

「お、おづー走るぞー。」

俺たち三人は受付へ向けて全力で走るのだった。

第一章 六話 帰還（後書き）

やつぱり戦闘は難しい。

チートで苦戦はほとんどしないってだけで戦闘は『バーン、ドーン、倒した』的な感じになってしまいそうですが、そつはならない描写が出来ればいいと思います。

次から新章入ります。

第二章 一話 クラン

今日から、学生ではなく正式なギルドとしての生活が始まる。学生として安全な敷地で魔法の練習などしていた生ぬるい環境から、魔物討伐、盗賊退治など、時には命がけの任務を受ける厳しい環境へと激変する。

学生上がりにこきなり危険な任務をさせることもやつやつないと思つが気持ちは引き締めていこう。

特に俺は他のクラスメイトと違い、そんな悠長なことを言つてられる環境ではないのだから……。

* * *

卒業数日前

「はあ～……学生ももう終わりかあ

朝食の席、食器の片付けられた机に頬っぺたをくつつけて感慨に浸りながら呟く。

学生生活……最初は年齢とか能力とかのことで不安があつたけど、思い返せば中々良い生活だったな。

サー・シャは相変わらず俺を慕ってくれているし、リヴィーという仲間も出来た。

それにこの一人ほどではないが、そこそこ仲良くなれた奴らもいる。

わつ別れなきや いけないとなると寂しい気持ちが沸いてくる。

「何をダレてるのよ。今日は「これからのこと」を決める大事な日じゃない」

呆れた眼差しで俺を見るリヴィ。

「いや、分かってるんだけどさ……」

今日は卒業試験に続く大イベントがあるので。

「だつたらそんな風にしてないで考えなさい。まだ決めてないんでしょ？」

リヴィに尋ねられる。

俺は突っ伏していた顔を上げ、姿勢を正した。

「そうだけど……決めるつたって良く分からないしな」

肩を竦めてみせる。

「分からなくとも決めなきや仕事も貰えなくなるわよ
らしいな……決めなきやだよな」

ため息を吐く。

「リヴィは決まってるんだつけ？」

「まあ、ここに来る前から決めてたからね。ま、上手くは入れる
かは分からぬけど……」

さすが天才。将来のことも良く考へてゐるねえ。

「サー・シャはどうする?」

「シュウジさんと一緒にいいです」

サー・シャは即答で返す。

「アンタ……少しは考えなさいよ」

「でも……私も良く分からぬし」

サー・シャも元々は村娘。ギルドなんかに所属するなんて夢にも思つてなかつた子だからな。ギルド関係のこと疎くても仕方がない。

「サー・シャ、ずっと俺といふ」ことないし、自分で決めなよ

「え……迷惑ですか?」

泣きそうな顔になるサー・シャ。

「違うから! 一緒に居てくれるのは嬉しいんだけどさ。今えなくなるわけじゃないし、自分の行きたいところに行つた方が良いよ。それがサー・シャにとっても良いことだと想つ。それに……」

俺はそこまで言つてリヴィを見る。

「な、なによ?」

不審な顔で此方を見るリヴィ。

「リヴィだつてサー・シャと別れるのは辛うだし、そっちの方が良かったらリヴィと一緒に居てあげるのも良いと思つた」

「な、なにをつ 別にそんなことつ」

「ないと?」

「ない……わけじゃ、ないけど」

顔が真っ赤なリヴィだった。

「リヴィちゃん……」

サー・シャは嬉しそうな表情だった。

「うつ……サ、サー・シャが一緒なら、そりゃあ嬉しい、ナビ」「リヴィちゃん!」

リヴィに抱きつくサー・シャ。

なんとも微笑ましい光景だった。

「……まあ、これから説明があるからしつかり考えなさいよ」「はーいっー』

リヴィの言葉に元気良く返事をする俺とサー・シャ。

そんな俺とサー・シャを見て、リヴィは深いため息を吐くのだった。

今俺たちが話していたことは卒業後について。
どうやら学院を卒業しただけではまともな仕事にはあらつけない
らしい。

教師から、そしてリヴィから受けた簡単な説明によると
卒業後、卒業生はギルド所属のクランに所属するらしい。クラン
といつのは簡単に言えばギルド員で結成されたパーティ、チーム、
組、といつ……まあ、組織のよつな物だ。

ギルドには、そのクランがいくつもあり、そこに所属し仕事を請ける。

クランには古い物から新しい物まであり、実績や名前が売ればそれだけ仕事を貰いややすくなる。クランを指名で入ってくる仕事もあるらしい。

つまり、ここで入るクランによつて、これから的生活が決まるといつても過言ではない。

さらに、クランは設立するための規定があり、どんな新クランであろうと高ランクのギルド員が所属しており、新人はその高ランクギルド員に学ぶことが出来る。クランとしてもクラン員を育て、その新人がこなせる仕事が増えればクランの評価も上がるるので、大抵はどこかのクランでも新人育成には力を入れているようだ。

上昇志向の強い者は実績あるクランを目指すのは当然で、リヴィもギルド一の地位を確立しているクランに行くことを希望している。俺はと言えば……リヴィとの会話通り決めかねてい。

リヴィのような生き方もいいとは思うが、中堅ギルドで平穏に生きるのもいいんじゃねえか、とも思つのだ。

何が正しいなんてない。

思ったように行動すれば良い……か。

なら

「んじゃ、説明行きますか。今日は各クランの代表者たちも来るんだしな」

この田で見て、実際に話をして、そして入りたいと思つたクランに入ることにしよう。

リヴィやサーチャと、これまでのよつに三人一緒にいれたら良いとは思うが、学院の成績からしてそれは難しそうなのだ。

だったら自分が一番やりたいと思うことをするのが一番だらう。

俺の言葉に三人一緒に立ち上がり移動するのだった。

* * *

学院の廊下を一人の女性が歩いていた。

少女とも大人とも呼べる、その中間ほどの年齢の女性だった。

その少女の前方から大柄な体躯の青年が歩いてくる。

「よつ、クロエ。お前クラン抜けたらしいな」

男は軽薄な笑みを浮かべクロエと呼ばれた少女に話しかけた。

「あら、ガイじゃない。相変わらず暑苦しい身体してるわね」

立ち止まつたクロエは挑発するような笑みで返す。

ガイと呼ばれた男はあからさまに表情をイラついた物に変え、

「ふん。馬鹿な女だ。あのクランに居りや嫌でも順調に出来できるつてのにわざわざ新クランなんぞ設立するとはな」

「私は別に出世に興味なんてないわ。それに私は私の理想を成し得るためにクランを作つたのだから後悔なんてありはしないわ」

クロエは当たり前のように言った。

それを見て、ガイは厭らしい笑みを浮かべ、

「ならば俺が力を貸してやるうか。俺が居れば名聲などすぐに手に

入る。なんせランクAの優秀な魔導騎士だからな。こんなところで
ランクの低いガキを捕まえるよりよっぽど役に立つぜ」

それに対しクロエは、

「間に合つてゐるわね。大体クランは家族よ。貴方を家族だなんて思
えないわね」

「はつ、家族だあ？ 所詮は他人、より高い位置に行くためにお互
い利用しあう仲だらうが」

「……はあ。だから貴方とは合はないのよ」

ガイの言葉にクロエはため息を吐く。

「ま、これ以上話すことはないわね。それじゃ」

そう言って立ち去り立てるクロエにガイが言葉をぶつけた。

「いつか、後悔するぜ」

一瞬立ち止まつたクロエは振り返ることもなく、

「後悔？ 残念だけどあり得ないわね」

背後から『ちつ』と舌打ちをする音が聞こえたが、それだけ言つて立ち去つた。

* * *

リヴィたちと別れ説明会場を回る。

リヴィとサー・シャは、リヴィが所属したがっているクランの説明を受けている。リヴィはともかくサー・シャまで熱心に説明されたことから、もしかしてサー・シャもギルドーと言われるクランから見ても欲しいほどの人材なのではないかと思った。

なぜなら俺に對しては説明を簡単に受けた後、熱心に勧誘されることもなく出て来ることが出来たが、俺に着いて来ようとしたサー・シャは引き止められたからだ。

サー・シャには悪いが一人で回らせてもらおう。

それに、サー・シャに関しては慕われていると言えば良い事だが、もしかして村を助けた俺に依存してしまっているのではないかと考えたこともある。

これから先のことを決める大事なことだ。サー・シャにはキッチンと自分の意思で決めて欲しい。

一人だけ勧誘されなかつたことは能力で力を制限していたからとは言え、やはり悔しかつたようで、ちょっとイジケながら会場を歩いていた。

その時

「ねえ君！ もう所属するクランは決まつた！？」

俺よりひとつかふたつほど年上の女性に声をかけられた。
声からは何か必死な様子が伝わってくるところを見るに、学生たちから良い返事を未だに貰っていないのかもしねり。

「えへつと……はい、まあ」

女性の剣幕に気圧されて引きつった笑顔で返事をする。

「じゃ、じゃあ説明聞いて！ ほら、お菓子もあるよ！ 飲み物だつて！」

女性は俺に説明を受けるよう、この町で結構有名で高級なお店のお菓子とフルーツのジュースを差し出してきた。

こうでもしないと誰もこの人の話を聞いてくれないのでどうつか？ 涙ぐましい女性の努力に本当に涙がでそうになつた。

聞きます！ 俺が聞いてあげますとも！

心の中で涙を流し、女性に促され椅子に座つた。女性もテーブルを挟み、俺の対面に座りクランについての書類を差し出してきた。

「私はクロエって言います！ 君は？」

読んでいた書類を机に置き、答える。

「シユウジ。シユウジ・カミヤです」

最初の方しか読めてないナビ……ビットやらのクランは出来たばかりのようだ。

「シユウジ君か。え～っと……あ、あつた！ シユウジ君はビのクランに行きたいとか、どこから誘われた、とかあるのかなー？」

クロエさんは手元の書類 卒業予定の生徒の資料だらつを見てそう言つた。

「い、いえ……これと言つて……」

「やつ！……じゃあウチに来ない！？」

直球……飾り気もないほど直球だった。

「え～っと……あの……」

「あ、ごめんね！……ちゃんと説明しないと駄目だよね？」

焦つちゃつたよ、と苦笑する。

「え～とですね。……ウチは書類にあるとおり新設です。新設って言つとみんな不安がつて来てくれないんだけど……ウチは私を含め三名のクラン員が居ます。でもね、みんな有名クランのクラン員に比べても引けをとらないほど優秀だから……って自分のこと良く言いすぎだけど！……でも私はともかくみんな優秀なの。だから新設だからといって他のクランに劣るとは思わない。それどころか人員が少ない分、君のことを良く見れるから成長も早いと思うの！……私はクラン員を家族だと思ってる。勿論みんなもそう思つてくれてると思つからクラン内の雰囲気は凄く良いよ。……だから、どう、かな？」

凄く真剣に説明してくれる。

必死さは凄い伝わるし、学院での成績は、まあ普通の俺……そんな俺の資料を見た後でもこんなに必死に勧誘してくれると悪い気はしない。

それに『クランは家族』といつ言葉にも惹かれるものがあった。

「え～っと……俺で良ければ」

俺は自然にそう答えていた。

この人の所なら楽しくやれそうだな、と。

勿論楽しいだけじゃないだろ？けど、それでもきっと、この人の
クランなら上手くやれる、そう思った。

「ほ、ほんと？！？」

上半身を乗り出し、俺の手を両手で握り締めてくるクロエさん。

「あ、あの……はい。俺なんかで役に立てるか分からんけど」

「ううん… そんなことないよ… 本当にありがとうございます」

「い、いえ… どういたしまして？」

なんかここにまで書ばれると嬉しいけど期待されすぎて心がして
不安にもなる。

「あ、それじゃあ、ここに名前を書いてくれるかな？」

「……はー」

言われるままに差し出された書類に名前を書く。

「あー、わかった」

名前を書いて思ひ出した。

「どうしたの？」

名前を書いている途中で手を止めた俺を見て不安そうに尋ねてく
るクロエさん。

「あの… 一人、どこにも所属してなくて結構優秀な奴ら知ってる
んですけど、会つてもうって良いですか？ 人間的にも良い奴らな

んで

「うん？ それは是非こちらからお願ひしたいぐらいだけど

「ほんとですか！？ あの、じゃあ医務室まで着いてきてもらひつて

もいいですか？」

「うん。いいよ

そうして、名前を速攻で書き終え、俺はクロトさんを連れて医務室へ向かった。

第二章 一話 クラン（後書き）

最近、ちょっと文字数が少なかったので今日も投稿。
新章開始で新キャラ登場です。
やつと口りじやないメインキャラが出せた。

感想頂けると嬉しいです。

学院卒業を昨日済ませ、明日からクラシックとしての生活が始まる。そして今日は休日。

明日から仕事を始めると次に会えるのはいつになるか分からないため、今日は俺とサーチャ、それからリヴィの三人で町へ遊びに行くことになった。

なつた、のだが……

サーチャの機嫌がすこぶる悪い。

「あの……サーチャ？」

「…………（ふいっ）」

今、俺たちは町の中を歩いていた。

サーチャは呼びかけば一応反応して田を合わさせてくれるけど、その後、頬をぷくっと膨らませてそっぽを向いてスタスタ先に進んでいってしまう。

全身から『私怒ります』ってオーラを出している。

「ちよつと、原因アンタなんだからなんとかしなさよー。」

隣に並んだリヴィが小声でちよつと囁く。

「ちよつ言われても……な

取り付く島もねえよ。

原因は分かつてゐる。

あのクラシック説明会での出来事がその原因だ。

理由は簡単。あの日、俺がサーチャに何も言わず勝手に入るクランを決めてしまったから。しかもサーチャもサーチャでリヴィが入ったところからの勧誘を断るに断れず、あれよあれよと囁き間に入つてしまっていたらしい。

その時点で俺とサーチャは別クランに所属することに決まってしまった。

サーチャは俺も同じことに誘つ気満々だったりしゃべり、既に決めてしまったと言つたらこうなつてしまつた。

説明会から数日経つてゐし機嫌も直つてゐだらうと思つていたが……」の通り。全然直つちやいな。

「なあ、機嫌直してくれよ。今日は全部奢るからせ」

金で機嫌とるうだなんて汚いと思つけど、それ以外に方法が思い浮かばない。

「やつた！ じゃあ、これとこれとこれと、ここからここまで全部下さい！」

「お前に奢るとは言つてない……」

俺の言葉で即座にスイーショップに駆け込み、嬉々として注文するリヴィに怒鳴る。

「なんですよ？ サーチャにだけつて……差別じゃない？」

まるで軽蔑するかのような視線をくれるリヴィになんて理不尽なと思いながらも財布を取り出す。

学院が休みでサーチャたちとも予定が合わない日は、ギルドで学生でも出来るバイトのような依頼をして稼いでいたとはこえ、一人分は心許ない。

「つーかり、ヴィ。 そんなに頼んでけやんと食えるのか?」

「当然」

「当然なんだ……。

と、そこで背後からジメツとした視線を感じて振り返る。

「あ……サー・シャ」

元々サー・シャに話しかけたつてのに、リヴィに氣をとられて忘れてた……。

「むーっ……」

店の入り口に立ち睨むように此方を見るサー・シャの頬がさらりと大きくなる。

ハムスターみたいで可愛い……が、これは怒りのためにこうなつているのであつて決して和んではいけないのだ。

「サ、サー・シャは何頼む? な、なんでも好きな物頼んでくれよ!

!」

取り繕つよつにサー・シャを店内へと誘つ。

「わあ、選んで選んで!」

「…………じゃあ、これで

「…………それだけでいいの?」

サー・シャが指差したのはイチゴのショートケーキひとつ。リヴィの後だつたのもあり、拍子抜けしてしまつ。

「リヴィみたいに……とまでは言わないけど、もつと頼んでいいぞ？」

「……じ、じゃあ、これも」

今度指差したのはチョコレートケーキ。これもまたひとつ。

「そ、それだけ？」

「クツと頷く。

機嫌悪く、あまり喋らないうにしているが、よく見ればサーシヤの口元が緩んでいるのが分かった。
やはり、女の子に甘い物は効くらしい。

「……テ、テメエ」

注文の品を受け取りテーブルへ移動すると、そこには先に注文を済ませていたリヴィがフォーク片手にケーキを貪り食っていた。
見ただけで既に三つは食っている。

「ふあ？ おふあはつふあはひやー」
「……飲み込んでから話せ」

何を言つてゐるのか分からねえよ。

「……」
「……」
「……じへつ。遅かつたじゃない」

口の中の物を飲み込んで言いなおすが大したことじやなかつた。

「ほり、サーチャも座つて食べなよ」

運んでいたサー・シャの分のケーキと紅茶をテーブルに置き、椅子を座りやすいように引き出す。

サー・シャが座ったのを確認して俺も座る。

「サー・シャは何頼んだの？」

「これ」

自分の皿を見せるサー・シャ。

「え？ それだけしか頼んでないの？」

「……うん」

「折角奢りなんだから遠慮しないでもっと頼めばいいの？」

お前が言つたな！

てかお前はもっと遠慮しろ！

そう言いたいが、先ほどのようにリヴィに構つてサー・シャが機嫌悪くするところないので、口にせよべつと我慢する。

「シュウジは？」

「俺はこれ」

今度は此方に尋ねてくるリヴィにサー・シャと同様、皿を見えるようにして答えた。

「あ、そのプリン一口頂戴」

俺のプリンを見てリヴィの一言。

ちなみに俺が頼んだ物はプリンとショートケーキ。それにコーヒー。

実を言つと、俺は結構な甘党だ。リヴィほどではないが、食べようと思えばもつと食べれる。だが、今回は財布も寂しいし、この後のことも考えて控えめにしておいたのだった。

「まあ、いいけど」

スプーンでプリンを一口掬いリヴィの口に持つていぐ。

「あ～……ぱく。美味しい！」

食べたりヴィは大声で叫んだ。

それ程かっ！？ 店で大きな声を出すなとは思つたが、それ以上にこのプリンに対する期待が嫌でも高まる。

それにしても……リヴィも普通に食べたからあれだけど、今のつて『あ～ん』ってやつだよな。リヴィはサーシャより小さいし、まだ子供つて感じだからドキドキとかはしないけど……。すると

「…………じと～つ」

とした田代サーシャが俺とリヴィを見つめていた。

「えと……サーシャも、いる？」

もう一度スプーンにプリンを乗せ、サーシャに問つ。サーシャは無言で頷いた。

「…………はい」

「…………ぱく」

緊張した。

サー・シヤは顔を赤くしながら、と圓卓の上にあぐんで「ハーンを食べた。

サー・シャの顔のせいか分からぬいけどドキドキした。

「じゃ、じゃあ俺も食べるかな！」

必要以上に大きな声で言ってプリンを探そう。

」
」

口に運び辛い！！

なせならサー・シャが使つたスローンだから。
しかもサー・シャが赤い顔のまま俺をジッと見つめているから。

つばを飲み込む。

大丈夫、…… サーシャは子供、 またまた子供！
だから気にする必要なしつ！

「モード」

スプーンを思いつき口に突っ込む。

「がつ！……」ほ、ほつ！

むせた。

「馬鹿じやなこ」の

リヴィが冷めた目で（ただし口にクリームがつこててゐる）呟つた。

* * *

ケーキを食べたサーチャは若干だが機嫌が良くなつた。

「会えなくなつちやうのは……どうでもいいんですか？」

帰り道 サーシャがそう切り出した。

「それは、なによ」

「ひとつちの世界に来て知り合つて、それから数ヶ月。ずっと一緒にいたんだ。寂しくないとか思つわけがない。

それでも、

「もう会えなくなるつてことじやないしや。休日とか予定が合えばいつでも会えるしや。これからずっと一緒にいるつてわけにもいかないだろ?」

そう呟つ。

これは本音だ。

「どうか、これからもずっと一緒にいたら多分……俺がサーチャから離れられなくなつてしまつんじや、と思つ。

「一緒に……一緒にいればいいじゃないですか」

サーチャの声が震えていた。

きつと、これをクランを決めてしまつ前に聞いていたら、俺は何も考えずにサーチャと同じクランに入つてしまつ筈だ。

そう言つてくれるのは嬉しいし、こんな声を出すんだから……きっと、サーチャは俺を慕つてくれてるのも分かる。

だからこそ

「嬉しいけど、俺もそうしたいところだけどさ」「だつたらっ！……だつたら、そうすればいいじゃないですか」「でもさ、いつも一緒にいないと何も出来なくなっちゃつたら困るだろ？だから一人である程度のことは出来るよ。俺も……サーチャも」

こんな仕事だ。

何が起こるか分からぬのに俺がいなきや、サーチャがいなきや何も出来ない……なんて、そんなことになつては不味い。

俺は多分死ぬことはないだろうけど、それでもいつもサーチャと入れる状況な筈がないんだ。たとえ同じクランだつたとしても。だから、サーチャのためにもこひは一回離れた方が良いんだ。

「ま、そうよね」

今まで黙つていたリヴィが口を開く。

「仲が良いのはいいけど……依存するのは駄だよ、サーチャ

リヴィがサーチャを諭すよつて話す。

「……でも」「ショウジの言つよつこ、ずっと会えないってわけじゃないんだし、少し我慢してみよ」
「……」

サーチャは俯いてしまつ。
もしかしたら泣いているのかもしれない。

「サーチャ」「…………つー？」「

俺が呼びかけるとサーチャは顔を上げる。
やはり、その瞳には辛つじて零れてはいないが、涙が溜まつっていた。

「ずっと別の場所にいるつて訳じやない。俺は……」

クランを決める説明会。

そこで話を聞いてからずっと思つていたことを口にする。

「俺が、いや、俺たちが強くなつたら一緒にクランを作りたいんだ」

クランは『ランクA』以上が一人と『ランクC』以上が一人の計三人以上で創設することが出来る。

「へえ」

リヴィイが面白そつといった表情で唇の端を持ち上げる。

「だから強くならう、サー・シャ」

俺はサー・シャの肩に手を置く。

「そのためには今は別の道を歩いた方が良いと思つたんだ」「わかり……ました」

サー・シャが一筋の涙を零した後、頷く。

「じゃ、アタシが一人は必要なランクA……ううん、一国一のギルド員になつてやるわ

不敵な笑みでリヴィが宣言する。

「くつ、そいつは頼もしいな」

俺もリヴィに笑い返す。

「わたしもっ！」

サー・シャが突然大声を出した。

「私も、早く強くなります！ シュウジさん心配されないぐら」

拳を握り決意するよつて叫ぶ。

「すぐに……すぐにまた一緒にいられるよつて頑張りますー！」

何か目的が……あれって感じだけど納得してくれたみたいだからいいか。

「俺も一番の年長者として負けられねえな。誰よりも早くラック上
げてやるぜー！」

一人に向かって言ひ。

きつと、俺たち三人なら数年と経たずに出来るー。

「は？ アンタ、あたしに喧嘩売つてる？ 天才のこのあたしにー。」

俺の言葉が気に食わなかつたのか詰め寄つてくるコヴィ。

「はつ！ ガキには負けるわけにはいかんなー。」

肩を竦めて言つてやる。

「誰がガキよつ！」

「お前以外に誰がいる？ 小つちやい小つちやいリヴィアちゃん？」

「うがーつ！ 絶対アンタには負けないんだからー。」

「ほえ面かかせてやるぜつー！」

喧嘩腰に言ひ合つ俺とリヴィ。

「あは……あはは……」

「…………ふえ？」

「…………ひやーふあ？」

突然の笑い声にお互いの頬を引つ張り合つたままそりを向く俺
とリヴィ。

「ふふふ……あは。私も一人に負けないですー。」

サー・シャが両手の拳を胸の前で握り締め、俺たち一人を真正面から見て告げた。

「……へつ。そいつは楽しみだ」

「……ふふん。シュウジにも サー・シャにだつて私は負けないわ

」

そんなサー・シャを見て、俺とリヴィは頬をつかみ合つたまま笑つて言つ。

サー・シャもそんな俺たちを見て、涙を拭いながら笑うのだった。

今年はまだまだ暑いみたいですね。

10万PV超えました！

やっぱ戦闘よりこういう話のほうが書きやすい。
でも、これから戦闘は増えるところ……ビックリ。

「今、帰りましたー」

夕方、一日中仕事をこなし、泥だらけの格好で、クランの事務所兼我が家でもある建物の扉を開いた。

「あ、おかえり～。お疲れさま、仕事はどうだった？」

出迎えてくれたのはエプロン姿のクロエ。

最初はクランのリーダーが何故にこんなことを、と思ったものだが最近はもう慣れた。クロエは説明会で言っていた通り、クランのメンバーを家族として扱ってくれた。

ランクAのクロエと学院を卒業したばかりのランクFの俺とでは絶対的な差があり、普通こんな風に接することなどありえないのだが、このクランではランクなど関係なく過ぐしている。

「あ～……どう、と言われても一日中草むしりてただけだし……」

思い出すだけでも疲れる。

炎天下の中、草むしり。むしりてもむしりても一向に減らない雑草。

「あはは……大変だったね。お水飲む？」

クロエの用意してくれた水の入ったコップを受け取り飲み干す。

「ありがとう」

空になつたコップをクロエに渡す。

「身体洗つて着替えたら?」

「……そつする」

今の自分の格好を見てクロエに言われたままに行動する。服を取るために二階の自室へ移動。そして一階の風呂場へ。

現在、クランのメンバーはこの事務所となつている建物 紹介されたとき、普通に一軒家なのは驚いたが で共同生活を送つて いる。

家事はその日、仕事のない人が担当することになつていて、その担当する人によつては大変なことになるのだが、……今日の担当はクロエのようで、これは晩御飯も楽しみに出来る。

クロエはランクAという凄腕のギルド員なのに料理やらの家事まで凄腕なのだった。クラン員になつた初日の歓迎会でクロエの料理に感動したのは記憶に新しい。

身体を洗い、新しい服を着て、部屋に戻る前に水を飲もうとキッチンへ向かう。

「ふう~、わつぱりした。クロエ、水頂戴」

料理中のクロエに声をかける。

とても上司と部下の会話には聞こえない。

「冷たくする?」

「お願い」

すると、クロエは魔法で氷を作り、それを氷の入ったコップに入れた。

「はい、どうぞ」

「ありがと」

受け取つて飲む。

うん、美味しい！

本当に魔法つて便利だ。冷蔵庫なんてなくても冷たい物が飲めるし、食材を凍らせて長期保存なんてことも出来る。

ただ、魔法で出す水は純度が完璧すぎて美味くなかったので、水だけは井戸とかから調達しなくてはいけない。これは毎朝の男たちの日課になつている。

「あ、シユウジ帰つてきてたんだ」

飲み終わったところで一階から降りてきたクラン貴に声をかけられる。

男にしては少し眺めの青い髪に利発そうな顔をした少年だ。名前はジル。

「お～。ちょっと前にな。お前は？」

「僕もさつき帰つてきたばかりだよ」

へへ、俺が風呂入つてゐる間にでも帰つてきたのかね。

「そうか。仕事はどうだった？」

「ペットの犬の世話。十四五くらい飼つてて大変だったよ……散歩とかね。そっちは何だったの？」

「俺はやたらとでかい庭の草むしり。ずっとしゃがんでたから足がヤバイ」

腿を叩きながら苦笑する。

「そつか。座る?」

「そつかするか」

キッチンの横の部屋。仕事用の事務室兼応接室に移動し、ソファーに座る。

ぐでぐでとした体勢で座り、足を投げ出すと疲労感で氣だるげな感覚が足全体に広がった。

「あ～……マジでもう動きたくないわ」

一回座つてしまえばもう動くのが億劫になってしまつ。

「ほんとにお疲れだね。肩でも揉もうか?」

なんて、思いやりの溢れた言葉を投げかけてくれる。

「……いや、いいよ」

が、断る。

実際肩は凝つてない。疲れているのは断然足だ。

身体能力は上がってるはずなのに前に自分の家の草むしりしたときの疲れと大差無いのはどうこいつとか……あ、広かつたからか。それにしても疲れてると思つ。これは精神的にきてるのかもしない。

「……そつ

俺が断ると若干悲しそうな声で言つて、それから話しかけてくる「」とはなかつた。

二人とも声を発することなく数分が経つた頃、誰かが玄関のドアを開ける音が聞こえてきた。

「たつだいま～！」

その音を出した主は元気な声でそつ言つて、この応接室にドタドタと足音を立て近づいてきた。

「シユウー 会いたかったあ～！」

「うわ～ なんだよ～？」

部屋に入つてくるなり抱きついてきたのはアリアとこいつの前の少女。

勿論このクランのメンバーだ。

長いブロンドの髪を後ろで束ねたいわゆるポニーtail。青い綺麗な瞳。

十五歳といつ年齢にしては発育の良いモデル顔負けのスタイル。

つまり

「ちよつ～ む、胸！ 胸当たつてるつて～！」

「んふう～、当てるの～！」

そう言つてから身体を密着させてくる。

「」の誘惑はこの世界に来て……といつも、今まで生きてきた中で初めての誘惑だった。サー・シャと暮らしてたときも、リヴィと仲良

くなつてからもこんなことはなかつたから こんなことあの一人には言えないけど……物理的な理由で。

そんな誘惑を、このクランに入つてから毎日のよひに受けている俺の精神は結構やばいことになつてたりする。

焦りすぎて、それをアリア本人に言つてしまつたことがある。その時……『別にいいよ……シユウジなら』って少し頬を赤くしながら言われて頭が真っ白になつた。

好意を持たれていますのは嬉しいが……この行動は遠慮してもらいたいのだった。

そして、このアリアという少女 実は、卒業試験のとき俺を襲つてきた襲撃者である。

さらに

「やめなよアリア。シユウジが困つてゐる」

俺からアリアを引き剥がそうと頑張つてくれている少年 さつきまで俺が話していたジル もあの時の少年だつた。

一人とはとつぐに和解済み。

俺は最初からさして気にしていなかつたし、サー・シャーリ・ヴィも直接被害に遭つたのは俺だけで自分たちは何もされてないし、俺が気にしてないというのもあつてすんなりと一人の謝罪を受け入れた。そして卒業試験を受けた後、クランで働き始めるまでの間にこの二人があんなことになつた原因を探り、解決するために奔走したこともあります、

「男はいつされると嬉しいものよ。ジルはお子様だから分からぬでしようけど」

アリアはこれでもかと胸を押し付けてくる。さらに背後から横に回りこみ、俺の顔を掴んで胸に抱き寄せてきた。

「うっふ……い、息が……」

柔らかくて気持ちがいいやら息が出来なくて苦しいやらでもう何がなんだか分からぬ。

困ったことにその一件以来、アリアは俺に対して過剰なまでのスキンシップをとってくるのだった。

「だから困ってるって言つてるだろおー……ていうか、ほらー……やっぱいよ、シユウジの顔が青くなつていくーーー？」

ジルはジルで、あの一件以来、俺の従者のような振る舞いで、先ほどの肩を揉もうかと提案したように何かと俺の世話を焼きたがるというか、俺の役に立ちたがるというか……。

さらに困ったことにこの一人 何故か俺の意見には絶対服従で反対などしないのだった。

例えば……もし、俺とクランのリーダーであるクロエの意見が分かれたら、この一人は確実に俺につくだろう。本当に困ったものだ。

そんな訳で、もう危険はないだろうとクロエに全部話した上で二人をクランに入れてくれと頼んだ訳だ。

二人と話をさせて欲しいと言つクロエとの二人の三人を残し、俺は別の場所で待機していたため、そこでどんなやり取りがあつたのかは知らないが、二人は無事クランに入ることが出来たのだった。

「ア、アリア！？ ほ、ほんとにシュウジが死んじゃうよーー？」
「えつ……ちょ、シュ、シュウーー？ だ、大丈夫！？」

ようやくアリアから開放され息をすることが出来た。

「あ、あはは……や、柔らか死ぬ……」

が、どうやら遅かつたらしい。

俺は薄れ行く意識の中でどうでもいい」と思いついてしまった。
今自分が死んだら死因は何になるんだろう……あ、そうか『乳死』
か、と。

「ほら三人ともじやれあつてないで、『飯出来たわよ。つて、シュ
ウジー？ ちょっと大丈夫なの！？』

クロエがやつてきたことを理解したといひで俺の意識は完全に落
ちた。

「シュ、シュウジ……？ シュウジ ッ！」

「シュウ！ しつかりして！ 私を残して逝かないでつ！ 貴方が
死んだら私も死ぬ つ！！」

「あなたたち落ち着きなさい！ このぐらいで死なないからー。」

その後、クロエの的確な処置で俺はすぐに意識を取り戻し、無事
晩御飯を頂くことが出来たのだった。

更新遅くなつてすみません。
ちょっと体調崩しちゃいました。

それにもお気に入り登録がもう300件とか……ありがたい限りです。

クラシメンバー全員が集まつた夕食の後、それぞれが思い思いに寛いで過ごしていた。

「良い仕事が見つかつたわ！」

クロエが高らかに言い放ち、持つていた書類をテーブルに叩きつけた。

「良い仕事ですか？ それは一体どういったものでしょう？」

それを聞いて、まず最初に口を開いたのは俺と同じ十七歳で、ギルドランクCのスワイード。身長は俺より少し高いぐらいで、細い身体は決して華奢というわけではなく無駄な筋肉がついていないとも言えればいいのか。青みがかった髪を肩辺りまで伸ばし、髪と同じ色の瞳は穏やかな光を放っている。

彼は誰に対してもこういった丁寧な物腰で話す。これは彼の癖のようだ、遠慮や堅苦しいのは無しというクロエの方針があるクランの中でも直すことはなかった。というか、タメ口で話すのは逆に神经が疲れるらしい。その証拠に一番年下であるジルに対しても敬語だった。

それよりも、今はクロエの持つて来た良い仕事のことだ。俺も興味がある。

てか、スワイードが訊かなければ俺が訊いていた。

俺がクランに入つてから請けた仕事は、正直に言って魔法が使えない一般人でも何とかなるようなものしかなかつた。というか任務で魔法を使った覚えが無い。それは他のメンバーも同じで、ランク

Aのクロエでさえ最高でランクCの仕事までしか請けているのを見たことが無かつた。

高ランクの人間は引く手数多とはいえた新興クランでまだ何の知名度も無い俺たちでは大した仕事は回つてこないのだ。

……いい仕事は大抵他の有名なクランの人間にとられてしまう。さて、そんな俺たちにも遂に良い仕事が回つてきたらしいが果たしてどうなのつてことなのだが……俺はクロエが叩きつけた書類を覗き込む。

「仕事はふたつ。ランクBとランクCの仕事がひとつづつ」
「なにい！？」

覗き込み、書類の文字を確認する前に放たれたクロエの言葉に驚きを隠せない。

それは俺だけではなく、声に出でなくともみんなが目を見開いて驚愕の表情でクロエと書類を見比べている。

「ふふん」

満足げに胸を張るクロエ。

ランクCは今まで何度も何度かクロエとがが請け負つてた仕事であつたりしたけど、ランクBだつて！？ Bつていうと強力な魔物討伐やらも組み込まれて難易度が格段に上がるランクじゃないか！

「や、それはマジなんだよな？」

俺は聞き間違えでは無いのかと、もう一度訊きなおした。

「勿論。ランクBとランクC、書類も確認してみるといい」

が、返ってきた答えは先ほどと同じもの。念のため書類を確認するが、どうやら間違いない。

「すこいすごいつ！ ね、ショウ？」

アリアもいつもよりハイテンションで抱きついてくる。

「あ、ああ、そうだな」

俺は返事をするも振りほどくほどの余裕も無いほど驚いていた。スワイードは一瞬驚いていたものの今は割と普通。最年少のジルは瞳をキラキラさせ、視線をクロエと書類を行つたり来たりさせていた。

「それで組み合わせはどうするの〜?」

間延びした声でそうクロエに問い合わせたのはクラシックメンバー最後の一人。

クランメンバーで一番年上……と言つても、ついこの前二十歳になつたばかりの女性。名前はフェルディアーネ。みんなからはフェルと呼ばれている。

背中の中ほどまである薄い桃色のウエーブのかかった髪、背は低い。サー・シャとそう変わらないんじやないだろうか。が、胸の差は結構ある。アリアほどの巨乳とまではいかないが適度に大きい。そんな彼女であるが……実はクロエと並びランクはAである。

「……………」いや、わたしはお留守番で

「却下！」

フェルの言葉を一瞬のまもなく却下するクロエ。

「ならわたしはランクCの方がいいですぅ～」

渋々な様子で言つフェル。

それというのもクロエが完全な戦闘タイプであるのに対しフェルは研究者タイプ。

つまり、戦闘が苦手なのである。

普段の彼女は仕事よりもここで研究していることが多い。新術開発から魔法の力を込めた武具や道具、いわゆる“魔導具”と呼ばれるものの作成。実は俺を含めクラシックメンバーの武具は彼女が作成したものだ。

ま、俺の場合は武器だけは自作なのだけど。

「仕方ないわね……それじゃ私とスワイードはランクBに確定ね」「わかりました」

依存は無いと頷くスワイード。

「問題は貴方たちをどう分けるのかだけど……」

そう言つてクロエは俺、アリア、ジルのランクFトリオを見る。ギルドの規定で仕事を請けるための条件というものがある。まず自分と同じランク、これは一人でも請けることが出来る。さらに同ランクが三人以上でふたつ上のランクの仕事を請けることが出来るようになる。

俺、アリア、ジルが一緒にランクCを請けられるということだ。そして……Cランク以上はひとつ上のランク保持者と一緒にならばランクが低くとも請けられる。

それとは別にランクSという仕事もあるらしい。これは難易度に関係なく国が出す依頼なのだという。

「あ、わたしの方にシユウジくんを入れてほしいです」
「え、俺？ なんで？」

急に名前を出されキヨトンとしながらフェルを見る。

「シユウジくんの戦い方を見たことってないですかからあ。把握すればいろんな道具を作る参考になりますし」

あ……そういうことね。

俺はフェルが武器も作ると言ったときに俺は戦い方が特殊だから自分でなんとかするって答えたんだよな。

「そういうことならシユウジはフェルの方ね」

クロエも納得したように頷く。

「はいはい！ シユウがフェルの方なら私もそつちー！」

アリアが拳手して大きな声で言つた。

「却下。アリアは私たちと一緒にBランク」

「ええっ！？ 死ぬつて絶対！」

「何事も経験よ。それにアリアは攻撃、補助、回復で苦手な系統はないしこっちでも何とかなると思うから」

「無理だつてば っ！」

ランクFアリア、ランクBの仕事が決まつた瞬間だつた。

確かに俺はリミッターを付けた状態じや魔法よりも剣術とかそういうた技術で戦うのが主流な前衛型だし、ジルは天才的な攻撃魔法

と申し訳程度の補助魔法。

苦手なものが無いアリアがクロエのパーティに入るのはバランスが良いと思つ。

「それじゃ、シコウジくんにジルくん、あしたは宜しくねえ～

満面の笑顔で俺とジルの手をとるフョル。

「あ、うん。宜しく」

「ランクC……シコウジの足手まとこにならなことになつこと」

俺は普通にフェルへ返事をし、ジルは返事も忘れて期待と不安の表情で呟いた。

てかジルよ、なんで俺？

ランクAのフェルが一緒なんだぜ？ 俺よりもフョルの足手まいにならないよう頑張るんじゃないのか？

「ま、お互い頑張ろうぜ」

「うん！」

ジルと笑いあう。

「いやあ　　つ……」

そんなアリアの悲鳴をBGMに俺は明日への期待を膨らませた。

* * *

『今日はみんな頑張るつい』

朝食の後、クロエのその言葉で各パーティに別れ目的地を目指す。俺たちのパーティが請けるワソクの依頼はある村の付近の洞窟調査。

なんでも、最近になって急に魔物が増えたのだとか。

今までもたまに魔物にすることがあるたしが最近は頻繁に現れ、村の外では被害にあつた人もいるらしい。まだ村自体は襲われていない。

そこで目にする魔物はランクで言うと大体D程度の魔物らしいが、急激に増えてきたこともあり洞窟の中では何があるのか分からぬためCランクの任務となつていて。

クロエたちは強力な魔物の討伐らしくアリアが直前まで必死に行くことを抵抗していたがクロエに引き摺られ泣きながら任務に向かつていった。

まあ、大丈夫だと思うが無事であることを祈つておく。

俺たちは目的の洞窟付近の村へ向かう馬車に乗り込んで思い思ひの過ごし方をしていた。

ジルは隅の方で魔導書を読み耽つていて。

馬車の中でそんなものを読んで酔つてしまわないか心配になるが今のところ大丈夫そうだった。

「そんなことしなくてもわたしが作つてあげるのに〜」

「それもいいけど何かあつたとき自分で出来るのが一番いいからね」

俺はフェルの隣に座り、魔導具の作り方を教わっていた。

そもそも、俺は自分の武器は鍊金で作り出したもので、そのうち使いこなせるようになつたらもつと良い武器を作るつもりだ。その時に魔導具の作り方を知つていれば自分で武器に何らかの付与効果を与えるられる。

そう思つて数日前からフェルに弟子入りした状態だ。

目的の村まで馬車で一口半はかかるし、その間は他にすることもないし教わるには良い時間だ。

能力の方も色々新しい発見があつた。

今回新たに見つけた能力の使い方は中々に使い道が良さそうなものだつた。

まずジルとフェルの二人のステータスだが……

名前	ジル
種族	人間
職業	ギルド員
称号	攻撃魔法の天才
レベル	6
HP (体力)	28 / 28
MP (精神力)	62 / 62
STR (力)	14
VIT (耐久力)	18
INT (知性)	53
AGI (素早さ)	47
DEX (器用さ)	40
LUC (幸運)	18
CHR (カリスマ)	8

名前	フェルディアナ
種族	人間
職業	ギルド員
称号	研究者
レベル	L V 32
HP (体力)	72 / 72
MP (精神力)	236 / 236
STR (力)	54
VIT (耐久力)	51
INT (知性)	173
AGI (素早さ)	114
DEX (器用さ)	221
LUC (幸運)	82
CHR (カリスマ)	49

とりあえずスキルとかは表示しないで身体能力だけだとこんな感じ。

と、二人のステータスを確認したときウインドウにあった“ある表示”に気が付いた。今までは見逃してしまっていたらしい。その名も『パーティー登録』である。

試しに一人を俺とパーティー登録してみたところ

パーティー名 神と従者と研究者

そのまんまだつた。

もつと他になかったのか……と思い色々操作してみると他にもいくつかの名前から選択出来るようだつた。

面倒だし害もないからそのままだけど。他に良いのもなかつたし。まあ名前のことは置いておいて、さらにパーティー登録にはある特典があつた。

それは、

パーティー技能

取得経験値up

ステータス上昇率up

攻撃魔法威力上昇（低）

魔導具作成、生産・鍛冶スキル経験値up

といった効果がパーティーメンバー全員に付与されたのだった。
それにパーティー登録するとメンバーの誰が魔物を倒しても等しく経験値が振り分けられる。

これは初心者というか低レベル者が高ランク者と一緒に任務を請ける価値が随分上がる。高ランク任務で経験値の高い魔物と戦うことになつて自分は補助だけでも大量の経験値が取得できるわけだ。

ちなみに、パーティー登録してから魔導具作りを教わったところ
村に着くまでにここ数日以上にスキルレベルが上がつたのだった。

第三章 四話 依頼（後書き）

本格的に仕事開始。
能力も使いこなせるようになってきたし、主人公強化速度アップするかも。

第三章 五話 予感（前書き）

遅くなつてしまふ申し訳ありませんでした！

第三章 五話 予感

目的地に到着し、俺たちは依頼者である村長宅を訪れていた。

「お、このお茶、王都のとはまた違った味で美味しいね」

村長の娘さん（十歳、素朴で可愛らしい）の淹れてくれたお茶を飲む俺。

「おお～、このお菓子も美味しいよ～」

煎餅に似たお茶菓子をボリボリと食り喰うフェル。
村長との話は一番マトモに話が出来るジルに任せ、俺とフェルは全力で窓いでいたのだった。

まあ、俺が話しても良いんだけど俺ではこの世界について分からないこともまだまだ多いので、やはりそこいら辺にも詳しいジルが適任だろう。

ちなみにフェルは駄目だ。

「コイツに任せたら話が脱線して全然進まなくなる。ランクは高いのに残念な人なのだ。

* * *

「話、全然終わらないね～」

「……そうだな」

もうかれこれ三十分程は経つただろうか、未だに村長とジルの話し合いは終わる様子がない。

最初に出されたお菓子も無くなり（フェルがほとんど食べた）、お茶も何杯か飲んで水つ腹。そろそろ待つのにも疲れてきた。

「……秘技『少年（青年） 中』を使はしないようだな

俺は退屈なあまりそんなことを口走ってしまい、フェルがやたらと興味津々で身を乗り出してきた。

「ねえねえ、なにそれ？ なに？」

「秘技だからな。そう簡単には教えられねーよ」

フツ、と不適に笑い言つてやる。

「えー？ そんなに凄いことなのー？ なになになんなのー？」

凄い食いつきだ。いつもより口に聞延びした語尾もなくなってる。

「そんなに知りたい？」
「知りたい！」

俺は指を顎に当て、とも考へてますといふポーズをとる。

「まあ、いいか。誰にも言ひなよ」
「うんっー。」

瞳を輝かせ満面に笑みを浮かべるフェル。

その様は、お前はほんとに二十歳か、と詫きたくなつたよつた可愛らしさだった。

「じゃあ教えよつ……」

俺は勿体ぶつた話し方で話し出す。

「少年（青年） 中とは……オリ主に『えられる特殊能力だ』
「ほへえ～」

フルは分かつていらない様子でぼけ～つとしている。だが、まだ説明は終わっちゃいないぜ。

「の中には様々なものが入る。例えば今の場合だと『説明』が適切だ。これを入れ『少年（青年）説明中』とするにひいて説明が終わった状態にする」とが出来るのだ！

「な、なんだつてえー！」

力を込めて言つとノリ良く驚いてくれるフル。

「さうい、『移動中』にすることにより、移動という無駄な時間を省き、目的地に到着した状態にしてくれるのだ！」

実際には説明する時間も移動する時間も減つてゐるわけじゃないがなつ！

「この能力はオリ主ならかなりの確立で習得してゐるある意味必須スキルとも言えるだつ」

「へえ～」

「だが、この能力には落とし穴もある

「落とし穴？」

「ああ。この能力を多用するオリ主は嫌われやすいのぞ」

俺は悔しい表情を作る。

「それは……なぜ？」

「こんな便利な能力を持つオリ主への嫉妬もある。だがそれ以上にこの能力を使いすぎると途端にツマラなくなってしまうんだ」

俺も良く一次創作とか読みふけったけど、この能力を使うオリ主の多いこと多いこと。ゲームとかならまだしも文字だけの小説でそればっかり使われるのは読んで残念な気分になるぜ。気分だけじゃなく内容も残念なものが多いんだぜ。

そういうのを読むといつも思つてた。

文字の情報しかないんだからちゃんと説明しろよ、つてな。

「ん……よくわかんないや。それより何でそんな悔しそうな顔してるの？」

「そんな顔してた？」

「うん、してた」

「すまん。嫌なことを思い出してな」

調子に乗つて落ち込むとか……俺は馬鹿か。

「気になつたんだけど、オリ主つてなに～？」

お、語尾が戻ってきた。

それにしてオーリ主か……やっぱ気になるか。

「それは……なんてーか……えつと、選ばれた人間のことだ」

適当にそれらしいことを言つてみた。

「へえ～……あつ、それが使えるってことは、もしかしてシュウジくんもオリ主なのぉ？」
「ま、まあ、そうなるな」

うおお……自分で認めると急に恥ずかしくなる。

「じゃあ、その能力使うの～？」
「い、いや……俺は地道にコツコツを大切にするオリ主だからもう訳が分からなくなってきた！」

「…………何を意味の分からないことを話してるので、二人とも？」
そんなところで救いの神のように最高のタイミングで村長との話を終えたジルが呆れた顔を向けつつ戻ってきたのだった。

* * *

「鳴き声？」

村長宅の一室、今日は休み明日出発するということで、俺とジルに宛がわれた部屋（さすがに女性と同じ部屋はあれなのでフェルは村長の娘さんの部屋）で村長との話を纏めていた。

今はフェルも同じ部屋にいる。

「うん。なんでも一日ぐらい前からなんだけど、洞窟の奥から得体の知れない鳴き声が聞こえてくるらしいんだ」

村長と話をしたジルが説明してくれる。

「得体の知れない……魔物か？」

「だろうね。それも前からこの辺りで見られてるものじゃない」

「新種つてことか？」

「それよりもただ単にこの辺にはいなかつた魔物が住み着いた可能性も高いね」

ああ、そうか。確かにそっちの方が可能性は高いわな。

「それに洞窟の奥に住み着いているんだとしたら、外まで鳴き声が聞こえるのは大型の魔物になりそうですねえ」

のほほんと言つフェルだが内容は全然そんな感じじゃない。

「大型……ねえ」

俺が戦つたことのある魔物は比較的小型のものばかりだ。魔物も種族によつて大きさは様々だが俺は自分以上に大きい魔物は見たこともない。

「一概には言えないので、基本的に大きくなるほど強大な力を持っている魔物が多いから、もしかしたら僕らの手には負えなくなるかもしれないね」

「そうだな…… フェルはAランクだが戦闘向きじゃないし、俺とジルは学院を出たばかりの新人だ。」

「村の人も洞窟の一一番奥まで行ったことのある人はいないそうだから、ひょっとすると相当深いかもね」

「その場合…… 魔物も想像以上に大型になる、ってことか？」

「その可能性もある、ってこと」

ジルの言葉に冷や汗が流れる。

「おいおい、それってヤバくないか。 とんでもない魔物がいるかもしれないってことだろ？」

「何かあると考へて…… このあとステータス弄つておこいつ。

「んじゃ、慎重に進んで…… 無理そなうならギルドに連絡、ってことでいいか？」

「俺は大雑把に明日の方針を考え同意を求める。」

「そりなるね。…… もし本当に大型の魔物がいるんなら慎重過ぎるぐらいで丁度良いよ」

「わたしもそれでいいですっ！」

フェルの声を聞くと一々気が抜けるぜ。

「じゃ、今日はゆっくり寝て、明日気合入れてくれか！」

「うん」

「はあ～い」

拳を握り締め気合を入れる俺だったがフェルの返事でやつぱり締まらなかつた。

第三章 五話 予感（後書き）

やあ、一週間以上振り！

なんて言つか……「めんなさい。

しかも今回も短め……これはイカシな。

それはもうひと、総合ppt1000、ユニーク30000突破しました。

これからも宜しくお願ひします！

第二章 六話 洞窟

洞窟調査、村長の話だと最初に考えていたよりも厄介な仕事になりそうだ。

「声つて……これだよな？」

歩きながら一人に問いかける。

「だろうね」

「そうですねえ~」

ジルは神妙な、どこか緊張した顔で答え、フェルはいつも通りこちらの気を抜くような声で答える。

洞窟に近づくに連れ大きくなるその声。

二人ともそう答えたことから俺の聞き間違いであるといつ線は消え、大型の魔物が住み着いているという予想が段々と現実味を帯びてきた。

何か非常にメンドクサイ事になりそうな予感がする……。

最近、この手の予感は外れた例がないので油断できない。

「……つて離してゐ間にまたお出ましか?」

近くの草むらがガサガサと揺れる。

洞窟に近づくにつれ魔物に遭遇する頻度も上がっている。やはり魔物が増えている原因は洞窟にあるのだろうか……。なんて考えていると草むらから数匹の魔物が飛び出してきた。すぐさま戦闘態勢に入り、剣を構えて敵を確認する。

「犬……いや、狼……？ だけど何この色！？」

魔物の姿は狼。

そして、なんと紫の体毛をしていた。じゃなきゃ魔物とは一見しただけじゃ分からぬだろ？

「これは……ポイズンウルフだね」

杖を構えたジルが呟く。

ポイズンウルフ……毒狼ですか。色とか、見た感じそのままですね。

「強いの？」

「普通の狼よりちょっとすばしっこいけど、強さ自体は大したことないですよ～」

「うん。ただ爪と牙に強力な毒を持つてるね」

だろうね。

毒もつてるとか名前聞いた瞬間に分かつたよ。

「んじゃ、何かされる前に速攻で倒せばいいのか？」

「そうですね～。それか……えいっ！」

「フギヤツ～！」

フヨルの持つている銃から放たれた魔力の弾に当たり悲鳴を上げる魔物。

「牙や爪の届かない遠距離からの攻撃で倒せばいいんですよ～」

言いながら、銃の先にフツと息を吹きかけるフェル。いや、煙とか出でないし意味の無い行動だけね。

「じゃあ、魔法メインの攻撃か」「だね」

とりあえずの方針を決め、魔物退治。俺は遠距離というか中距離で使える魔神剣を駆使してジルとフェルを守るようにして戦う。

ジルは俺の後ろで魔力を溜め魔法を放つ。フェルは……なんつーか、気の抜ける掛け声と共に銃を乱射。あつという間に魔物を退治してしまった。

* * *

「その銃便利だよな」

洞窟に向けて歩きながら、俺はフェルの両太股についているホルスターにある二丁の拳銃を見て言つた。

「作るのに苦労したんですよ~」

するとフェルは自分の作品が褒められて嬉しそうに銃を撫でた。この銃はフェルが作ったもので、この二丁しかこの世にないレア物だ。

魔力を弾丸に変える銃。使用者の魔力が続く限り弾が切れること

が無く、しかも一発で消費する魔力も大したことがない。

さらに、込める魔力に属性を加えてやればその属性の弾になる優れものだ。火とか氷とかね。

この銃があれば魔力は高いが身体能力は低いので戦闘が苦手なフェルでも、それさえ何とかなれば一人でも十分戦えるだろう。

というか、今でも時間のかかる大魔法よりも銃を使って戦うことの多いフェルであるため、普通に弱い魔物なら一人でも十分なんだが……それはさすがランクAと言わざるを得ない。

「あ、やっぱ苦労したんだ?」

「それはもう凄いしましたよおー! 一日も寝ないで作ったんですよおー!」

フルにしては強い語氣で言つが……この武器を一日で作るとか天才だ。

ま、まあ設計図つてかこいつのを作りて考へるまではそれなりの時間がかかるてるんだろうけど

「もひ、『飯食べてたら急に思いついちゃつて忘れないうちに作るの大変だつたんですよおー!』

「ごめん、やっぱただの天才だつた。

なんだよ思いつきて。思いつきでそんな強力な武器作るなよ。それ売つたら普通に一軒家買つても数年は豪遊しても暮らせんぐらいになるつてクロエが言つてたぞ。

ま、俺みたいに剣とかで戦えるならいいけどどうじやない魔法使いなら喉から手が出るほど欲しい代物なんだろうな。普通に魔法使うよりも連射出来るし、下手な魔法より強力だし。

「『JFAちばせりにひよこ』と改造してあるんですよー

さつき使っていた銃とは別の方を取り出すフール。

「へえ～。そっちは何が出来るようになつてんの？」

実はですねえ、と言いながらムフフと笑う。

「こつちはより魔力を込められます」

それって……

「大量の魔力込めてドッカーン？」

「はい、ドッカーン」

え、なにそれ、最強じゃね？

くつ、魔力だけじゃ足りねえ……俺の生命力も持つていきやがれえ！ これが俺の全力だあつ！！ みたいなことが出来るんじやね？ フェルには似合わないけどな。

てか、こつちの世界に来てから自分の思考がどんどん厨二臭くなつてる気がするんだが、多分……『氣のせいだ』。

「二人とも、お喋りもいいけど……見えてきたよ。洞窟だ」

ジルの言葉に前方を見る。

「お、マジか。本当に洞窟だ」
「洞窟ですねえ～」

少し先に筋肌にポツカリ空いた空洞。紛う事なき洞窟だつた。

「中に入る前に少し休憩するか」

「そうだね。結構魔物と戦闘になつたし、それがいいかもね」

「賛成ですう~。お腹減りましたあ~」

そう言えばそろそろ昼だな。

てなわけで、洞窟手前で休憩しつつ昼飯を食すことにしてたのだった。

* * *

「さて……そろそろ行くか」

昼食を食べ、適度に休憩したところで立ち上がる。

ここからは慎重に進むということで、休憩中に荷物の確認も武器の手入れもしっかりと行った。

洞窟に足を踏み入れると、外とは違ったひんやりとした空氣に包まれる。

「とりあえず魔物の気配はないね」

ジルが洞窟に入つてすぐに言った。

確かに、見える限りでは魔物の姿は確認できない。

「ま、進んでみるか」

慎重と言つても進まなければ依頼も達成できないのでいつもより遅めではあるが、ゆっくりと歩を進める。

「なんか……外の方が魔物多くなかった？」

暫く歩き進めたところで一人に尋ねる。

想像以上に反響して大きく聞こえる自分の声に内心少しひっくりした。

それはともかく、実際、洞窟に入つてからはまだ一度も魔物に遭遇していない。

「そうですねえ~」

「でも……声は大きくなつてるよ」

ジルの言つとおり、正体不明の声は段々と大きくなつてゐる。

あ、あと、一人の声も凄く響きました。大した音量ではなかつたのに。

「てかや、こんだけ声が響くとそれに釣られて魔物が寄つてきやうだよな」

「あはは。それもそうだね」

「そうこうつ」と言つてるとほんとに来ちゃいますよお~

三人で笑いあつ。すると

「キーッ!~」

といつ鳴き声と共に『何か』が飛来した。

「つおつー?」

咄嗟に避ける。

飛来した何かは再び上へ移動したようだ。
そこへ目を向けると……

「ホントにいたあ つー!」

洞窟の天井に張り付く十匹以上のコウモリ……ただしデカイ。

「あ、あれなんだ!?」

同じく天井を見上げる一人に声をかける。

「あれは……洞窟コウモリだね」

そのまま! この世界の魔物の名前は本当にそのままだな!

「一匹一匹は弱いですけど一度に大量に襲つてきますう……あと吸血もしますねえ」

吸血コウモリ!

「吸血なんてされてたまるか! 速攻で倒すぞ!」

剣を抜く。

「あまり派手な技は使えないよ。基本天井に張り付いている魔物だ

から下手したら洞窟が崩れる危険がある！」

同じく杖を抜くジルが注意を促す。フェルも銃をホルスターから抜いた。

「そ、そつか……」

確かに派手な技では天井が崩れてしまう……なら……

「火炎剣！」

俺は剣に魔力を込め、火の属性に変える。

「コウモリなら火は効くだろ」

「コウモリに限らず動物系には効くはずだ。

「うりやつ！」

切りつけると断末魔の悲鳴をあげ燃え落ちるコウモリ。やつぱり火が効くようだ。

「なら僕も ファイアボール！」

手の平台の大きさの火球がジルの杖から放たれ、それはコウモリに直撃する。

「ファイアショートですっ！」

やはり気の抜ける掛け声と共に、フェルの銃から火の属性をプラ

スされた魔力弾が発射される。それはジルの魔法より速度も威力も上のようで、当たつたコウモリは悲鳴を上げる間も無く燃え尽きてしまった。

俺の火炎剣もフェルの技術を教えてもらい、魔力の伝導率を上げる細工がしてあるが本家とは比べ物にならないみたいだ。いつか俺もフェルを超える武器を作り出したいもんだ。

『鍊金の剣（鋼）　スキル威力5%アップ、消費MP1低下』

俺の剣はステータス画面だとこんな感じだ。

ちなみにジルの杖も、他のクランのメンバーの武器もフェル製なのだが……ジルの杖は魔法威力、魔力伝達率上昇の効果があるのだが、このレベルの武器は普通だと、俺たち新人ギルド員では毎日仕事をしても買うのに半年はかかる代物だ。

俺の剣はフェル製ではないのでそれ程ではないが、それでも結構な価値が付くらしい。

有名なクランになればフェルのような専属の研究者が所属し、武器防具も相応のものになるらしいが、それ以外のギルド員はそういう所から流れてくる物を買うしかないのも価値が上がっている理由だ。普通の武具屋では、特殊能力つきの武具はまずお目にかかるない。

ま、それは置いといて、武器で威力が上がってるおかげか、それともただ単にコウモリが弱いだけなのか。攻撃一発で倒すことが出来る。

「数も多いし、さつさと片付けるか」

そして、俺たちは次々と攻撃を放ち、コウモリを倒していく。

第三章 六話 洞窟（後書き）

とこうじで、主人公陣、武器進化。

ちなみに新しい技もちょこちょこ覚えてたり。

なんか……あんまり進んでない?

次は進めます。

洞窟最深部まで……行けたら、いいなあ。

第三章 七話 最奥

最初の「コウモリ」の群れを倒した後も何度も襲われるも倒しながら洞窟を進む。

洞窟の中は暗いため、ライトの魔法の明かりを頼りに進んでいく。その間も、定期的とは言えないが何度も奥の方から鳴き声というか唸り声が聞こえてくる。

「これで最後 つと」

今も襲ってきた群れの最後の一匹を倒し、剣を納める。

「ここに入つてどれ位経つ？ そろそろ休憩するか？」

「何度も襲われると、いくら弱いと言つても疲れは溜まる。俺や戦闘が苦手とはいえ高ランクのフェルはともかくジルは疲れが見えている。

「僕はまだ大丈夫」

少し息を乱しながら杖を掲げるジル。

「そつは言つてもこの先何があるか分からんだから疲れてるなら休もう」

俺はジルの肩に手を置く。

「そうですねえ。奥まだまだどれだけあるか分らないですし、休みましょー」

「言つて、座り込むフェル。

高ランクの癖に一番に座り込むなよ、と思わなくもないが、そのおかげでジルも休む気になつたようなので口には出さないでおく。もしかしたらこうなるという考えがあつての行動かもしれないし。俺は袋から何本か薪を取り出し座るみんなの中心に置き、ファイヤーで火をつける。

「おお～、準備いいですねえ～。薪まで持つてるなんて」

気温の低い洞窟内で身体が冷えたのか火に向かって手をかざすフェル。

「まあな。何があるか分からぬわけだし」

薪を出すついでに取り出した保存食（干し肉）を一人に配る。

「ありがとう」

「どうもです～」

受け取つて齧るジル。フェルは焚き火で炙つてゐる。

「それにしても……洞窟内はコウモリばかりだな」

俺も干し肉を咥えながら一人に話しかけた。

「確かにそうだね。魔物が増えてると聞いたけど、コウモリは洞窟からは出ないはずだし」

「でも目撃証言は洞窟の外だろ？ そつするといつは関係ないってこと、か？」

「どうだろ……進んでみても状況が変わらなければ可能性もあるね」

「ソートして新たな可能性が見つかった。

「まあ、ソートで正解だと思いますけどねえ~」

炙った肉をふうふうしてソーフタルが会話に加わっていく。

「どうこう」とだ?「

「大型の魔物がいるといふには他から魔物が寄ってきてやすいんです
う~」

ソート……

「ソートの奥にいるのを退治……もしくは追に出すかないと解決しないで」と、「

「せうなりますねえ~」

なるほどね~。

俺たちの対処できる相手であつて欲しいもんだね。早めになんとか出来なきや応援呼んでる間に村に被害が出ないとも言い切れない。

「ソートの奥まで行つても俺らのやる」とに変化はない、か
「だね。どうぞみち奥まで行つて確かめなきや」

そつなるね。

相手を確かめなきや倒すのも応援を呼ぶのも出来ないし。
俺は半分ほどになつた干し肉を口の中に放り込んだ。

* * *

再び進みだし、少しした所で十メートル四方程の開けた空間にたどり着いた。

「うわ……また大量に……」

「ポイズンウルフの……群れ」

「いっぱいですねえ～」

視線の先には十匹以上のポイズンウルフ。

さらにその奥……俺たちが目指す奥への通路の前には……

「あれは……なんて魔物？」

俺はそれを指差す。

「え……何、あれ」

ジルにも分からないようだ。

「アレはベアスネークですね。前に見たことがあります～」

ベアスネーク……ベア（熊）スネーク（蛇）か。

「……」

確かに腕が蛇の熊だな。

「……強いの？」

俺は口元を引きつらせて尋ねる。

「強いですね～。腕の蛇を鞭のようにして攻撃してきますし、その蛇の牙には毒もありますう～」

マジか……しかもポイズンウルフの群れのおまけ付き。

「勝てると思う～」

「う～ん……微妙ですねえ～」

フルでも微妙なのか！？

「大きい魔法が撃てれば勝てるんですけどねえ」

「洞窟崩れる？」

「それは大丈夫ですけど……時間が

撃つために溜めがいるわけだな。

「んじゃ、俺とジルで時間稼ぐってことで良いって？」

「僕はそれでいいよ。そうしなきゃ進めないしね」

方針は決まったな。気合入れなきゃな！

「……大丈夫ですか。時間がかりますよ？」

フルもさすがにのんびりした喋りが出来ないようだ。

「ま、何とかするよ。出来たら教えてくれ」「わかりました」

俺はフェルが頷いたのを見て剣を抜いた。

「じゃ、俺が切り込むからジルは援護してくれ！」「うん、わかつたよ！」「行くぞ！ 魔神剣！！」

フェルが詠唱に入り、俺はポイズンウルフに向けて魔神剣を放ち、そのまま突っ込んでいく。

「おらあ！」

目の前の敵を切り上げて自分も飛び上がる。

「紅蓮剣！」

新しく覚えた技だ。

飛び上がって炎を纏わせた剣を魔物が集まっている場所に向けて投げる。剣が地面に突き刺さり、そこを中心に小さな爆発が起こる。さらには

「フレイムバースト！」

そこに巨大な炎の塊が打ち込まれる。

「ナイス、ジル！」

着地し、地面に刺さった剣を抜く。

「 つー？」

と同時に何か嫌な気配を感じ横に飛び。

すると今までいた場所に蛇の鞭が振り下ろされた。

「危ねつ……これが危険察知か。持つてて良かつた」

それを見て呟く。

この能力がなかつたらそのまま喰らつてたかもしれない。
てか地面抉れてるし……。

「 うおつー！」

考えてる間にまた一撃。今度は剣の腹で防ぐ。

「魔神剣！」

衝撃波を放つ。

それはベアスネークに直撃し

「無傷かよ！」

思わず叫ぶ。

レベルに比べるとステータスも上げてるし、リミットがあるとほ
いえ魔神剣でも相当な威力になつてるはずなのに……。

「くつ はつー！」

防ぎ防がれ、防御力も高いのか切れやしない。

「火炎剣！」

炎を纏わせた剣で一閃 が、

「なつ……早つ！」

かわされ懐に入られたところをバックステップで距離をとる。でかい団体の割りに素早い。防御力、攻撃力も高い。

「こりや強いわ」

剣を構え呆れまじりに呟いた。

「フェル！？」

その時、焦つたようなジルの声。

釣られてフェルの方に視線を移すと、目を閉じて詠唱に集中しているフェルの目の前までポイズンウルフが迫っていた。

「 くそつ」

「こりからじや間に合わない。ジルの位置からも助けに行くのは難しい。
なら

「鍊金つ！？」

地面に手を叩きつけ唱える。

「ゲエツ！！」

地面から生えてきた剣がポイズンウルフを貫く。

「 かはつ」

だが、その隙に鞭で身体を打たれる。
そのまま吹き飛ばされ地面を転がされる。

「出来た！ この部屋から避難して！」

そこでフェルが叫ぶ。

俺は転がるうちにベースネークが最初にいた通路の近くにいたため、起き上がるより先に通路へ向かい跳んだ。
ジルもフェルの後ろまで下がる。

「いくよ！ アイシクルレイン！！」

フェルが唱えると開けた空間の天井に魔方陣が浮かび上がり、無数の大小様々な氷柱が地面……魔物へと降り注いでいった。

魔法が終わり、氷を溶かすと、そこに魔物の姿は見当たらなくなつていた。

* * *

勿論ベアスネークも、だ。

「お疲れ」

俺は反対側にいたフェルとジルに声をかける。

「攻撃喰らつたみたいだけど大丈夫！？ 薬、使って！」

駆け寄ってきたジルが薬の入った瓶を取り出す。

飲むと体力が回復し、鞭で打たれた部分の痛みも和らいだ。

「いやあ～、疲れましたあ～」

フェルもやつてきて、気の抜けた声を上げて近くにあつた石に腰を下ろした。

その後、少し休憩ということになり、魔神剣や紅蓮剣のことや、実は見ていたらしい鍊金のことについて散々追求された。

適当に誤魔化したけど納得はしていらない様子だった。

任務が終わつたら色々訊かることだろう……はあ。

さらに洞窟を進んで、声が間近に聞こえるようになつてきた。
というか

「そこ、曲がつた先から聞こえるよな」

* * *

俺たちの数メートル先にある曲がり角。そのまま向こうからこの声は聞こえてきていたのだった。

「うん。この先だね」「ですね~」

二人の意見も同じ。
壁に沿つてゆっくりと近づいていく。
そして、顔だけ少しづつ曲がり角の先を確認しようと出す。

「 っ！？」

驚いて声も出なかつた。
そこは先ほどよりも広い空間。五倍くらいはあると感づ。
あるいはここにいるのが問題だった。

「何が……いたの？」

慌てて引っ込んだ俺を怪しがりながらもジルとフルも確認する。

「……あれば無理だね」「……あんなのアランクだつてないですよ。下手したらアランクです」

ジルも冷や汗をかいている。
フルも口がひくついていた。

「あれ……ドラゴンだよな?」「うん。しかも大きい」

「 ていうか竜種の中でも強力な黒竜ですよ」

俺たちが見たものは何メートルとか分からぬぐらい大きい黒い
ドラゴンだった。

第三章 七話 最奥（後書き）

やつぱり王道が一番ですね！
アーティストとしてアーティストで。

洞窟の奥地にて、ドラゴンを田にした俺たちは、一先ずそこを離れ作戦会議を行っていた。

「なあ……あれって俺たちで何とかなると思つか？」

先ほど田撃したドラゴンの姿を思い浮かべ、無理だろ? なあ……なんて思いながらも一人に確認をとる。

「いや、無理でしょ」

ジルはあからさまに冷や汗を浮かべ引きつった笑顔で言った。

「無理ですねえ~」

フュルも諦めたように言つ。

やはり二人とも俺と同じ結論に達していたようだ。

そりや大型の魔物とは思つてたけど……あれはないわ。ドラゴンつて……。しかも滅茶苦茶でかいし。どのくらいデカイかつて言えば、良く分からんつてぐらいデカイしな。

あんだけ大きいとどのくらいあるか考えるのも馬鹿らしきつて感じ。

「んじゃ……帰る?」

何とか出来そうもないのなら、これから行動はその選択しかない。

「そうだね」「ですねえ、バレないようこいつそり帰りましょ～」

俺たちは頷きあつて立ち上がる。
ちなみにここまでの会話は超小声である。

「…………あつ」

立ち上がった瞬間、俺は間抜けな声を出した。

「え？」
「はい？」

それに反応して二人が此方を向く。
だが、二人が反応できたのはここまでだつた。
座り方が悪かったのだろう、俺の足は立ち上がったとき痺れてい
た。そして、間抜けな声を出したあと……盛大にこけた。
腰に挿してあつた剣がガツシャーンと地面にぶつかる。その音は、
音が響く洞窟の中……下手をすれば入り口まで届いてしまうのではないかと思えるほどの大音量だつた。

「シユ、シユウジ！？ 何してんのつー？
「これは、拙いですねえ～…………」

信じられないものを見る目で俺を怒鳴るジル。
フェルもあからさまに引きつった笑みで頬を搔いた。
そして

『グオオオオオオツツ！～』

「……………バレた？」

立ち上がつて二人を見る。

「……………だらうね」

「あれだけ大きな音を出せばバレるよねえ～」

だよね。

「……………ごめん」

俺は頭を下げる。マジであつえないへマしちまつた…………。
その直後

「……………うわっ！？」

「……………な、なに！？」

「……………キャッ！？」

耳をつぶさざくような轟音、そして激しい地震でも来たような揺れ

を感じ、揃つて耳をふさぎづくまる。

まるで洞窟が崩壊したかのような、とんでもない音だった。

揺れが収まったところで耳を押えていた手を離し、立ち上がる。

「……………なんだつたんだ？」

同じよつに立ち上がつた一人に問いかける。
まだ微かに岩が転がるような音が聞こえていた。

「わからない……けど、音は多分」の先からだね

「うう言つて、ジルはドラゴンが居た方に視線をやつた。

「一度確認してみましょつかあ～」

フルの言葉に頷く。

何があつたのか気になるし……帰つて報告するにしても詳しい状況が分かつていた方がいい筈だ。

「じゃ、じゃあ……行くか

俺の言葉に一人が黙つて頷くのを見て、ドラゴンが居た場所へ、手遅れだらうけど呪音がならないように慎重に近づいていく。

前と同じよう、曲がり角の壁に隠れるようにして、何とか確認できるだけ顔を出して先を見る。

「…………は？」

まず確認した俺は、またもや間抜けな声を出してしまった。

「…………ほえ～」「…………うわでしょ？」

フルも良く分からぬ声を出し、ジルは信じられないようなものを見たといった感じの、といつか信じたくないといった声。

俺たちの視線の先には

「報告とか……してる状況じゃなくなつたっぽくね？」

先ほどドラゴンが居た場所には、ぐらぐらと砕けた岩の山があり、天井には大きな穴が開いていた。

しかも、その穴からは太陽の光が入り込み……それはつまりドラゴンが洞窟の外へ出てしまったということなわけで……最悪だ。

「そ、そつ……だね」

「このままじや、最悪村に被害が出るかもしませんねえ~」

二人の言葉にこのままだ帰ることは出来ないと確信したのだった。

* * *

ドラゴンが開けたのである天井の穴から外に出ると周りの木々を倒し、今にも飛び立とうとしているドラゴンが目に映る。しかも、多分飛んでいくだろうドラゴンの視線の先には、今回の依頼主がいる村。

「 ヤバッ！」

このまま行かせては拙いと思った俺は、咄嗟にドラゴンに向けて魔神剣を放った。

「グルウオオ ッ！」

衝撃波はドラゴンに命中し 全く傷はつけられなかつた 飛

立とうとしていたドラゴンは羽を下ろし、此方に振り向いた。

「シユウジ……どうすんの？」

震える声でジルが尋ねてくる。
だが　俺も咄嗟のことで何とか村から氣をそらせようと思つてやつたことであつて……何も考えていないのだった。

「…………何も考えてないんですね～」

銃を取り出し、両手に構えたフェルが呆れたように咳いた。

「し、仕方ないだろ！　あのままじゃ村に行つちゃつてたっぽいし！～」

「まあ、そうだけじ……今度は僕らがヤバそうだよ」「完璧に敵意もたれてますね～……凄い睨んでますよ～」「…………」めん

俺は謝った。

秘密はバレるだらうけど……多分何とかなるつて思つてる俺と違つて一人は下手したら死ぬと思つてるだらうしね。

「謝つてもしようがないよ。もう過ぎた」とだし
「ですね　来ますつ～～」

フェルの言葉の直後、ドラゴンが大きく息を吸い　炎を吐いた。

「つおおおおおつ～」

それは避けられないほどの広範囲の炎だった。

「二人とも俺の後ろに！！」

避けれない」と悟った俺はすぐに一人に声をかけた。
一人は何も言わずに俺の後ろへ移動する。その間にも、フェルは何発か冷気を込めたのであるう弾丸を打ち出すが、まるで効果が無い。

「行くぞ！」

一人が俺の背後へ来たのを確認して剣を振り上げる。
そして

「 海波斬！！」

炎や風を斬る超スピードの斬撃を放つ。

「くつそ……」

炎は斬れた。

だが、斬つてもすぐに新しい炎が襲つてくる。

「だったら うおおりやああつつー！」

俺はドラゴンの炎のブレスが終わるまで連續して海波斬を放ち続けることにした。

* * *

「ハア……ハツ、ハア……ハアア～、「ゴホゴホッ！」

あまりの激しい呼吸に咽ってしまった。

あれからどれだけ剣を振り続けたのか……ブレスが止まつたときにはもう腕の感覚が無かつた。

「大丈夫ですか～？」

「ゴホッ、うん……はあ、まあ、ね」

息も途切れ途切れに答える。

「それよりナイスだつたよフェル。おかげで休める」「いえいえ、シユウジくんがいなかつたらそもそもあのブレスをどうにも出来ませんでしたからあ～」

俺の礼に笑顔でそんな風に返してくる。

今、俺たちはドラゴンから少し離れた木の影に隠れている。ブレスの攻撃が途切れた瞬間、俺が防いでる間に用意していたらしいフェルの魔法でドラゴンの目をくらまし、その隙に隠れたのだった。

「ゴクゴク……ふう、落ち着いたかも」

袋から取り出した薬（調合の練習で大量生産した体力回復薬）を飲んで少し落ち着く。手の感覚も少しずつ戻ってきた。

「一人にも……ハイ」

ジルとフェルにもそれぞれ薬を渡す。
二人に渡したものは体力と微量だがMPを回復させる効果がある
今作れる薬の中でも結構上位の物だ。

「ありがとう」ゼこますうー！ んきゅ……でもシユウジくんって
節操ないですよね～」

「んあ？」

フェルからの突然の評価に変な声を出してしまった。

「うん。魔法に剣術、魔導具作成に薬の調合。こんなに色々やって
る人はなかなかないかも」

戸惑つているとジルが的確に説明してくれた。

……なるほど、確かに俺が知っているギルド員の中にもこれだけ
節操無く色々やってる奴はいなかつた。

「ま、まあ……それは置いといて。つーか何よりも今大事なことは、あのドラゴンをどうするかじやね？」

「そうだね。……でも、どうするの？ 正直言つて僕には何も考え
付かないよ」

優秀とは言つても、ジルもまだまだ低ランクのギルド員だ。それ
も当然のことなんだよな。

「わたしもあの竜に対抗できそつな魔法は持つてないです……ご
めんなさい～」

申し訳なさそうなフェル。

「いや、謝ることないって。あんなのどうにか出来る人間なんてそういうないって」

そんなフェルを慰めるように俺は言った。

「それにしても……変だね」
「なにが？」

ジルの咳きに間髪入れず尋ねる。

「いや、確かに……竜種は人間に對して友好的な種族のはず。……それが行き成り攻撃してくるなんて」

「そう言えばそうですねえ～」

ジルの説明を聞いてポンと手を打つて納得するフェル。

「なんか気が立つてたんじゃない？」

「そう……なのかな？ 何かおかしい気がするんだけど……」

そう言つて、手を顎に当て考え出してしまつジル。今襲われたらひとたまりもなさそうだ。

「友好的って……どんな風に？」

そんなジルは放つておいて、俺は気になることをフェルに質問することにした。

「そうですねえ……竜種は基本的には人の寄り付かない所に住んで

るんですけど、たまにそこに迷い込んだりするらしいですね～。あと、数は多くなりますが高位の竜だと人語を解す固体もいますねえ」

話だけ聞くとめちゃめちゃいい奴らっぽいんですけど……。

「ん～、じゃあさ、あの竜は喋ると思つ?」

「どうでしょ～……黒竜は高位の竜ですから、落ち着けばあるいは、ですかねえ～」

やっぱ高位なんだな、あいつ。

下位での攻撃力だったら竜ヤベエよな。

「んじゅ……落ち着いてもらおつか!」

どうしようもなかつた状況で一筋の光明が見え、俺は手を打つた。

「落ち着いてもらひつて……どうやってですかあ～?」

フェルが尋ねてくる。いつの間にかジルも此方に視線を向けていた。

「どうやつて……理性に無い奴を落ち着かせるには……」

「落ち着かせるには?」

ジルとフェルの声が重なる。
俺は一人に向かつて微笑み

「とりあえずぶん殴るー!」

もつていたのだった。

第二章 八話 竜（後書き）

お気に入り登録500件！

皆様、ありがとうございます！

何か段々更新が遅くなってる気がする。
一応ストックはまだあります。

次回決着。

「ぶ、ぶん殴るって……ど、どいつやつて？」

俺の言葉にジルが引きついた表情で聞いてくる。

「どうして？」

顔の横で拳を握り、

「……いつかって？」

振り下ろす。

「…………」

それを見て言葉をなくしたジルとフール。そんな二人に苦笑を見せ、

「まあ、あいつの頭に思いつきつぶち込んで目も覚まさせうってこと」

「いやいいやいやつ！ 無理だつて！」

「そ、そうですよお～！ アレはわたし達だけでどうにか出来る相手じゃないです～」

簡単に言つてみるが、一人とも先ほどの竜の攻撃を思い出したのか顔面蒼白でいやいやする子供のように顔を左右に振る。

「いや、多分なんとかなるって

気楽に言いながらリミッターをひとつ外す。

前に外したのはジル達との戦いの時……あれから仕事やなんかでレベルも上がってリミッターをつけている状態でも結構ステータスも上がっているので、ひとつ外しただけでジル達と戦った時に近いステータスになるよう調節済みだ。

まずはこの状態で、あのドラゴン相手にどれだけやれるか試してみることにした。

「何とかなるって……ならないと思うんだけど」

「なるなる！ 絶対大丈夫だつて！」

まだ不安な顔をしている一人に笑いかける。

「だからその自信はどこからくるの……って、もしかして、僕らと戦ったときのような隠し玉でもあるのかい？」

言いかけて、俺との戦いを思い出したのか、ジルがそつ尋ねてきた。

「隠し玉？ 前に戦つたときってどうこうことですかあ～？」

「ああ、前に戦つたことがあるんだよ。ジルとアリアとはね」

不思議そうなフェルに軽く説明する。

このことは実はクランメンバーには黙つている。それで一人への態度を変えるような奴はいないって分かってるけど、態々言う必要も感じない。だから、それを知っているのは俺たち当事者とリーダーのクロエだけなのだった。

「隠し玉ってなんですかあ？」

フールの興味はそつちで移ってしまったらしい。何やら研究者の瞳で俺を見つめてくる。

「ま、まあ、それはおいおい……」

「見せてくれるんですか？」「？」

「うおう……」

肩を掴み、鼻息荒く、俺がほんのちょっと動くだけでキス出来てしまいそうな位置にまで顔を近づけてくる。

「え、えっと……必要になつたら……見せるしかないと言いますか」

じぶんむぶんて答える。

曖昧に言つてしまつたが、実際やばくなつたりコマッターライターを全部解除して本気でやりなきやならなくなるんだろうしな。

「なんとか……出来るの？」

ジルが俺を真つ直ぐ見つめる。

「ああ、出来るー。」

俺は即答で断言する。

それを聞いて「うう」と一言だけ呟いてジルは杖を握った。

「なり、信じるよ」

「……ありがとな」

ジルの言葉を聞いて、つい彼の頭を撫でてしまった。

なんか丁度良い位置にあつたもんだから、つい、ね。

「…………」

ジルは俺と田を合わさずにドライゴンを見ていた。気のせいいか、なんだか少し照れているような気配を感じた。

何か俺……こっちに来てから人の頭撫でることが多くなつてゐる気がする。

はっ！？ まさかこれがオリ主のナーテポか！？ なんて思つたがジルは男だ。俺はその考えを即座に捨て去つた。

「わたしも信じますう～！ なので早く見せてくださいねーーー！」

「あ、ありがと～……が、頑張るよ」

迫つてくるフェルに、ジルの頭から手を離し腰を引きつづき答えた。

「ん、いほん」

俺は咳払いをひとつして気を取り直し、一人に向き直つた。

「んじや、作戦な。俺が突つ込むからジルは魔法で援護してくれ「僕の魔法じや傷ひとつつかないと思つんだけど」

そんな風に自信なさげに言つ。

「田とか口、関節や指先を狙つてくれ。生物である以上その辺りは他よりも弱いはずだと想つ

多分そつなんじやないかな？ なんかの漫画で見たことあるじ。

「で、フェルは……一番強力な魔法の準備しててくれ
「わかりましたあ～」

一人が頷くのを見て俺も剣を構え、

「それじゃ 行くぞ！」

号令と共に走り出した。

* * *

「とは言つたものの……どう攻撃すりゃいいんだ？」

ドリゴンに向かい走りながら考える。
やつぱり顔面に一撃入れたいけど……普通じゃあそこまで届かない。いくら身体能力が上がつてるとほいえ、あそこまで跳躍する脚力なんてないからな。

「よつ と」

ドリゴンに一番近い位置にある木に登る。

この時点で軽く十メートルは跳んでる自分にビックリする。頑張れば十五メートルくらい跳べるかもしれないが、それでもやはりドリゴンの頭までは無理そうだ。ま、ロミッターを完全に解けばいいるかな？

「ユウからなら……行けるか？」

枝に手をかけ木の天辺まで登つてドラゴンを見上げる。それから下を見るとジルはドラゴンから見えない場所で杖を構え俺の動きを見ている。フルも集中して魔法の準備に取り掛かっているようだった。

「行くか」

剣を握り締め足に力を込める。

「はつ！」

一気に跳ぶ。

木が揺れ、ドラゴンが此方を向きその瞳に俺の姿を捉えて口を開ける。

「ブラスト！」

口を開いたドラゴンの顔のすぐ傍でジルの放った魔法の小さい爆発が起ころる。

「ナイス！ うおりあ つー！」

怯んだ隙に頭に思いつき剣を叩きつけた。

そして手が痺れるほどの硬さを感じ、さらにバキンッと不吉な音。

「はいー！？」

根元から折れた剣の刃が俺の顔スレスレを回転しながら後方へ飛

んでいった。

「 つー. 」

剣を見送つて再びアーリアンを見ると首を後方へ逸らし反動をつけて俺に頭突きをしてくるといふだつた。

空中で避けることも出来ずにはいられてしまつ。

「 つおおおつー. 」

そのまま地面へ叩きつけられる。

地面が抉れる気配と同時にとんでもない衝撃を感じた。

「 シュウジー? 」

「 ゴホッ ゴホゴホッ! 」

肺から一気に空気が抜けて苦しいが、咳き込みながら何か立ち上がる。

「 だ、大丈夫! ? 」

ジルが俺のすぐ傍まで駆け寄つてきた。

「 つおおー、俺凄え! あの高さから落ちたのに生きてるー. 」

正直死んだと思つたけど、物凄い痛いだけで普通に喋れるしチート凄いわ。今まで一番ステータスが上がつてることを実感できた。

「 さっさはナイスだつたよ、ジル! 」

「え、う、うん。それより身体は？」

「大丈夫。だからまた宜しくな！ 錬金！」

折れた剣の柄を捨て、今度は両手に一本ずつ一本の剣を錬金した。

『グオオオオオオ』

その時、ドラゴンが光に包まれた。

「……これは？」

何が起こった？

「フェルの……魔法？」

ジルが咳き、俺はフェルの方に視線を移した。数メートルしか離れていない位置にフェルはいた。

こんなとこまで飛ばされたのか……。

フェルの足元には良く分からぬ魔方陣、そしてフェル自身もドラゴンと同じ光に包まれていた。

「これは何の魔法？」

フェルの近くに寄つて尋ねる。

「わたしはあまり強力な攻撃の魔法が無いので……これは、魔法を使つてゐる間、大幅に、相手の能力を、下げる効果が、ありますう

……

手をドラゴンにかざし苦しそうに言つ。

「今なら攻撃も、効くはず、ですぅ～」

俺はフェルに頷き、ドラゴンに向かつて走る。早く決めてやらなきゃフェルが辛そうだ。

「アバンストラッショ～！」

攻撃を放つ。

『グ、グルオオオオ』

ドラゴンの鳴き声、そしてその皮膚には大きな切り傷。よし、効いた！

「んじゃ、終わらせるか～！」

俺は再び剣を逆手に、腰だめに構える。

「鍊金！ そんで、アバンストラッショ～！」

顔面へ向けてアバンストラッショ～ アロータイプの鬪氣だけが飛んでいくものを放つ。

そして

「コリッターもつ一個解除！」

言ひて跳ぶ。

そのスピード、跳躍力は先程の比ではなく、ドラゴンの頭まで届く。

アロー・タイプで放つたアバンストラッシュの闘氣に追いつき、

「クロスッ！！」

近距離用のブレイクタイプを放ち、アローとブレイクの複合技アバンストラッシュクロスをドラゴンにお見舞いしてやつた。

『 ツ 』

ドラゴンは声を上げることも無く重力にしたがって倒れしていく。俺が着地すると同時にドズウ・ウウンという音と地響きと共にドラゴンが倒れ伏し、動かなくなつた。

「た、倒したの？」
「す、すごいですう～」

ジル、それと魔法を解除したフェルが畠然とした表情をしていた。

「多分な……死んではない、よな？」

一応皮膚も切り裂けると分かつっていたので鍊金で切れ味をなくしてから技は使つたけど……。
出来れば話してみたいしな。

「生きてる……みたいだね」

ジルがドラゴンを見て言つた。

俺も見るとドラゴンの腹がゆつくりと膨らんだり萎んだりしてい
た。息、してるようだ。

「二人ともお疲れ。田覓ますまで休憩にしようぜ」

俺は持ってきた薬を全部出して座り込んだ。

「田、覚ました途端襲つてきたりしない……かな？」
「ありますねえ」

一人も座るがそう言って不安そうな顔をしていた。

「大丈夫だと思うけど……そうなつたら今度はやるしかないかな？」

俺は薬を飲んで減つた体力が回復するのを感じながら言った。

「ま、何とかなるつて
「樂觀的ですねえ」

フルが呆れたように俺を見て、

「でもシユウジが言つとそつ思えるから不思議だよね」

そう言ってジルは微笑んだ。

第三章 九話 連携（後書き）

ユニーク50,000!

ありがとうございます。

さらに今回の更新で多分PVも30万に！

決着！

今回は全力出さずになんとかなりました。

チートと高ランクで大した苦労も無く終わり、次でこの章も終わりです。

そろそろ違う世界に行きたい……。

「ふい～……疲れた～」

俺の攻撃で氣絶し、力なく地面に倒れる竜の首の傍らに腰を下ろす。

チートのお陰で体力的には然程疲れていないが、こんな大物との戦いというのは初めてのことで精神的にかなり疲れてしまっていたのだった。

フェルも魔法を使った位置で肩で息をしながら座り込んでいるし、ジルは啞然とした表情で俺と竜を交互に見ていた。

「ほ、本当にやっつけやつた……」

呆然と呟くジル。

「言つたろ。ぶん殴るつて」

俺はそんなジルに拳を上げて見せた。

「ま、まあ……殴つたつて言つより剣で叩いたつて方が正しいけど

うん。別に拳で殴つたわけじゃないもんな。

「でも、まあ……一撃は一撃だ。ちゃんと静かにさせたろ?」

「そ、そうだね。……今でも信じられないよ」

言いながら腰を引かせつつ俺の傍まで寄ってきたジルも腰を下ろした。

「はあ、はつ…………まあまあはあ…………んつ、はつ、はつ」

そして、苦しそうな息遣いが聞こえてきた。

「…………フェル？」

それはフェルのもので、そちらを見ると苦しそうに胸に手を当てて呻いていた。

立ち上がり、急いで駆け寄る。

「どうしたー?」

フェルの肩を掴み、田の前にしゃがみこむ。

「はつ、はつ、はつ、はつ」

答えられないほどの様子のフェル。

肩に触れている状況。仕方なく、俺はフェルのステータスワイン

ドウを表示。

「…………これが?」

状態異常などにかかっているわけではなく、見る限り今の状況の理由になりそうなものと言えば残りMPが一桁になっていることぐらいしかない。

とりあえずこれを何とかしてみて駄目だつたらまた詳しく探るつ。今の状況で使える技をチートで習得、それをすぐさま使う。

「マホアゲル」

これは自身のMPを他者に分け与える魔法だ。

魔力回復の薬は使い切ってしまっているし、今の調合レベルではそれ程回復させられる薬を作ることも出来ないため、すぐにフェルを回復させようと思つたらこの魔法を思いついた。

フェルにかざした手が優しい光に包まれ、俺からフェルにMPが分け与えられる。

フェルのMPが100を越えた辺りで供給をやめる。

50を超えた辺りから息も落ち着いてきて、今では普段通りと言つてもいいくらい回復していた。

「魔力が……戻りましたあ？」

自分の手を見つめ不思議そうに首を傾げる。

「もう大丈夫か？」

俺はフェルの肩から手を離し尋ねる。

「はい。つていうか、何したんですかあ！？」

「ん？俺の魔力を分けただけ。詳しいことは聞かないでくれるとありがたい」

「むうう……気になりますけど……まあいいです。今度さつきのことと一緒に聞かせてもらいますう～」

うへえ。

「てか魔力つて使いすぎるとあんな風になるの？」

俺はそんなになるまで使つたことがないし、そんな風になつた人

を見たのも初めてだつた。もし、そなればこの世界での魔法つてのは使いすぎると危険つてことになるんじやないか？

「はいっ。最悪氣絶して数日間寝込むことになりますねえ～」

それがMPを0まで使つた代償か。

「今回の魔法はそんなに魔力消耗するやつなのか？」

ランクAのMPを根こそぎ持つてくつて……禁術だ。

「それほどでもないんですけど……今日は相手が強大でしたからあ～

竜を見るフェル。

聞いた話を総合して……あの魔法は相手によつて消費MPが変わ
る代物らしい。

「そりが。ま、回復したなり話は後だ。まずはこの竜を何とかしな
きや、な」

俺は氣絶してこる竜の頭をコシコシを呪つた。

* * *

竜を起こす……の前に、起きてまた暴れられないように竜の身体
を魔力の輪で拘束する。簡単に言えば『リリカルなのは』のバイン

ドっぽいものだと思つてくれれば良い。

まあ、チートで拘束術を検索して良さそうだったら取得した。それで竜の手足、胴をガチガチに拘束していく。

「…………あれ？ これって……」

拘束していく途中、俺はある事に気がついた。

「これは……俺がやつたものじゃない」

それは傷だつた。

それも切り傷。その傷が竜の腹側に数メートルの範囲に渡つてある。

戦つて分かつたが、この竜は相当に頑丈だ。その頑丈な竜の皮膚を綺麗に切り裂いている。

一体誰がどうやって……こんなのを人間がやつたのか？ それとも竜同士かそれに匹敵する敵との戦闘か。もしかして竜の気が立つていたのはこれが原因か？

「なんにしても……」のままじやヤバイか

傷は比較的新鮮らしく、今でもまだ血が流れ出てきていた。

「ベホマ」

俺はジルとフェルの二人に気付かれないよつその傷を治す。もし原因がこれだつたなら、もう起きても暴れないかもしない。そんな期待をしてみるものの拘束は解かない。

「んじや、起こすぞーっ！」

俺は一人に向かつて叫ぶように言つ。

「え、ちょ！？」

「ひ、ひえええま、待つてください～！」

慌てて離れる一人を見送り、俺は

「起きろ、ネボスケつ！」

竜の頭を叩いた。

……チートな性能の身体能力で思いつきり。

。 。 。
。 。 。
。 。 。

短くてごめんなさい。

最近ちょっと忙しくて……。

来月一杯まで更新遅れ気味になるかも。
なるべく出来次第更新はしていきます。

「なぜ、癒したのだ、人間」

それが目覚めた竜の第一声だった。

「そりや、アレだよ。俺は別にお前を殺すのが目的じゃなくて話をするために戦つたんだ。傷なんてあると話も出来ないと思つたんですね」

俺は竜と目を合わせ答える。

傷を治したことが上手く作用したのか分からぬが、先程の戦闘の時とは違い、その瞳は冷静なもので拘束魔法を解こうと暴れるようなことも無かつた。

「そうか。……だが、貴様、本当に人間か？ 手傷を負つていたとはいえ、我を単騎で打ち負かすなど」

「単騎じやねーよ」

フェルの補助魔法にジルの迎撃魔法があつたらしいが、

「ふん。まあ、いい。それで話とはなんだ？」

「お前、何でこんなとこにいたんだ？ この辺に魔物が集まつてるのはお前が原因なのか？」

「なぜ、ここに……か。我が住んでいる山まで帰ることがどうにも出来そうもなかつたのでな。仕方なくここで傷が癒えるのを待つていた。魔物に関してはその通りだらう。恐らく我的力に引き寄せられた者が集まつていたのだらう」

ふーん。まあ、嘘は吐いてなさそうだな。

「次の質問だ。……何で急に襲ってきた?」

「気が立っていた、としか言いようがないな」

竜の答えは簡潔なものだつた。

「気が立つてつて……やっぱりあの傷のせいか?」

「…………」

俺の質問に竜は押し黙つた。

「……まさか、人間にやられたのか!?」

もしそうなら人間の俺たちを見た途端襲つてきたのにも納得がいく。

「まさか。我的身体を人間があそこまで傷つけることなど出来るはずがない」

俺にやられたけどな。

チートだけど。

さらに言えば、厳密には人間ですらないけどな!
種族、神見習い、だし。

「じゃあ、誰にやられたんだよ? そんなに言つお前を傷つけたんだから相当な相手だろ」

「…………だ」

「なんだつて?」

「…………娘だ」

「親子喧嘩かよー?」

俺は思わず竜の頭を引っ叩いてツツコんでしまった。

「むう……だが、さすがにそれだけでは我もあるなりはせん
「…………」

「…………」

ただの親子喧嘩じゃないことか?

「娘は……人間の男に操られていようつだつた。どうやつて竜である娘を操つたのかは分からんがな

それは……普通怒るわ。

俺、だつてクランのメンバーや、サーチャ、リヴィが操られて攻撃してきたら、その操つてる奴を許せないだろつし。

「なら、もしかして……傷が治つたらその男をひかするつもつでいた?」

「当然だ。必ず探し出しハツ裂きにして食ひつてもるわ」

ぐ、食うんだ……。

「そ、その男をひかせて搜すつもりだつたんだ?」

俺は竜の剣幕に若干引きつづりを続ける。

「そんなこと、人間の住む場所をひとつ残らず調べるまでだ

ちよ、そんなことしたら

「竜が街に来たら大騒ぎで、じやなくなるだろー。」

「それがどうした？」

「関係ない、とばかりに言い放つ竜に俺は頭を抱えた。
こんなのが街に来たら、上空に現れただけでも大混亂になるんじ
やないか？」

「ちょ、ちょっと待つてくれ！ 考え直せ！ 下手したら討伐隊と

かが結成されるような騒ぎになるぞ！？」

「だから、それがどうした？ 人間がどれだけ集まるつと我は負け
ん」

負けん、じゃねえよつ！

何を得意げに言つちやつてんの、こいつ！？

「ゆ、猶予をくれー その間に俺がその男を探し出してやるからー。」

「シユ、シユウジー？ な、何を勝手に言つてるのー？」

「そ、そりですよおー。それに危ない気配しかしませんよおー！」

「イツに街に来られるより良いだろ。
つーか、こいつがこんな奴なせいか、戦つてるとかよー一人がビ
ビッてるじゃないか。フェルなんか泣き入つてるし。

「そんなこと言つても、竜を操つてる男が何するつもりか分からな
いし、聞いた以上調べなきやいけないだろ」

「そ、そうですけどおー……」

俺はフェルたちに向かつて言ひつ。

「なぜ、そこまでする？」

竜が不思議そうに問いかけてくる。

「なぜって……さつきも言つたけど、お前が街に来ると騒がしくなるし。事情を聞いた以上調べなきやいけない。その竜を操れる男つてのが何かを企んでないなんてとても言えないしな」

いや、さつと何かとんでもないことを企てるはずだ。そんな気がする。

「分かつた。傷を癒し、我に勝つた貴様の言つて従おつ「ホントかー?」

「ただし! 一月だ。それを超えれば我が自ら動く」

一月……それが期限か。

「わかつた。絶対に探し出すから、お前は一月は絶対に静かにしてろよ」

「約束は守る」

「よし。……あ、あと、ここからわざわざ出て行けよ。近くの村が魔物が増えて困つてんだ」

「良いだろ? 我は我の住処に帰る。一月後、再びここに来ることにじゆつ」

「じゃ、俺もそれまでに調べてここに来る。それでいいな?」

竜が頷くのを見て、俺は拘束魔法を解いた。

「ふむ……確かに違和感無く治つている」

立ち上がり、身体を動かして傷の具合を確かめる竜。

「おい、人間」

「なんだ、竜」

「貴様にこれをやる」

そう言つた竜は、口で自らの鱗を剥がし俺の前に置いた。

「……これは？」

「竜の鱗だ。人間にとつては貴重なものらしくてな。良い武具が作れる」

「へえ」

「それをやる。我との戦いで貴様の剣はボロボロだら」

言われて剣を見ると確かにボロボロに欠けていた。

「ついでにこれもやる」

そう言つて鱗の横に置いたのは牙だった。

「良いのか？」

「ああ。我ら竜族は人間と違ひ歯も鱗も何度も生えてくるからな」

「う、鱗って生えるもんなの？ てか人間と違つてつて、人間に鱗はねえよ！」

「ま、貰えるもんは貰つとく。じゃ、一月後にここでな！」

「ああ、期待しているだ」

俺は竜に背を向け一人の元へ駆け寄つた。

「よ、よく普通に話せるね」

「そうですね～。とても低ランクには見えないです～」

「まあいいじゃん。それより早く帰ろ～。あいつが立ち去れば依頼は解決だし、何より調べなきゃいけないことも出来たしさ」

「色々話はありますけども、今はそんな気力もないですし……帰りながらにしましょ～かあ～」

「そうしてくれると助かる」

「とりあえず、村ヒギルドに報告だね？」

ジルの言葉に頷き、俺たちは村を田指して歩き出した。

* * *

「ふん、妙な人間だつたな。我を恐れもしないビビンカ正面から打ち負かすとは」

そう呟いて竜は飛び立つために羽根を広げよつとした。
だが

「やあ～っと見つけたぜ。クソドリゴン」

「グゥウウウツ～！」

今までに飛び立つとした竜の首に黒い剣が突きたてられた。

「つこでに逃げられないよつこしてやるわ」

竜の首に剣を突きたてた男がそう言つて剣を振るうと、まるで紙でも切つたかのように竜の羽根が切り裂かれた。

「グオオオオオオツ！！」

竜の叫び。

「どうだ。子供の身体で切り裂かれる気分は？」

男は卑下た笑みを浮かべ竜を見る。

「子供……だと？」

「娘は……どうした？」

たく思いな

貴様ああああ！」

竜は叫ぶと同時に超高熱の炎のブレスを吐き出す。

「ふん。おい！」

「……せー」

男が呼びかけると、庇うように男の前に現れる人影。

「フシユウウウウ」

ブレスが終わる。

「なにつ！？」

そこにはブレスの直撃を受けたにも関わらず傷ひとつ、火傷ひとつ無い少女。その後ろには少女に守られブレスの直撃を免れた男。

「女……なぜ、貴様から娘の気配を感じるのだ」

「……」

少女はなんの感情も示さない瞳で竜を見つめたまま動こうともしなかった。

「へへへ……」

男が笑い、少女に近づき……少女の服、袖の部分を引きちぎった。

「 つ！？」

竜が言葉を失う。

服が破れたことで外気に晒された少女の腕は……黒い、竜と同じく黒い鱗に覆わっていたのだった。

「良い実験が出来た。これは竜のブレスにも耐えられるほどの強靭な身体だという、な」

良いながら男は黒い剣を少女に渡す。

「殺れ」

「……はい」

少女が男の言葉に従い剣を振り上げる。

振り上げられた”竜を切り裂く剣”は”竜を傷つけることの出来

る竜の力”でいとも簡単に竜の首を胴体と切り離した。

第三章 十一話 不穏（後書き）

前回短めだったので早めに更新！

この世界での物語も終盤に入りました。

次から新章です。

出来れば一週間以内に更新したいです。

更新遅れて申し訳ありません！

「だから最近、私も全然サーチャには会えてないのよー。」

「そう不機嫌そに言つてゴシップをテーブルに呴きつけるように置くリヴィ。」

「やうなのか……同じクランに所属してゐるのにな。やつぱり国一一番と名高いところだから忙しいんだな」

それに対し、会えないことに落胆しつつも話を進める俺。

* * *

今日は休日。

ドラゴン退治から十日あまり経つてゐる。

あれからフェルからの追求を適当に答えばぐらかしつつ依頼を受ける日々を送つてゐたのだが、今日はこれと言つた依頼が見つからなかつたため久しぶりの休日となつた。クランメンバーたちは各自思い思いの休日を過ごしていることだらう。

俺はと言えば、あの日、ドラゴンとの戦い後に貰つた鱗と牙をサーシャとリヴィに送るつもりで製作した。あまりに大変な作業だつたため鍛冶スキルなどを一旦だけチートを使ってレベルを上げた武器や防具を渡そと二人の所属するクランを尋ねることにしたのだった。

そこで出迎えてくれたのはクランのリーダーであり数少ないSランク保有者であるリスターさん（男性・二十代前半）だった。高ラグンク故の霸氣や威圧感などは若干あつたが基本的に穏やかで親しみやすい良い人だった。

用件を伝えると、サーチャは居ないようで、リヴィも仕事があるらしいのだが自分が行くから休んでいいと告げ、俺と過ごせるようしてくれたのでお礼を言い、リヴィと一緒に落ち着いて離せる場所へ向かった。

そして冒頭に戻るわけだが

なんでもリヴィ達の所属するクランはクラン内でチームを分けてそれぞれが仕事を受けているらしい。その所為で休みもバラバラ。別のチームになってしまったリヴィとサーチャも中々会えなくなってしまったようだ。

「色々話したい」とあるのだが

不貞腐れたようにフルーツジュースを飲む。
元同級生であり親友になつたサーチャと会えないで淋しいのだろう。

「つつても俺よりは会う機会も多いだろ？」
「それは…… そうだけど」
「ま、会えたときに一杯話せばいいだろ」
「…………うん」
「それよりも…… だ」

俺はサーチャの話題を一旦打ち切り、真面目な顔でリヴィを見る。

「なによ？」

じつと自分の顔を見つめる俺に怪しげな田線を向けてくる。

「お前……こつの間にランク上がったんだ」

そうなのだ。

リヴィは学院卒業して僅かな期間で既にランクをここまで上げていたのだ。これはリヴィを待つ間にリスターさんから聞いたことなので間違いない。

「ていうか、私はシュウジがまだランクってことのほうが信じられないんだけど」

半田でじゅうりを見る。

「サー・シャだつて口にはなつてるわよ？ まあ、このランクの実力は既についてるけど」

「は、ははは」

乾いた笑い声しか出せねえ。

「そんなんでクランを立ち上げるなんてこなることやつ」

鼻で笑い、肩を竦めるリヴィに若干腹が立つが、こいつは年上の余裕でなんとか堪えてみせた。

てか言い返せないし。

「で、でも俺だつてなあ……」

「俺だつて……何？」

ドラゴンと戦つたり 戰うどころか退治したし 色々ランク
以上に危険な依頼をこなしてゐるんだ。

……ただ色々あつて認められてないけどさ。
ドラゴンだつて結局生かしたまま逃がした訳だし。

「何でもないです」

「しつかりしてよね。私とサーラ・シャモ・シュウウジがやるクランに入る
予定なんだから」

「返す言葉もござこません」

大きい」と言つた手前素直に聞くしかない。

「ま、まあ」の話は置いといて…

「自分で振つたくせに」

「じ、実はプレゼントがあるんだ！」

「都合の悪い」とは無視するのね

リヴィの言葉を聞かなかつたことにして俺は当初の予定である贈
り物の入つた袋をテーブルに載せる。

「まあいいけどね。で、プレゼントって何?」

俺に呆れている感じを出しつつもワクワクした様子を抑え切れて
いない子供なりヴィである。

「何か今、変なこと考えてない?」

「め、滅相も!」

「いいけどさ……開けていいの?」

「お!。そのために用意したんだ」

そしてウキウキと袋を開けるリヴィーだが……

「…………」

中身を見た途端なんだか落胆しているようだった。

「え、気に入らないか？」

全部自分で作つたため不安になる。

「てか、女の子にプレゼントって送るのがコレ?
「……はい?」
「私の期待を返せーっ!」
「何がなんだかーっ!?」

空になつた袋を顔面に投げつけられた。

* * *

「てか何か見たこともない素材ね

「氣を取り直して、俺の送つた品をじつくつと見つめリヴィーが言つた。

「うん。ドラゴンの牙から作つた杖と、ドラゴンの鱗から作つた籠手と胸当て」

杖は魔力の伝導率が良いのか同じ消費魔力でも他の杖より威力の高い魔法が使えるし、鱗で作った防具は刃物は通さないし、魔法も弱いものであれば完全に防げる。さらに重量も軽いので女の子であり成長しきつていかないリヴィとサーチャでも負担になることなく身に着けることができるだろう。

「ドライコンー？ なんでそんな貴重なものを持つてるの！？」

「まあ、色々あります……あるドライコンさんから譲り受けました

ポカソんとするリヴィ。

「相変わらず想像も出来ないことをするね、シユウジは

「あ、あはは……ま、まあ、それはいいとして、どう？ 使えそう

？」

俺が聞くと杖を手に、籠手や胸当ても触りて確かめるリヴィ。

「今使つてみると装備よりも良い……」

「そ、そ、うか！ そりゃあ良かった！」

贈った甲斐があるつてもんだ。

「サーチャにも同じの用意してたんだけ……リヴィから渡していくれるか？」

「え……？ う、うん。わかった」

俺はもつとつの袋をリヴィに渡す。

「シユ、シユウジも何か作ったの？」

「自分に？」

「う、うん」

俺は苦笑して、

「いやあ……それが、一人に作つたら牙も鱗もほんのちょっとしか余らなくてや」

さすがに剣とか作れるだけの量は残らなかつたんだよね。

「へつ！？ ジ、自分には何にもないの？」

「そうなるな」

「そ、そ、う……」

なんだか分からぬがリヴィの頬がほんのり赤く染まる。

「た、大切にする」

「おう。つつてもちやんと使つてくれよな」

「……うん」

何か凄い嬉しそうなんだかど急にじづつしたんだ？

「ま、自分の武器もじづするか考えないといけないけどな」「シコウジつて鍊金つてのでいくらでも作り出せるんじやないの？」

リヴィとサーチャには鍊金について少しほ話してある。

「そりなんだけど……それだと強度に問題が出てね。前の戦いじゃ何本も折れちやつたし」

「はあ！？ 剣が折れるつて……何したのよー？」

驚くリヴィーにこの前のドラゴンとの一件を説明する。

「ドラゴンと戦つて、しかも倒すつて……何でフランクのままなの
よー。」

なんか知らんが怒り出す。

「俺に言われても
はあ……まあいいわ」

俺がやつ言つとリヴィーは大きなため息をついた。

「で、武器だつけ？」
「そう。何かいい案ない？」
「もつと強い武器は創りだせないの？」
「今の俺じゃ無理だなあ」

チート使えば聖剣だらうが魔剣だらうが神器だらうが創り出せる
と思つけど。

「魔法剣だつけ？ あれでも駄目なの？」
「強度が上がるわけじゃないからな」
「ふうん。……ならいつそのこと魔法そのものを剣にしちゃええば？
これがホントの魔法剣つてね」
「……魔法剣」

リヴィーの言葉を繰り返す。

言つたりヴィー本人は見る見るうちに顔を真っ赤にしていた。

「じょ、冗談だけ

「それだ！」

「ひやつ！？」

行き成り立ち上がつた俺に驚くリヴィ。

「ど、どうしたの？」

「それだよ、リヴィ！」

「ど、どれ」

「魔法剣！」

俺の魔力がある限り折れることの無い剣。

魔力自体を剣にしてる話は結構あるし、ダイの冒險なんかでは魔力を収束させたりしてたから、それを利用すれば属性のある魔法剣だって作れるはずだ。今までのようになにか刀身に炎を纏わすんじゃなくて刀身自体が炎の魔剣。

「ありがとうリヴィ！ 早速帰つて試してみるよ！」

「え、ちよ……え？」

唚然とするリヴィを気にする余裕も無く、俺は田舎へと走るのだった。

ロロナとアーリを一緒に買ひてようやくロロナのまつが終わり、アーリも中盤。

これが遅れた理由です……すいません。

新章突入＆多分コレがこの世界最後の章。

とりあえず後2～3話とヒーローグ的な話を書けば終わるとこままで書き終わっています。

次の世界がどこにするかまだ決まってないんですけど。

またアンケートどうかと思います。

そろそろ他の世界でもやってけやうなぐらこに力はついてきてる…

…はず。

魔法剣が完成した。

いや、言葉にすればたったこれだけなのだが、そこに至るまでにはとてもない苦労があった。話し始めればキリがないので簡単に説明しよう。

リヴィにヒントを貰った俺は、まず鍊金で柄だけを用意した。んで、いつも魔法剣の要領で試してみたんだけど、これがまた駄目駄目だった。

まず、剣の形にならない。それに切れない。刀身がないんだから当たり前だけど。

そこで、魔力を刀身に変えることから挑戦してみることにした。これもいつもの魔法剣のように魔力を薄く刀身の形になるように練つていく。

何とか日本刀ぐらいの太さに魔力で刀身を作ることに成功し、試し切りをしたもの、刀身の強度が弱くグニヤリと折れ曲がつてしまつた。分かり易く言うと長いゴムで切りつけた感じだ。

そこで時間はかかつたが、刀身の大きさは変えずにさらに多くの魔力を圧縮。

圧縮、圧縮、圧縮。

それで試し切りをしてみると……スパッと綺麗に何の抵抗もなく切ることが出来た。試しに厚さ十センチほどの鉄の棒を作り、それを切つてみたのだが……それすら真っ一つ。切断面なんかツルツルしていた。

これで完成でもいい氣がしたが、そこからさらに魔力に熱を持たせてみる。

それでさつきの鉄の棒を切つてみると、切断面がドロリと解けて

いた。

同じように水の性質を持たせてやると切れ味が若干上がった気がした。風、切った鉄の棒が真つ一ツ……ではなく四つに切れた。氷は切断面が凍つた。

他にも色々出来そうではあるが、とりあえずこれだけでも十分すぎる。

それからは、魔法剣を作り出す工程を素早く行う訓練をしたが苦労することもなく一瞬で出来るようになってしまった。

一度覚えたものは簡単に出来るようになるらしい。これもチートか。

* * *

「と、いひ」と、これが俺の新しい武器だー。」

夜、夕飯を終えた俺はクラシックメンバーに得意気に魔法剣を作つて見せた。

「…………」

皆が皆、ポカンとしたようにそれを見る。

「な、なにそれなにそれなにそれー!？」

一番早く正氣を取り戻したフェルが鼻息荒く胸倉を掴んでくる。

「見たことない技術ね。切れ味も鋭いし……」んなのランクUだつて無理よ

え？ 僕、またマズッた？

「さっすぐシユウー！」

抱きついてくるアリアは……多分何にも考えてない。

「もうシユウジが何をしても驚かないよ

ジルは呆れてるっぽいし。

「えへっと……あ、そうだ！ 僕用事があつたんだった！」

俺はその場を逃げ出した。背後からフェルが「待つて！ それやり方教えて！」とか言つてるのが聞こえてきたけど無視だ。

* * *

逃げ出した俺は街中を歩いていた。

街中と言つても街灯とかはなく薄暗い。

「はあー……俺、なんで考えなしにああいつことしちゃうんだろ

落ち込みながら、昼間リヴィと話した店の方へ足を向けていた。

「あのときは早く試してみたくてリヴィを置いて行っちゃつたけど……今更戻つたところでもう居ないよな。つーか怒つてゐ……よな

あ
「

あのリヴィーの」とだ……会つたら罵罵雜言で罵つてくれるに違いない。

「早めに謝つた方がいいよな」

そう思つた俺はギルドに向かつて、リヴィーのクランの場所を訊いて謝りに行くことにした。

あわよくばサー・シャにも会えるといいなあとか思いながら足早に向かつ。

* * *

「な……んだ、これ……」

教えられた場所に着いた俺は呆然とした。

「どうなつて……嘘だろ」

家屋はボロボロ、所々から火の手が上がり黒煙が空へ向かつ。

「サー・シャ！ リヴィー！」

俺は急いで建物の中に入つていいく。

入つた瞬間外とは比べ物にならないほどの焦げ臭さが鼻を襲つ。

「リヴィー！」

入つてすぐ、倒れるリヴィと鎧姿の男が目に映つた。急いで駆け寄る。

「リヴィ！ 大丈夫か！？」

「……う……シユウ、ジ？」

生きてる！

「何があった！？ それに、この人は……」

リヴィの隣で倒れる男に視線を向ける。

鎧ごと胴をななめに切りつけられ身体の下は血の海で、もう生きていないと確信できるような有様だった。

「クランの……リーダー……アタシを守つて……」

リヴィのクランのリーダーは……確かにランクUじゃなかつたか？ そんな人を殺すなんて、一体何者なんだ。

「何があった！？ サーシャも無事か！？」
「サ、サーシャ……サーシャとガイが」

ガイ？ 誰だそれ。

「そいつと一緒にいるのか！？」

「クリと頷く。

「無事……なのか？」

俺の言葉に悲しそうな表情を見せたり、ヴィはフルフルと小さく首を振る。

「サー・シャヒガイが……」

涙を零し、

「……………」それを、リーダーを……殺し、た

そう、告げた。

なん……だつて？

サー・シャが……」それを？

「……嘘だろ」

あのサー・シャがこんなことするはずがない。

「事実…………でも、サー・シャの様子が……変だった」

でも、リヴィがそんな嘘をつくはずがない。
なら、これは事実だ。

サー・シャがやつた。

そして、もう一人、ガイという人物が。

「なんで……こんな……」

リヴィはそう呟いて泣き出しちゃった。

「俺が会つて確かめてくる」

「無理……だよ。ランクSのコーダーでも……手も足も……出なかつた」

「それでも……確かめなきゃいけない」

俺はサー・シャの親父さんにアイシのことを頼まれてんだ。
いわば、俺は代理の保護者。

だから、何が何でも会つて、何でこんなことになつてんのか確かめなきゃいけないんだよ。

「何か理由があるんだろ。じゃなきゃサー・シャが親友のお前にこんなことするかよ」

「…………シユウジ」

「全部、俺が確かめてくる。だからお前は休んでろ」

「…………うん」

それ返事をしてリヴィは意識を失つた。

俺はリヴィを抱き上げる。

「絶対……お前の目の前にサー・シャ連れてきてやるから

意識のないリヴィに回復魔法をかけ、全速力で俺の部屋へ連れ帰つた。

第四章 一話崩壊（後書き）

まず、更新遅れて申し訳ありません。
軽く書けない状態になつてました。

あまりにも書けないんで他の小説を新しく書き始めてしまつたり、
それも今日が明日あたり掲載しようかと思います。

あと2話で終わる予定。

次の世界はどうしようかなあ……。

第四章 二話 大切

ドバンシとドアを蹴破る。
リヴィをおぶつているし、一刻も早く休ませてやりたかったから
だ。

俺はまかはやつむとリヴィを布団に運び、部屋に向かった。

「な、なに?」

シャワーでも浴びたのか、タオルで髪を拭いていたクロエが玄関
を確認しに出てきた。

「シユウジ……その娘は……リヴィはどう?」

クロエと一緒に玄関に来たジルが俺の背負つリヴィを見て呟いた。

「あ、ほんとだ」

アリアもジルの隣でリヴィを見た。

「どうか、クラシックメンバー全員が玄関に出てきていた。
まあ、そりや、いきなり玄関が蹴破られたら確認に来るよな。

「どうあえず説明は後でするから! みんなはリビングで待つてて
!」

そう言って俺は階段を登った。

リヴィを布団に寝かせる。

穏やかな寝息をたててているのを見て一安心だ。服に血はついているものの、田立つた外傷もなくなっているところを見るに回復魔法もちゃんと成功したらしい。

「それにしても……サー・シャガ……」

リヴィイが意識を失う前に言つていたことが未だに信じられない。だつて、あのサー・シャガがあんなことするなんてとても信じないが想像すら出来ないから。

何か原因があるはずだ。

多分、リヴィイの言つていたガイつて奴が関わつてる。

それ以外に理由は思い当たらない。

最悪、サー・シャガが洗脳されている可能性もある。

「絶対突き止めてやる。サー・シャガも無事に連れ帰つてみせるから待つてくれ」

俺はリヴィイに布団を掛けて部屋を出た。

* * *

「せつしきのはリヴィイホドセと……だよね？ 何があつたの？」

リビングに入ると皆椅子に座つて真剣な表情でこちらを見ていた。皆、優秀なギルド員であり、俺がリヴィイを背負つてきた時点で事件の匂いを嗅ぎ取つていたとしてもおかしくない。

クロエなんか優秀も優秀、ランクAの凄腕なんだからな。

全員を代表して、背負っていた人物……リヴィーのことを知っているジルが話しかけてきた。

「うん」

俺はジルに頷いて椅子を引っ張り出して腰掛けた。

「リヴィーの……さつき背負つてきた娘のクランが潰された」

俺は見てきたことを説明した。

リヴィーの所属するクランが宿舎」と破壊されたこと。リーダーであるランクSのギルド員まで無残に殺されていたこと。そして、意識を失う前のリヴィーの言葉も。

「ガイ……確かにそう言つたのね？」

クロエが真剣な眼差しで問いかけてきた。

「ああ。そいつがやつたんだろう」

「でも、おかしいわ。アイツにリーダーを殺す……といふか、まともに戦える力なんてないはずよ」

「知ってるのか？」

「ええ、元同僚よ。そして、潰されたクランは前まで私が居たクラン。リーダーの強さも良く知ってるわ」

クロエの実力ならあのクランにいても違和感はないな。

「じゃあ、ガイって奴の事も詳しい？」

「それほどじゃないわね。嫌な奴だったから近づかないようにしてたものの」

なるほど。

嫌な奴、か。

「サー・シャが洗脳されてる可能性は？」「こんなことする娘じゃないんだ」

「そんな術は持つてなかつたはずだけど……私が抜けた後に身につけた可能性もあるわね。人の心をどうこうするのに躊躇いがあるような人間じゃないし」

言葉の端々から嫌悪感が感じられる。

恐らく、クロエがコレほど嫌つてることからまともな奴ではないんだと思つ。

「そんな人間が、何故あれほど有名で人気もあるクランに所属していたんですか？」

ジルが尋ねる。

「あいつはね。リーダーの弟なの」

身内でランクもそこそこだつたからクランに入れてしまったのか。

「優秀な兄を殺してやりたいほど憎んでたつて感じか」

よくある話だよな。

優秀な兄弟、感じる劣等感。

「とにかく、まずはギルドに連絡よ。あれだけの規模のクランが潰されたのだからギルドをあげての捜査になるわ」

クロエが言つ。

だが俺は、そんな悠長なことを言つてはいる余裕はない。

「俺はすぐにでも探しに行くぞ。サーチャは絶対助けるんだ」

「駄目よ。相手の力が分からぬ。最低でもリーダーを殺す『何か』がある」

「それでも、俺はサーチャを連れてくるつて約束したんだ」

サーチャの親父さんからもアイツのことを頼まれてる。クランを作りたいだの何だの言つてサーチャから離れてしまつた俺にも責任はあるんだ。

「シコウジ。貴方が行つて助けられる保障はない。それどころか…」

「貴方も殺される可能性のほうが大きいわ」

「大丈夫。俺がやられることはないよ」

「今は怒りでそう思うかもしれないけど貴方のランクは…」

「ランクだけが全てじゃないよ。それに俺はみんなに隠してることもあるから」

「隠したこと?」

「うん。ジルやアリア、それにフェルにはその一端を見せたこともあるんだけど」

チートのことだけだ。

今回、俺は最初からミッターとか言つて能力を抑えるのを辞める。

全力でサーチャを取り戻す。

「あの力……」

「ああ、あれね」

「ドラゴンを倒したときのやつですね~」

三人はそれぞれ思い当たつたのか納得していた。

「なにそれ？」

クロエは不思議そうな顔。

「まあ、言つても分からないと思つけど…… とりあえず「ランク1」でも戦える」

てか勝てる。

チート全開なら多分瞬殺。

「とにかく駄目！ 相手の居場所も分からんんだから、早く助けたいなら搜索にギルドも使って人員を当てるべき」

たしかにクロエの言つことは最もだ。

俺が一人でやるより、ギルドに知らせて大人数でここにあたつた方が圧倒的に早く搜索出来る。

普通は、だけど。

「それは大丈夫。さっきは焦つてたから分からなかつたけど、リヴィを倒した奴の魔力反応を辿れば居場所は特定できる」

確かにスキルに魔力追跡とかそういうのもあつたはず。

ステータス画面を開き確認する。

あつた。

チートで取得。

さらに回復系、解呪系など役に立ちそうなものを悉く取得してお

く。

「それは……本当なの?」

「うん。本当。今なら手に取るように分かる」

スキルを取得した瞬間、リヴィのクランの辺りにあつた魔力反応を思い出し、さらにじつちの方にいる今まで理解できた。完全に後を追える。

「本当に勝てる見込みはあるの?」

「俺さ、大切な人に手を出されて、今、本氣で怒ってるんだよね」

俺はクロエを真っ直ぐ見返す。

「絶対に負けない」

「言い切った。」

「…………そう。分かったわ」

クロエは諦めたように呟いて、

「皆、すぐに出発の準備を!」

クランメンバー全員に向けて言い放った。

「ちよ、クロエ! ? 危険だし俺だけで行くから、皆は来る必要はないじゃない。これは私達全員でやらなきゃいけない事件よ

」

「危険だから……そんなところにショウジだけで行かせられるわけないじゃない。これは私達全員でやらなきゃいけない事件よ

「でも、皆は関係ないのに」

「貴方の大切な人が利用されて、傷つけられて……それは私の大切な人が傷つけられたのと一緒に事よ。私達は同じクランのメンバーなんだから

「クロエ……」

「さ、移動の邪魔にならない程度に役に立つものは全て用意しなさい！」

皆が皆、反論もなく頷いた。

その後すぐに、俺達は魔力を追跡し、敵のもとへ向かうのだった。

第四章 二話 大切（後書き）

新しい連載を始めました！

こつちが疎かにならないよう頑張ります。

と言つても更新遅くなりましたが……。

あと一話……終われるか？

凄く長くなるか、もしかしたら一話に分けるかもしれません。
その場合一話投稿、同時には出来ないとしても同じ日に出来るよう
にしたい。
せめて一日以内に。

次の世界マジビリシヨウ。

リリカルはもう一つの方でやつてゐるし……
禁書、ゼロ魔、東方
人気で行けばこの辺とか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6232m/>

永遠に続く刻の中で

2011年6月17日03時14分発行